

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

日常生活に生じる会話終結の記述

—活動の連続からみる会話の組織—

居關 友里子

2015 年度

目次

1章	はじめに	1
1.1.	日常生活における会話と会話終結.....	1
1.2.	会話研究における会話終結.....	2
1.3.	本研究の背景と目的.....	3
1.3.1.	会話終結研究における本研究の位置付け.....	3
1.3.2.	本研究の目的.....	4
1.4.	分析の視点.....	4
1.4.1.	エスノメソドロジー.....	5
1.4.2.	会話分析.....	5
1.4.2.1.	順番交替.....	6
1.4.2.2.	隣接ペア.....	7
1.5.	本研究の立場.....	8
1.5.1.	本研究における「活動」、「相互行為」、「会話」の位置付け.....	8
1.5.1.1.	日常会話場面.....	9
1.5.1.2.	制度的場面.....	10
1.5.2.	本研究の扱う会話終結.....	10
1.6.	資料収集の方法.....	11
1.7.	会話資料概要.....	13
1.8.	書き起こし.....	15
1.9.	本研究の構成.....	17
2章	先行研究	20
2.1.	本章の概要.....	20
2.2.	会話の全域的組織.....	20
2.3.	会話終結に関する先行研究.....	21
2.3.1.	会話終結とは.....	21
2.3.2.	主な分析対象.....	21
2.3.3.	発話連鎖と発話機能に関する研究.....	22
2.3.3.1.	Schegloff & Sacks(1973).....	22
2.3.3.1.1.	順番交替システムと会話終結.....	22
2.3.3.1.2.	終結の手続き.....	22
2.3.3.2.	Clark & French(1981).....	23
2.3.3.3.	日本語への応用.....	24
2.3.3.4.	他言語との対照研究.....	25

2.3.4.	会話終結の習得・学習に関する研究	26
2.3.5.	その他の終結に関する特徴の研究	26
2.3.6.	電話以外の会話の分析	27
2.3.7.	本研究との関係	27
3章	日常会話の終結	
	—立ち話の観察から—	29
3.1.	はじめに—日常生活に生じる会話とその終結—	29
3.2.	終結直前における終結の組織	31
3.2.1.	事例1「ハナメシ」の終結	34
3.2.2.	事例2「楽譜」の終結	36
3.3.	最後の話題における終結の組織	38
3.3.1.	事例1「ハナメシ」の最後の話題	38
3.3.2.	事例2「楽譜」の最後の話題	40
3.4.	話題の配列における終結の組織	41
3.4.1.	開始部分(抜粋 3-5(1))	44
3.4.2.	最初の話題の終了部分(抜粋 3-5(2))	44
3.4.3.	からかいへの推移部分(抜粋 3-5(3))	45
3.4.4.	最後の話題(抜粋 3-4)	46
3.4.5.	終結(抜粋 3-2)	47
3.5.	おわりに—終結に向けた局所的・全域的組織—	48
4章	制度的場面における会話の終結	
	—実習反省会の観察から—	51
4.1.	はじめに	51
4.1.1.	制度的場面	51
4.1.2.	本章の位置付け	52
4.1.3.	観察の手順	53
4.2.	実習反省会の終結	54
4.2.1.	観察の焦点	57
4.2.2.	終結の組み立て 1—日常会話に類似した組み立て—	58
4.2.3.	終結の組み立て 2—日常会話と異なる組み立て—	62
4.3.	実習反省会における制度	63
4.3.1.	実習反省会の構造	63
4.3.1.1.	実習反省会の構造への志向	65
4.3.1.2.	構造化の手がかり	67
4.3.1.3.	制度的場面の構造と構造化の手がかりの対応付け	68

4.4. 終結の手続きへの志向.....	70
4.5. おわりに.....	73
5章 日常生活に生じる「活動」の一つとしての会話.....	76
5.1. はじめに.....	76
5.2. 分析の準備.....	76
5.2.1. 分析対象の概要.....	76
5.2.2. 本章の流れと主な主張.....	77
5.3. 具体的目的の達成を参照した終結の組み立て.....	79
5.3.1. 事例1「実習反省会」.....	79
5.3.2. 事例2「シューズ」.....	81
5.3.3. まとめ—具体的目的の達成と結びついた会話終結—.....	85
5.4. コミュニケーションの達成を参照した終結の組み立て.....	86
5.4.1. 事例3「ハナメシ」.....	86
5.4.2. 事例4「楽譜」.....	90
5.4.3. まとめ—コミュニケーションの達成と結びついた会話終結—.....	92
5.5. 会話以外の活動の達成を参照した終結の組み立て.....	92
5.5.1. 事例5「廊下」.....	93
5.5.2. まとめ—会話以外の活動の達成と結びついた会話終結—.....	96
5.6. 終結の組織に見る当該場面における会話の位置付け.....	96
5.7. おわりに—活動の連続の中に位置付けた会話の分析に向けて—.....	98
5.7.1. 事例6「メール」.....	98
5.7.2. もう一つの視点—前後に生じる活動と結びついた会話終結—.....	101
6章 共在状況に生じる「活動の連続」	
—学外実習における学習場面の観察から—.....	103
6.1. はじめに.....	103
6.2. 先行研究および本章の位置付け.....	103
6.3. 観察対象と観察の手順.....	104
6.3.1. 観察対象「合宿の形式で行われる学外実習」.....	104
6.3.2. 収録方法.....	104
6.3.3. やり取りの概要と本章が扱う部分.....	105
6.4. 自習・雑談終了とミーティング開始という境界.....	107
6.4.1. 観察1—境界以前—.....	107
6.4.2. 観察2—境界部分—.....	111
6.4.3. 境界の性質に関する考察1.....	113
6.4.4. まとめ1.....	115

6.5. ミーティング終了と自習開始という境界.....	116
6.5.1. 観察 3—境界部分—	116
6.5.2. 境界の性質に関する考察 2.....	118
6.5.3. まとめ 2.....	120
6.6. フィールドの性質との関係.....	120
6.7. おわりに.....	122
6.7.1. 日常生活に生じる活動の境界の可能性	122
6.7.2. 日常生活を構成する成分としての会話	123
6.7.3. 残された課題	123
7章 今後の会話終結研究に向けて	125
7.1. はじめに.....	125
7.2. 会話終結場面の整理	125
7.2.1. 参与者同士の接触の切断のあり方.....	125
7.2.2. 会話の活動としての性質.....	127
7.2.3. 分析対象の偏りを埋めるために	128
7.3. 会話終結と活動の連続という視点	129
7.3.1. 制度的場面における会話に見られる活動の連続	129
7.3.2. 立ち話に見られる活動の連続.....	131
7.3.3. 活動の連続という視点の可能性	132
7.4. おわりに.....	133
8章 おわりに.....	134
8.1. 本章の概要	134
8.2. 各章のまとめ.....	134
8.2.1. 会話終結の記述.....	134
8.2.2. 活動の連続という視点	136
8.3. 会話研究および他の領域への貢献	136
8.4. 課題と展望	137
参考文献.....	140
《日本語文献》	140
《英語文献》	143
各章と既発表論文・口頭発表との関係	148

1章 はじめに

1.1. 日常生活における会話と会話終結

相互行為は日常のいたるところで生じている。普段特に意識することはない時であっても私たちはこれを行っており、例えば Goffman(1963)の指摘するように二人以上の人間が同じ空間にいるだけであったとしても、そこには相互行為が生じている。この相互行為の一つの形である会話¹は、人びと同士の間を担う最も主要な営みの一つである。私たちが普段、社会の一員として行動していることをあえて意識するようなことはそれほど多くないが、このような日常で繰り返される会話は、その一つ一つが社会を形づくる実践となっている。

本研究で焦点を当てるのは、この会話の中に生じる「終結」という部分である。会話の終結という位置は会話の一部であるという以上に、ここまで前に進めてきた、あるいは維持してきた相互行為における切れ目の部分をやりくりするという点において重要な意味を持つと考えられる。

会話の終結の一例として挙げられる「別れ」の場面について田中(1982)は、コミュニケーションという観点から次のように捉えている。

「「別れ」が起こる前の段階は会話、あるいは何らかの接触が持続していて、当事者間の関係はプラスの方向に高まっていると見ることができる。また一般にそのプラスの方向への高まりを維持しようとする力が働いている、すなわち会話でいえばとくに理由がない限り会話を続けていこうとする力が働いていると考えられる。ところが「別れ」が起こる際には、その維持しようとする力とは逆方向の行動に出る必要があり、それゆえ、互いの関係にマイナスの影響を与えるおそれがある。そこで、それは何らかの形で「つくろう」必要が出てくる。」(田中 1982: 38)

つまり相互行為の「別れ」に特有の課題として、参与者同士の関係の間に生じるマイナスの影響を「つくろう」必要があるとされ、これが別れの際の言語行動や非言語行動とし

¹ 本研究では「会話」という語を日常会話(ordinary conversation)と相互行為における言語活動(talk in interaction)の両者を含む意味で用いる。本章 1.5.1 節で詳述する。

で現れているとしている。会話の終結の重要性の一つには、このような人間関係の維持に生じる不安定さのやりくりがなされるという点が挙げられる。

「別れ」以外の形で生じる会話終結というものも存在すると考えられる。例えば何らかの窓口でその場限りの相手とのやり取りが終わるような時、また会議のような事務的な会話が終わるような時について考えてみると、これらも当該会話をともに組み立ててきた参与者間の相互行為が一旦終結するという点から見ると会話終結として捉えることができそうである。ここでは田中が指摘するような当事者間の関係の高まりや関係をつくろうようなことは必ずしも必要とされないが、これまで進行してきたやり取りをまとめ上げる、あるいは異なる会話や活動に切り替えるという点から、相互行為において参与者たちの力が加えられる重要な位置であるとやはりいうことができるだろう。

このような会話上に生じる終結という部分を私たちはどのように作りだしているのだろうか。ある会話で誰も話さない時間が生じ、その後発話が生じたとする。この沈黙が会話終結でなかったことは、その後発話が生じたという結果を知っているために分かるだけでなく、沈黙が生じているその瞬間にも分かることが圧倒的に多い。つまり会話終結とは、発話することをやめることで沈黙が生じ、結果的にその後も発話する人がいなかったというような状態を指すのではない。それが終結であることが、参与者の全員にその瞬間にも了解されるように示されていると考えられる。これが日常に生じる相互行為の中でどのように行われているのかについて、本研究では焦点を当てる。

1.2. 会話研究における会話終結

会話を分析対象に、様々な研究領域がこれに取り組み、多くの研究成果の蓄積がなされている。例えば、会話の構築や理解を可能にする様々な言語形式がどのように用いられているのかに関して扱うもの、また言語が特定の社会や文脈の中でどのように選択され、用いられるのかといったことや、特定の言語の意味が解釈される枠組みについて明らかにするものなどがある。他にも会話そのものを継続させていく上で必要とされる、私たちが用いている基本的な知識や、また特定の発話の連なりに加えられる制約や一定の型などが明らかにされてきた。

会話の終結もこういった観点をはじめとし、研究の対象として扱われてきたものの一つである。会話全体を一つのまとまりとし、その中に位置付けられた会話の締めくくりを担う部分について、用いられる言語形式や観察される行為の種類、また発話連鎖の組み立てなどがこれまで研究されてきた。詳しくは2章で取り上げるが、以下ではその研究の流れ

の大枠について触れておきたい。

1.3. 本研究の背景と目的

1.3.1. 会話終結研究における本研究の位置付け

本研究の目的は、日常生活の中で生じる会話終結について記述を行うことである。まずはその背景について述べる。

会話終結に関する研究の最も中心的で基礎的なものは、電話会話の分析を基としたものである。電話回線を切る直前になされる行為について(Albert & Kessler1978 ほか)、発話の連なりに見られる偏りに関して(Schegloff & Sacks1973; Clark & French 1981; Button1987 ほか)などが明らかにされてきている。対面で生じた会話の終結に関しては、制度的な文脈に生じた相互行為が主に扱われており、特に多く扱われているのは診療場面である(Robinson2001 ほか)。これは相互行為の質が直接医療現場の実践の質に関わるといふ、現実的な理由によるものと考えられる。

日本語で行われた会話の終結に関する研究は、そのほとんどが電話でなされた会話の分析を中心としたものであり(岡本 1991; 小野寺 1992 ほか)、英語会話の終結に関する分析で得られた知見をもとに進められてきた。一方の対面で生じた会話の終結については、ロールプレイという特殊な状況を除き、ほとんど扱われてきていないという現状がある。

電話会話とそれ以外の会話場面、この二者の間にある差としてまず頭に浮かぶのは、視覚資源の使用の有無であると考えられる。しかしそれだけではなく、電話会話は相互行為の場のあり方について、他の対面で行われる相互行為に対し特殊な位置付けを持つ点にも注目すべきである。見城(2006)は、電話は受け手側で既に生じていた相互行為に新たな相互行為の場を強制的に発生させるものであり、先に生じていた相互行為における参与のあり方を強力に歪めるものになり得ることを指摘している。ここでの参与者は、自身の身体がある場と電話回線で繋がれた場という、切り離された二つの場の両方に同時に関わるといふ特殊な状況におかれているといえる。また電話は必ず参与者の一方がもう一方に向けて開始するものである。その冒頭ではしばしば電話を掛けた理由が述べられ、特にない場合であっても「特に何ってことはないんだけど」などのように、用件が無いことをあえて述べる。そのため電話はあえて電話をするに値する、何らかの用件がある際に設けられる相互行為の場であるという期待がある。そして電話による相互行為の場は、回線が繋がれて切られるまでという明確な境界を持って現れる。

このように見てみると、会話終結の基礎的な知見を引き出す際に分析対象とされてきた

電話会話は、私たちの日常生活で行う会話場面の中に位置付けてみると、むしろ特殊な性格を持った相互行為の場として生じていると考えることもできる。そして今もなお主な成果として Schegloff & Sacks(1973)の電話会話の記述から得られた知見が、会話終結研究の分析の基盤として引用されることが多い。このことは彼らの分析の的確さを示す一方で、未だ目を向けられていない会話場面が残されていることをも意味しているように思われる。

私たちは電話以外での会話を日常でより多く体験しているはずであり、その多くは時間的に一続きに繋がっている、一人一人の身体があるところに絶えず生じる相互行為の場の中で生じているものである。

1.3.2. 本研究の目的

これらの背景を踏まえ、本研究は以下の二点を目的とし、会話終結について見ていく。一点目は、日常生活の中で体験されている終結場面がどのようになされているのかについて、周辺的な場面も含め記述を行い、先行研究の分析対象の偏りを埋めることである。そして二点目として、複数の相互行為が時間的に隣接して生じる、言い換えるならば活動の連続の中に会話が生じているという観点を導入し会話および会話終結について扱うことを通して、会話終結研究に対する新たな知見を得ることである。

【本研究の目的】

I 会話終結の記述

日常生活の中で体験されている会話終結がどのようになされているのかについて、周辺的な場面も含め記述を行い、先行研究の分析対象の偏りを埋める。

II 活動の連続の中に位置付けた会話および会話終結の考察

会話が活動の連続の中に生じているという視点を取り入れることによって、会話および会話終結に関する新たな知見を得る。

1.4. 分析の視点

本研究では会話資料を見る際、そこに観察される参加者の振る舞いをもとに、彼らがどのように会話終結を組み立てているのかについて考察する。以下では私たちの日常で用いている方法について、行為者の振る舞いをもとに見出そうとする研究の視点を持つ、エスノメソドロジーと会話分析について概要を述べる。

1.4.1. エスノメソドロジー

エスノメソドロジーは、1950年代から60年代にかけて、Harold Garfinkelによって創設された(Garfinkel1967)。人びとが日々の活動を行う中で用いている秩序立った方法について明らかにする学問分野である。研究の出発点は、様々な社会的出来事に対してそこで「何が起こっているのか分かる」ということである。私たちは現実的な関心に基づいて何らかの活動を行う時、場面やそこにいる人びとの活動にある秩序立った特徴、言い換えると、見て理解することができ、また説明することもできる特徴をあてにしている。

そして私たちは、このことが私自身のみならずそう見えるのではなく、他の複数の人からも同様にそのように見えることを期待している。たとえば化粧室につながる通路に人が立っており、その後ろにも人が立っており、さらにその後ろにも人が立っていると。これを見て私たちは、単純に三人の人間が寄り添って立っているだけでなく、彼らが化粧室を使うために列に並んでいることが分かり、またそのように説明することもできる。そして自身も化粧室を使おうとした時は、三人が利用している方法と同様に、三人目の後ろに並ぶという方法を利用するだろうし、5人目が現れた時は、ここで人びとが「順番を待っている」と彼が理解し、自身の後ろに並ぶことを期待する。このように私たちはあらゆる実際の活動を行う上で、その場面の様々な特徴が誰にとっても同じ秩序立った意味を持っていることを期待し、それに基づいて振る舞っている。

このような秩序は、社会学者が専門的な知見をもとに私たちの振る舞いを外側から観察することで見出されるものではなく、そこにいる当事者たちの振る舞いの中に見いだされるものである。つまりエスノメソドロジーが関心を寄せる秩序とは社会学者によってつくられたものではなく、私たちが持っており、使っている秩序である。そして分析者が記述する対象は、当事者たちがそこにある事物にどのように関わるか、その特定の関わり方「志向」の反映である、当事者たちの振る舞いである。

1.4.2. 会話分析

日常の様々な実践の一つに、人と言葉を用いて行為を行うという実践がある。ここにある秩序について明らかにしようとする会話分析の分野は、エスノメソドロジーにおいて大きな成果を上げてきた主要なものである。Harvey Sacks が会話という社会的活動における秩序立った方法に着目したことを皮切りに、会話を行う際に人びとが用いている方法についての研究が現在も盛んに行われている。

会話分析における研究主題は、連鎖組織の分析と成員カテゴリー化分析²の二つが挙げられるが、今日主要なものとなっているのは前者である。連鎖組織の分析とは、発話を通してなされる行為がどのように繋がられていくのか、その仕組みについて分析するものであり、Sacksに加えて Emanuel Schegloff、Gail Jefferson の貢献が非常に大きいとされる。以下では本研究でも分析に際し使用する、会話分析の成果の中で特に重要な概念について取り上げ、概要をまとめておきたい。

1.4.2.1. 順番交替

会話には、特別な場合を除き、会話参加者が順番に話すという基本的な特徴が見出せる。より厳密に言えば、一時に一人だけが話し、また誰も話していない時ができるだけ短くなるように私たちは会話を進行させている。時には二人以上が同時に話すということや、誰も話さないでいることが起こるが、いずれの場合もその時間は短い。

このようなことはどのようにして可能になっているのだろうか。Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)は、会話参加者たちが発話を行うに際し、「順番交替システム(turn taking system)」に則って振る舞っていることを発見した。順番(発話順番, turn)とは一人が話しはじめてから話し終えるまでの一連の発話を指し、これを話す際に話者が手にしている一本のバトンに相当するもの、発話権が参加者間で引き継がれ、順番が連なっていくことを順番交替と呼ぶ。順番交替システムは二つの構成部分と一組の規則群からなっている。それぞれについて以下に示す。

■構成部分 1：順番の組み立てに関わる構成部分

話者は一つの順番を組み立てる時、一つ以上の順番構成単位(Turn Constructional Unit, TCU)を組み合わせることでこれを行う。TCU を構築するに際し、様々な単位タイプを用いることができる。語や句、節といった文法的単位、あるいは言語学的に定義されるような単位に一致しないものもここに含まれる。これらの単位タイプによって構成された TCU は、その単位の構造やイントネーション、文脈的情報などといった複合的な要因を手がかりに、産出されている最中に、それがいつどのように完結するかについて他の会話参加者が予測することを可能にする構造を持っている。

² 成員カテゴリー化分析とは、人びとが会話の中で種々のカテゴリーを用いて常識的な知識を組織化することに注目し、この使用について分析するものである(Francis & Hester2004)。

■構成部分 2：順番の割り当てに関わる構成部分

次の順番の割り当ては、次の二つのいずれかが用いられる。

- 1) 現話者が次話者を選択する。
- 2) (現話者ではない)次の話し手が自身を次話者を選択する。

■規則群

そして発話順番の受け渡しは、次のような規則に沿って行われる。

- 1) 全ての順番について、最初の TCU が順番の移行に適切な場所(Transition Relevance Place, TRP)の最初の場所に至った時に、
 - a) 現在の順番のそれまでの部分において「現話者が次話者を選択する」ための技法が用いられて組み立てられているならば、選択された者が次話者となる権利と義務を負い、順番が交替する。
 - b) 現在の順番のそれまでの部分において、「現話者が次話者を選択する」ための技法が用いられて組み立てられてはいないならば、次の発話者になろうとする者によって、自己選択という方法が用いられてよい(用いられなくてもよい)。このうち最初に話しはじめた者が次の順番を取得する権利を得て、順番が交替する。
 - c) 現在の順番のそれまでの部分において、「現話者が次話者を選択する」ための技法が用いられて組み立てられてはいないならば、現話者は、次話者が自己選択を行わない限りにおいて話し続けてもよい(続けなくてもよい)。
- 2) もし最初の TCU が最初の TRP に至った時に(1a)も(1b)も行われず、また(1c)が行われた(つまり順番交替なされず発話順番が継続している)場合、次の TRP で(1a)から(1c)の規則群が再度適用される。これが順番の交替が行われるまで繰り返される。

会話参加者たちはこのようなシステムに則って振る舞うことにより、いつ誰が話すのかについて事前の打ち合わせを行わずとも、順番と順番同士の間を生じる沈黙や、順番同士の重なりが短くなる形で、順番を交替することが可能になっている。

1.4.2.2. 隣接ペア

隣接ペアは会話で用いられる発話同士の結びつきの基本的な単位である。隣接ペアは以下の 5 つの特徴を持つ(Schegloff & Sacks1973)。

- 1) 第一成分と第二成分という二つの部分からなる。
- 2) この二つは隣接した位置に生じる。
- 3) 第一成分と第二成分はそれぞれ別の話者によって産出される。
- 4) 第一成分が先に、第二成分が後に産出されるという順序がある。
- 5) 第一成分は対応する第二成分を要求する。

隣接ペアの一つである「質問-応答」というペアを例として考えてみる。Aが「昼なに食べた?」という質問をBに向けて行った時、Bが次に発話するのは食べたものを答える発話「蕎麦だよ」、「なんか定食みたいなの」などであると予想できる。もしこのような応答がなかった時、私たちはAが「何も食べなかった」などとは理解せず、応答が行われていないと理解する。実際に行われなかった時にそれが「行われていない」と分かるのは、それが本来「行われるべき」であるという期待があるため可能になることである。そのため隣接ペアとは、結果的に隣接して起こった二つの発話をそう呼ぶといったものではなく、私たちが会話中で実際に用いている、規範的な期待を生じさせるシステムであるといえる。

以上では順番交替システムと隣接ペアについて概要をまとめた。これ以外の概念については、分析に使用する際に必要に応じて説明を加えることにする。

1.5. 本研究の立場

本研究の関心は、私たちが日々の相互行為の一部である会話の終結をどのように体験しているのかについて知ることにある。これは先に挙げたエスノメソドロジーや会話分析の視点と重なるため、この視点を参考に、当事者たちが当該の出来事をどのように理解し組み立てているのかを反映する当事者たちの振る舞いについて観察、記述する。

また一方で本研究では、個別の会話場面の観察をもとに、扱う会話場面全体を可能な限り現象に沿って矛盾なく整理することを目指す。扱う資料はその性質について必ずしも統制がとれたものではないが、ここで行われていることを捉えやすくする手法であれば、特定の手法に限らず使用していくことにする。

1.5.1. 本研究における「活動」、「相互行為」、「会話」の位置付け

本研究の目的、活動の連続の中に生じた会話および会話終結について考察を行うに際し、用いる基本的な概念について本節で述べる。取り上げるのは「活動」、そしてその一部である「会話」、ここで生じている「相互行為」が指すものおよび相互の関係である。

本研究では相互行為における発話による言語活動全般を「会話」と呼ぶ。言語活動の質自体は問わない。いわゆる会話としてイメージしやすい「立ち話」、「休憩中の雑談」などから、会話という語で指すには馴染みのないもの「授業」、「会議」、「商談」などまでを広く含む。

そして会話は「活動」の一つの形に位置付ける。活動が何を指すものなのかについての定義は容易ではないが、日常生活を構成する一連の行為によるまとまりを指すことにし、自身が今の時間に何を行っているのかについて情報がない相手に答える水準、例えば「食事」、「授業」、「会議」、「宿題」、「通勤」、「散歩」、「立ち話」、「休憩」などといったものを活動として扱う。このうち「授業」、「会議」、「立ち話」などの言語行動は会話として位置付けたものである。また会話の例に挙げた「休憩中の雑談」は「休憩」という活動と平行して起こっているものとして扱い、活動は一時に複数が行われ得るものとして捉える。

さらに「相互行為」について、人びとが同じ空間に直接居合わせて相互にモニターし合える状況「共在状況」にある場合、ここには相互行為が生じているものとして扱う。会話などのように相手と直接的にやり取りするものだけでなく、電車に乗り合わせたり、人とすれ違うような場合も含む。会話として扱うのはこのうち発話のやり取りがあるものである。まとめると、本研究で扱う「会話」は「活動」のうち「相互行為」が生じており、さらにそこで「(発話による)言語活動」がなされているものを指す。

日常生活で体験されている会話終結について知るために、まずはどのような会話を私たちが体験しているのかについて知る必要がある。しかしながら具体的にどのような会話を行っているのかそれ自体についてが、現時点ではまだそれほど明らかになっていない³。一旦の指標として相互行為における言語活動、本研究でいう会話の特徴付けとして、一般に用いられることの多い「日常会話場面」と「制度的場面」の区分を参考に、扱う資料と終結場面について選定する。

1.5.1.1. 日常会話場面

日常会話場面の典型的なものとして想定されるのは、普段何気なく行うおしゃべりの場面である。ここで行われている会話は狭義の「会話(ordinary conversation)」に相当し、先に挙げた順番交替システム(Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)は、基本的にこのような会話

³ 近年、日常会話を元資料とした大規模コーパスの構築に向けた試みが開始されており(小磯ほか 2015)、この基礎調査として行われた日常生活で体験されている会話場面のアンケート調査の結果が小磯(2015)によって報告されている。

において参加者が志向するシステムとして想定されている。

1.5.1.2. 制度的場面

日常会話場面と制度的場面は、いずれに属するのか二者択一に選択される分類ではなく、連続的なものであると捉えられる(Heritage2005; Heritage & Clayman2010 ほか)。また双方の場面の定義が存在するわけではない。制度的場面における会話として分析がなされてきたものとして、法廷(Drew1992)、教室における授業(Mehan1979)、ニュースインタビュー(Clayman & Heritage2002)、緊急電話(Zimmerman1992)、診療場面(Heath1986)などがある。これらの場面にしばしば見られる特徴として Drew & Heritage(1992)が指摘するのは、以下の三点である。

- 1) 当該制度を想起させる目的、役職、アイデンティティに対する、参加者の志向がある。
- 2) そこで行われる仕事の遂行のために、参加者がどう携わるかについて、特定の制約が加えられる。
- 3) 推論の枠組みや当該制度の文脈に特徴的な手続きを想起させる。

当該場面が制度的なものであるのか否かは、実際の相互行為の中で参加者がこれらの制度に対して志向して振る舞う中で現れてくるものとして捉えられている。たとえそれが法廷で行われた相互行為であるという事実があったとしても、そこでの相互行為にこういった志向が見られず、例えばその場にいる全員が自由に順番を取得し、自由な話題を扱っているならば、それはもはや私たちが想像する「法廷場面」ではないものとして実現されていると理解される。詳細について4章で再び触れる。

1.5.2. 本研究の扱う会話終結

以上ではどのようなものを会話として扱うかについて述べ、さらにそこで用いる区分を紹介した。続いて会話の終結としてこれから観察していく部分について、概要を示しておきたい。会話終結として観察する箇所を選定する際の、本研究の特徴的な捉え方は以下の二点にまとめられる。

一点目は会話の終結と、会話よりも小さな単位である話題の終結との区別に関してである。最も明確に生じている会話終結の一つに、先程から取り上げてきている電話会話の終結を挙げることができる。これは会話の開始時に繋がれた電話回線が切断されることで明

確に示される。またここで生じている終結は会話ではないとまり、例えば話題の終結とも区別する意味があるものとして生じていると考えられる。私たちは一つの話題のみがやり取りされた会話であっても、電話を切る際には話題の終結だけではなく会話の終結が生じていることを見出すことができる。またいくつもの話題が扱われる時は、それぞれの話題の終わりではなく、やはり電話の最後の最後、回線が切られる際に会話終結が見出されるだろう。そのため本研究では、会話の終結を話題の終結と区別する。

二点目は会話の終結と、より大きな単位の終結との区別に関してである。典型的な会話終結として捉えられやすい場面の一つは、会話参与者同士の別れの場面であると考えられる。この場合会話終結に際し生じるのは、会話の起こっている状況から起こらない状況への移行である。その一方で、発話を伴った相互行為自体は継続していても一つの会話としては捉えにくく、二つの会話が隣接して生じていると捉える方が適切であると考えられる場合がある。

例えば 1.5.1.2 節で制度的場面の例として挙げた法廷において、閉廷直後に側に座る人たち同士で発話を交わしたとき、たとえそれが法廷やその中で扱われたことに関してであったとしても、これは法廷が継続しているものとしては聞かれないだろう。そのため本研究では法廷内で行われた言語活動と法廷が終わったあとになされた言語活動を、二つの異なる会話が隣接して生じているものとして扱うことにする。そのためこの箇所からは、会話終結として法廷の終結部分を抜き出すことにする。

まとめると、会話の起こっている状況から別の会話が起こっている状況への移行と捉えられるものが存在し、本研究ではこのような質の異なる会話が隣り合って生じる際、先の会話が終結し新しい会話が始まったものとして捉えることにする。この終結を見出す際には、当該会話の質的特徴が関係してくると考えられる。

大雑把ではあるが、まずは以上の基準をもとに会話終結場面を選定し記述を行っていく。本研究で具体的に会話終結として扱う箇所については、本章の 1.7 節で概要を示し、さらに各章の観察の中でも触れる。

1.6. 資料収集の方法

制度的場面における会話の収集に際しては、基本的に参与者はその場に申し合わせて集まることが行われると予想される。特定の部屋で相互行為が生じることが事前に予測できる場合、ここに収録機材を設置することでこれらの場面は捉えることができると予想される。

一方で日常会話に関しては、収集に際し困難が予想される。先行研究の扱う対象が電話会話に偏る理由にはいくつか考えられるが、その一つには資料収集の行いやすさ、困難さといった現実的な理由があると考えられる。先に述べたとおり電話という会話場面の資料は、比較的容易に収集でき、また明確な会話終結がほぼ確実に資料内に含まれる。

しかしながら私たちがごく日常的に行っている会話、またその終結はその他の状況においても生じている。しかし例えば友人との別れの場面などは、それがいつどこで生じるかが事前には特定しにくく、資料の収集自体が困難である。このような会話場面の資料を捉えるために、協力者に特定の場所に集まってもらい行う自由会話やロールプレイといった、従来の会話研究で中心的に採用されてきた方法を用いれば、資料の収集自体は可能である。しかしここで生じた会話は、自然な文脈に生じたものとは言いがたい。

そこで本研究では日常会話の収集に際し、協力者の一日の活動を追う形で資料を収集する方法(以下「日常追跡法」とする)を用い、資料収集を試みる。日常追跡法は特定の場面を指定せず、協力者に一日の活動を可能な範囲で連続して収録してもらうという形式をとる。このことによって、終結場面を参与者に特別意識させることのない資料を収録できるのに加え、生の日常という文脈に生じた会話資料をその前後に生じた活動と切り離すことなく捉えることができる。

協力者にはボイスレコーダーと必要に応じてピンマイクを身につけ、普段どおりの生活を可能な限り継続して録音してもらい、ここで収録した資料の中からプライバシーなどに支障のない範囲で音声資料を提供してもらった。提供された音声資料は内容を全て確認し、会話終結の生じている場面およびそれを含む会話と思われる部分を切り出し、文字化を行い分析に用いる。分析に用いる会話部分は、当該部分を文字化したものと音声資料を一度協力者に確認してもらい、会話の行われた場所や参与者間の関係、そこで受け渡されたものといった非言語的な情報を、参与者に認識可能であった限りで補足してもらった。

この方法で得られた資料では、以下のような問題点が排除できていない。一つは収録が屋内に限られないため、雑音などによって参与者の発話が非常に聞き取りづらい部分が一部生じてしまっていることである。分析で取り上げる資料は音声の比較的明瞭に聞き取ることのできた箇所を選定した。また映像資料がないことによって、かなりの大人数で行われた会話は話者が誰であるのかが特定しにくいため、このようなものは対象から外している。

また特定の場面を追うのではなく、協力者を追うこの方法で得られた資料は、協力者の属性を強く反映したものとなっていると考えられる。今回収録を依頼したのは大学生およ

び大学院生であり、提供された場面は学生の日常で体験する会話に偏っていることは否定できない。

そして映像資料の収集は現実的に不可能であったため、視覚的やり取りを分析に含めることができないという問題がある。このような問題点はあるが、それでも会話終結に対する記述を現実で体験されているものに近付けていく試みが必要であると考え、本研究では日常追跡法を採用することにする。

制度的場面の収集については、当該の集まりが開始する前に収録機材を設置し、終了後に回収するという方法で収集している。本研究では以上二つの方法を併用し資料収集を行った。

1.7. 会話資料概要

本研究で用いる資料の概要は以下のとおりである。

1) 日常追跡法で収集した資料

収集を依頼した協力者は以下の5名である(表 1-1)。

表 1-1 協力者一覧

協力者名	性別	年齢	録音日	総録音時間
Z1	男性	23(大学院生)	2011年5月	4時間48分
Z2	男性	22(大学生)	2011年5月	11時間58分
Z3	男性	21(大学生)	2011年5月	12時間18分
Z4	女性	19(大学生)	2011年5月	16時間4分
Z5	女性	19(大学生)	2013年10月	12時間55分

ここから抜き出した分析に使用した場面は以下の5場面である。

A. ハナメシ(Z3)

以前同じ飲食店で働いていた二人が大学で偶然出会い、立ち話を行った際のやり取りである。一方は学生であり、もう一方は数カ月前から同じ大学で勤務をはじめた社会人である。互いの近況や共通の友人について話されている。7分程度の資料であり、二人が発話のやり取りを終え別れる箇所を会話終結として観察する。詳しくは3章で示す。

B. 楽譜(Z2)

同じサークルに所属する二人による立ち話である。後輩である参加者の一方が、サークルで今後用いる予定の楽譜を先輩に渡すために、先輩の研究室がある建物の下まで持っていった際のやり取りである。楽譜の受け渡し、今後の練習日程の共有などが行われている。やり取りは3分程度である。二人がやり取りを終え別れる箇所を会話終結として観察する。詳しくは3章で示す。

C. メール(Z5)

サークルの先輩と後輩である二人が、大学構内を移動中に偶然出会った際のやり取りである。後輩の方はある事情で先輩と連絡を取りたがっていたが、それが叶わずにいたため、偶然出会ったこの機会に連絡手段を確保しようとしている。40秒程度のやり取りである。二人が別れながらやり取りを締めくくる箇所を会話終結として観察する。5章で扱う。

D. 廊下(Z1)

友人同士である二人が歩きながら会話を行っている場面である。参加者の一方が次の講義に参加する部屋までともに移動し、別れている。ここでは移動の最後、建物内の廊下を歩きながら交わされたやり取りを扱う。気温の変化や建物の耐震構造についてなどが話される。二人が別れる箇所のやり取りを会話終結として扱う。5章で取り上げる。

E. シューズ(Z1)

ともにショッピングモールで買い物をしていた友人同士である二人組が、スポーツ用品店で店員にランニングシューズの売り場を尋ねる場面である。30秒程度のやり取りである。情報の授受を終え、客と店員がやり取りを終える箇所を会話終結として観察する。詳しくは5章で扱う。

2) 場面を固定し収集した資料

F. 実習反省会(反省会)

2011年5月に実施された、大学の学部生および大学院生向けの実習科目の一部として行われた反省会の場面である。音声資料を収集した。この科目は日本語教育の教壇実習を中心とし、生徒の募集からカリキュラム、指導案の作成など、運営に関わる一連のことを実

習生が主体となり教員の指導を受けながら行うものである。収録場面である反省会は、教壇実習の直後に行われたものである。

一回の反省会はおよそ一時間強の長さであり、7回分を用いる。各回では、当日授業を担当した実習生、授業を観察した実習生と教員、計8名から12名が参与している。反省会が終結し、参与者たちが雑談などの別の活動に移行する箇所を会話終結として観察する。詳細については4章で提示する。

G. 学外実習

2013年9月に行われた、大学の学部生向け実習科目の一場面である。実習生と教員が長期休暇中の6日間、実習地に入り寝食をともにしながら課題に取り組む。このうちの4日目の夜の自習の時間について、音声・映像資料を収集した。収録時間は二時間程度である。この中で行われているミーティング形式での指導とその前後のやり取りを抜き出し扱う。参与者は実習生と教員の計11名である。会話終結として扱うのはミーティング開始の際にそれ以前に行われていたやり取り(自習や雑談)を終える箇所、およびミーティングが終結し各々の活動に移行する箇所の二箇所である。6章で取り扱う。

3) 他のデータベースから借用した資料

H. Call Friend Japanese Corpus

米国に在住する日本人が、長距離電話を日本人に掛けた際の会話資料によって構築されたものである。The Talk Bank Project(MacWhinney2007)の一部として行われた。一つの会話資料は15分から30分程度の長さである。公開されている音声資料に対し書き起こしを作成し使用する。電話が切られる際のやり取りを会話終結として観察する。

1.8. 書き起こし

1.7節で示した会話資料の書き起こしに際し、以下の記号を使用した。

[[で示された箇所同士が同時に発話されている

() 聞き取り不可能

(うん) 聞き取り不確実

(1.0) 間合いの長さ(秒.100 ミリ秒)

(.) 短い(0.2 秒未満)間合い

:	音の引き伸ばし
h	呼気音
.h	吸気音
.	下降調イントネーションで発話されている
?	上昇調イントネーションで発話されている
,	直前の音が一旦上昇し下降するように発音されている (発話が継続するように聞かれる)
_	直前の音が平板調で発話されている (発話が継続するように聞かれる)
↑	直後に記す音が顕著に高く発音されている
↓	直後に記す音が顕著に低く発音されている
あ-	発音が不完全に途切れている
<u>うん</u>	大きく・強く発音されている
° うん°	小さく・弱く発音されている
>うん<	他の箇所より相対的に速度が速く発話されている
<うん>	他の箇所より相対的に速度が遅く発話されている
=うん	=で示された箇所同士が隙間なく発話されている
¥うん¥	笑い顔のような口の形で発話されている
(())	その他注記(非言語情報、文脈の情報など)

その他分析に関わる背景情報などは、必要に応じて抜粋の直前または記述の中に記すことにする。また資料中に出現するプライバシーに関わる特定の個人名、組織名、その他は、別の名称に変更したものを提示している。

各事例について作成した書き起こし資料は、本文中で「抜粋」と呼ぶこととする。抜粋の表題の読み方について凡例を示す(図 1-1)。

【抜粋 0-1 (1) XXXX】
A↑ B↑ C↑

図 1-1 抜粋表題表記凡例

- A：提示する章と、各章内で掲載する抜粋の通し番号を示す。図 1-1 の場合、0 章一つ目に挙げる抜粋を指す。
- B：同じ事例中に生じたやり取りを、二つ以上の抜粋に分けて同じ節内に掲載する場合は、(1)(2)のように丸括弧で囲んだ数字をさらに付加する。
- C：1.7 節に挙げた事例名を示す。

先行研究から引用する事例については、文献の情報および引用元での抜粋名を掲載する。また各事例の行番号は、基本的には抜粋ごとに 01 から振り直すこととする⁴。

1.9. 本研究の構成

本研究は 8 章からなる。以下に各章の概要と章同士の関係(図 1-2)を示す。

【2 章】

会話終結に関わる先行研究についてまとめ、本研究との関係について述べる。

【3 章】

日常会話の終結について記述を行う。扱うのは日常追跡法で収集した資料中に含まれていた立ち話である。特定の目的のために待ち合わせた二人の会話(「楽譜」)と、偶然生じた立ち話(「ハナメシ」)の二場面を扱う。記述の手がかりとして、Schegloff & Sacks(1973)の終結部を参照しながら、終結の直前における発話連鎖の特徴について観察した上で、会話全体の終結に向けた組織について指摘し、どのような機会を利用し参与者たちが終結を切り出しているのかについて考察する。

【4 章】

制度的場面における会話の終結について記述を行う。大学・大学院の実習科目における反省会の音声資料を観察の対象とする(「実習反省会」)。ここでも 3 章と同様に終結の手続きがどのように観察されるのかを確認し、複数の回に共通して観察される特徴について指摘する。また終結の直前からより広域に焦点を当て、終結に向けた組み立てがどのように

⁴ 例外として、抜粋 3-5(1)(2)(3)のみ、一続きのやり取りをその順序で提示するため、通し番号を付与してある。

示され、参加者がそれに志向しているのかについて、会の進行が滞っている事例や手続きがないまま会の終了後のような状況が観察される事例を取り上げながら考察する。

【5章】

日常会話・制度的場面における会話という区分ではなく、会話の活動としての性質を軸に捉え直すことを試みる。前章までで扱った場面に、スポーツ用品店でのやり取り(「シューズ」)、移動しながらの会話(「廊下」)、偶然生じた立ち話(「メール」)の三場面を新たに加え、会話終結の特徴を当該場面が何を行う機会として生じているのかという「目的」、およびその目的に対し「会話がどのような位置付けを担うものであるのか」という二点との関係をもとに整理し直す。ここから会話終結の組織がいつどのようになされるかが、当該場面の目的に特徴付けられていることを指摘する。さらに活動の観点のみでは捉えることの難しい会話終結場面を取り上げ、会話の内部にある終結に向けた組織に加え、会話の外部にある組織との関係、つまり活動の連続という視点のもとで会話終結を捉えることの必要性について指摘する。

【6章】

活動の連続という視点から会話の終結あるいは開始を捉えることを試みる。3章から5章で扱った終結は、概ねその終結が一点で明確に生じるものである。このような終結のあり方は、参加者同士の身体が終結後には離れるという特徴の影響が考えられる。対する本章では、参加者たちが継続的に同じ空間にいるという「共在」状況に生じる終結について考察し、このような環境が終結のあり方および会話や活動の境界の性質とどのように関係しているのかについて指摘する。扱うのは、長時間同じ空間で複数人が各々活動を行っている場面である(「学外実習」)。

【7章】

5章の考察で用いた、会話を日常生活を構成する活動として捉えるという視点、そして6章の考察で用いた、会話を活動の連続に位置付けるという見方によって何が可能になったのだろうか。また今後の会話終結研究の展開にどのような可能性を示すことができたのだろうか。本研究の二つの目的に対応付けた、観察成果の整理を行う。

【8章】

本研究のまとめとして各章の主張を整理し、残された課題と今後の展望について述べる。

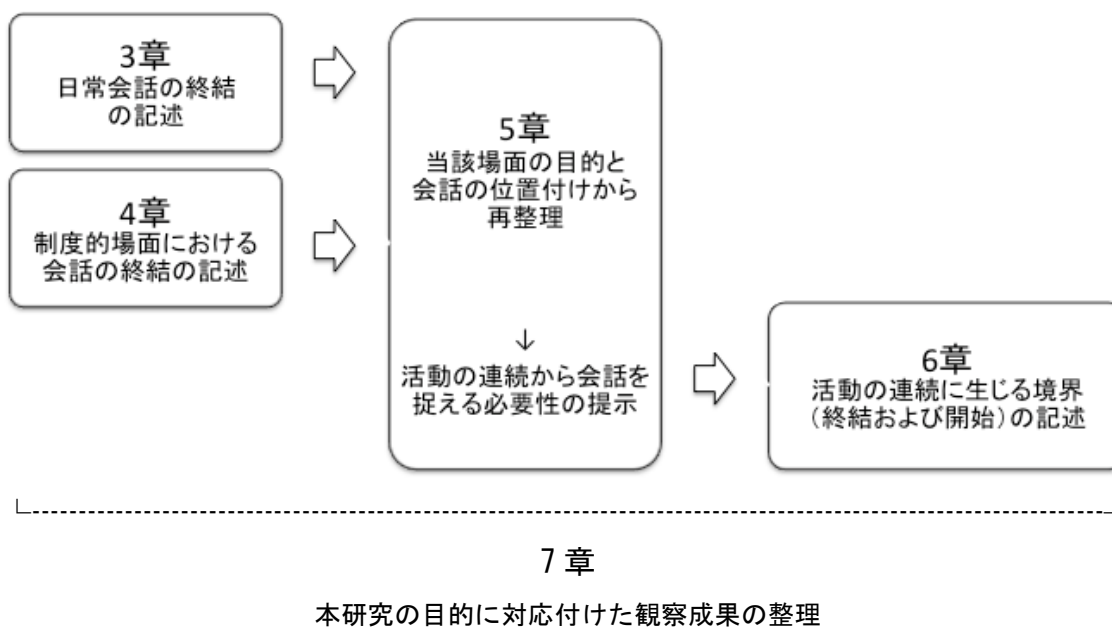


図 1-2 3章から7章の関係

2章 先行研究

2.1. 本章の概要

本章では会話終結に関する先行研究を概観する。2.2節で会話終結研究のもととなる考えである全域的組織について述べたうえで、分析の視点をもとに発話連鎖と発話機能に関する研究(2.3.3節)、習得・学習に関する研究(2.3.4節)、その他の終結に関する特徴についての研究(2.3.5節)に分け、順に見ていく。以上では電話会話の分析を主とした研究を取り上げる。その後2.3.6節で電話会話以外を分析対象とした研究をまとめて紹介する。最後にこれら先行研究と本研究の関わりについて2.3.7節で述べる。

2.2. 会話の全域的組織

1章1.4.2.1節および1.4.2.2節に挙げた順番交替や隣接ペアは、基本的に隣接する二つの発話の間に生じる局所的なシステムについて扱ったものである。加えて、ある行為の基盤連鎖の前に置かれる先行連鎖、あるいは修復など、それ以上の発話の連なりを通して組織されるものもある。そのさらに大きな組織として、全域的組織(overall structural organization, overall organization: Schegloff & Sacks1973; Levinson1983; Robinson2012)というものがあ、これは会話を一つの組織を持ったまとまりとして捉えようとするものである。

全域的な組織を持つ会話として認められるものとして、これまで多く研究対象とされてきたのは電話会話である。それ以外の会話場面もこのような組織を持つものに含めることができるが、はっきりとした始まりの言葉があり、注意深く組み立てられた終わりの言葉で終わるものが普通であるとされている(Levinson1983)。

全域的組織に関わる研究として、例えばこの組織の一番はじめの部分、つまり会話の開始はこれまで研究の成果が上げられてきた主要なものの一つである。電話の呼び鈴が鳴り受話器が取られれば、可能性のみ考えれば電話の掛け手と受け手は用件を話すことができる。しかし電話会話の開始ではそれに先立ち、呼び鈴およびそれに答えるべく受話器を取り発する第一声、この二つによる隣接ペア「呼び出し(summons)-応答(answer)」という特定の型が繰り返し観察されることが指摘されている(Schegloff1968)。

受話器が取られたことは、相手が電話の前にいることを保証するものの、この相手がこ

れから会話をすることができる状態であるのかについては保障してくれない(Schegloff2002)。これに「応答」の発話を返すことによって後者が保障され、またそれを行う自身の声によって、今話しているのが誰であるか示すこと(identification)が行われる。次いでこの自己呈示への承認(recognition)が返される。このような手順を踏むことで、電話に出ている相手が用件を話すべき相手であることが確認され、ようやく用件を話す段階に至る。こういった一連のやり取りが、電話会話開始の手続きとして実際に会話参与者たちに繰り返し利用されている。

2.3. 会話終結に関する先行研究

2.3.1. 会話終結とは

開始の組織と同様に、会話終結も全域的組織の一部分を扱ったもので、ここに一定の繰り返し用いられるやり方があることが明らかにされている。会話終結が何を指すのかについては、「ある話者の発話が完了してもその他の話者全員が新しい発話を行わず、さらにこのことが参与者の誰かの沈黙としても受け取られない状況に到達すること」というSchegloff & Sacks(1973)の考え方が主に採用されている。

2.3.2. 主な分析対象

会話終結の研究対象として最も多く取り上げられているのは電話会話である。電話会話ははじめと終わりが明確に区切られた会話「単一の会話(a single conversation: Schegloff & Sacks1973; Sacks, Schegloff & Jefferson1974)」の典型的事例であるといえ、どこで会話終結が生じているのかが非常に分かりやすい。また電話会話を一回分録音すれば、特別なトラブルが生じない限り終結が一度必ず生起し、この音声を確実に捉えることができるという利点もある。

そしてもう一点、会話に関する研究が電話会話を対象として選ぶ理由には、当該会話で用いられている資源を過不足なく捉えることができる点が挙げられる。実際の対面会話では、視覚的資源をはじめ、膨大な情報が相互行為に利用可能となっている(Sidnel2010)。分析者がある特定の会話部分について記述しようとした時、これら膨大な情報のうちのどれが参与者に利用されているのかを捉えることは簡単なことではない。一方の電話会話では、参与者が相互行為を進行するに際し利用可能な情報は、対面会話と対比するとはじめから制限されており、当該会話で実際に参与者が使用した資源を追いやすい。そのため会話でのやり取りの原初的な特徴を記述しようとした時に、電話会話は有効な分析対象であると

いえる。なおこのような選択は、会話における視覚的資源を軽視しているのではなく、むしろ重要な資源となり得る可能性を念頭においてなされたものである。

2.3.3 節から 2.3.5 節までは、音声的やり取りに関する分析を主とした研究成果を取り上げる。

2.3.3. 発話連鎖と発話機能に関する研究

まずは主に引用される二つの成果について取り上げた後、これらを参照して行われた研究について概要を示す。

2.3.3.1. Schegloff & Sacks(1973)

会話終結を扱う研究が最も多く参照する研究である。彼らが扱っている資料は電話会話から得られたものであるが、その知見は電話会話に限らず、会話という一つの機会を終える際に広く通じるものであると考えられる。

2.3.3.1.1. 順番交替システムと会話終結

順番交替システムは現在の発話順番と次の発話順番を無限にやりくりすることを可能にするものであり、システムの停止に向けて働く機能を内部には備えていない。彼らは会話終結を、順番交替システムを適切に停止することによって達成されるものであると捉える。より具体的には、参加者は会話終結の際、発話順番の終わりに生じる次の順番開始が適切となる性質をどのように調整するのかという問題に取り組むことになる。適切に移行適切性を停止することによって、ある発話の後に生じた誰も発話しない状態が、順番同士の間が生じた沈黙ではなく会話の終結として扱われる。

2.3.3.1.2. 終結の手続き

これを行う際の発話連鎖に見られる二段階の手続きを指摘し、それらをまとめて「終結部(closing section)」と呼んでいる。

手続きの一つを担うのは、先ほど挙げた順番交替システムの移行適切性の停止に関わるものであり、「最終交換(terminal exchange)」という隣接ペアの発話によってなされる。ただしこの隣接ペア自体は最終交換以外の用途でも用いられ得るものであるため、この隣接ペアがどこで生起するのかという配置が重要となる。

この配置の問題を解決するのが「前終結(pre-closing)」である。具体的には「O.K.」、「We-el」

といった前終結句が用いられ、それだけで単独の発話を担うものである⁵。これを話題の終局と聞かれる位置で用いることにより、発話者はこれ以上話すことがないことを示し、次の順番で自由な順番を得た相手はまだ話すべき話題があればそれを導入し、なければそれに同意を返すことで前終結はそれとして機能し、適切に終結部が開始されたことになる。

【Schegloff & Sacks(ibid: 307)による終結の手続き】

- 01 Johnson: ...and uh, uh we're gonna see if we can't uh tie in our plans a little better.
 02 Baldwin: Okay[fine].
 03 Johnson: [Alright?
 04 Baldwin: Right.
 05 Johnson: Okay boy, 前終結
 06 Baldwin: Okay 受け入れ
 07 Johnson: Bye[bye 最終交換 第一成分
 08 Baldwin: [G'night.最終交換 第二成分
- } 終結部

彼らの観察の重要な点は、会話終結が最後の発話によってなされているのではなく、これが隣接ペアという特定の発話の組み合わせによってなされていること、またこれが最終発話として聞かれ得るよう、その配置について互いに確認し合う前終結という手続きがそれ以前に経られているという点である。会話終結は単純にそれが生起するのではなく、このような交渉を経て参加者によって達成される性質のものとして捉えられている。その他会話分析の手法から終結の際の発話連鎖について指摘する研究に Jefferson(1973)、Button(1987, 1990, 1991)、ロシア語会話では Bolden(2008)などがある。

2.3.3.2. Clark & French(1981)

先述の Schegloff & Sacks の終結の組織と並び、日本語で行われる会話終結の分析に多く用いられている枠組みが、この Clark & French(1981)である。彼らは「Good bye」という

⁵ なおここに挙げた前終結はそのタイプの一種類であり、その他に相手参加者の関心を利用する、例えば「長い時間引き止めてごめん」といった、長話をしたくないという電話の受け手の関心に言及する方法や、「電話代かかっちゃうんじゃない」といった電話の掛け手の関心に言及するなどの、掛け手・受け手といった特定の参加者にしか使用できない方法、あるいは両者とも利用できる「そろそろ行かなくちゃ」といった相手の関心に言及するのではない方法、また会話の冒頭で得た情報に触れる方法が、前終結に用いられる発話として指摘されている(注8も参照)。

最終交換に相当する発話が、会話参加者の関係性によっては行われなことを主張の軸に、終結の手続きに関して以下のような型を提示している。

【Clark & French による終結の手続き】

- 1: 話題終了(topic termination)
- 2: いとまごい(leave-taking)
- 3: 接触終了(contact termination)

この型のうち2の「いとまごい」は残りの部分である1と3とは機能的に独立のものであることが主張されている。2の基本的な働きは関係性の再肯定(reaffirmation of acquaintance)であり、これが不要な場合は省略され得る、任意の手続きとして2を位置付けている。

いとまごいに観察される行為には次のようなものがあり(Albert & Kessler1978 ほか)、しばしばこの順序で観察される。

- a) 内容のまとめ(summarize the content of the contact they have just had)
- b) 終結の正当化(justify ending their contact at this time)
- c) 互いに喜びを表現する(express pleasure about each other)
- d) 互いの関係が持続することを示す(indicate continuity in their relationship by planning, specifically or vaguely, for future contact)
- e) 互いのために祈る(wish each other well)

この手続きの型の要点は、話題の終了と実際に電話回線を切ることが終結に必須のものであり、終結は参加者間の関係性に配慮しない場合非常に簡潔になされるということである。この型の場合 Schegloff たちの提示する終結の手続きは2(いとまごい)の中に含まれ、手続きの全ては任意のものとして位置付けられると考えられる。

2.3.3.3. 日本語への応用

日本語会話の終結研究では上の二つの型のいずれか、もしくは折衷案を採用し、各手続きでどのような言語表現が用いられるか、あるいはどのような行為が観察されるかといったことの分析がなされている(岡本 1990, 1991; 熊取谷 1992; 大浜 1997 ほか)。

折衷案をとっている一例である 小野寺(1992)の場合は、終結の手続きを「前終結」、「人間関係の再確認」、「最終的やりとり」という三つの段階として捉えている。日本語の前終結としては「じゃあ」という発話が最も多く観察され、その異型として「それじゃ」、「それでは」も用いられるとしている。これらは下降調でなされる「O.K.」に相当するものとして指摘されている。また「We-ll」に相当するものとして「あのう」という表現、また「謝り」も前終結として挙げられている。続く「人間関係の再確認」には「じゃまた」、「また」のペア、あるいは「よろしくお願いします」、「ありがとうございました」といった常套句の他に、「申し訳ございません」のような謝罪の表現が多く観察されるとしている。そして「最終的やりとり」では「ごめんくださいませ」のペアが圧倒的に多く、「失礼いたしました」のペアが次いで多く観察されたとしている。

ここでは Schegloff たちの型と Clark たちの型の両方を採用しているために、各々の手続きが何を基準に判断されているのかに関して混乱を来しているように思われる。小野寺の場合、Clark たちの型をもとに人間関係の再確認の表現を抜き出しているが、その中の表現の一部はその前の手続きである前終結にも出現している。また最終的やりとりは Schegloff たちの型によるものであると考えられるが、ここに分類されている表現は人間関係の再確認に含まれ得るものがある。これは Schegloff たちの型と Clark たちの型の一部には重複があるため、この両者を一連の手続きとして並べるならば当然生じ得る混乱であるといえる。

その他の先行研究でも、実際には日本語のいずれの表現がいずれの手続きに対応するものであるのかの認定が容易ではなく、研究者ごとに独自の基準で終結部の定義を行い、会話資料に出現する手続きの認定を行っている状況である。本研究ではこのような状況を鑑み、一旦 Schegloff & Sacks(1973)の指摘に立ち返り、手続きの行われ方自体に言語間の差があることも視野に入れ、各々の手続きについての特徴を参照しながら個々の資料に対して分析を加えることにする。

2.3.3.4. 他言語との対照研究

前節で見たような、日英の言語間にある差に関して着目した研究に藤原(1998)がある。それぞれの言語で行われた会話の中から終結部を抜き出し比較を行った結果として、終結部内の順番数が英語会話は日本語会話の三分の二程度であったこと、また各手続きの段階に出現する発話機能にある偏りについて指摘している。その他日韓の比較研究には林美善(2001)、日中の比較研究には鄧開蜀(2002)、陳明涓(2000)などがある。

2.3.4. 会話終結の習得・学習に関する研究

子供がどのように会話終結を組み立てているのか、成人との比較から分析した研究に伊藤ほか(2001)がある。子供の発話には人間関係の再肯定の機能を果たす発話数やその種類が少なく、成人と比較して終結部の構造が単純であるという特徴が見出されている。

学習については、日本語教育の観点から行われた研究が複数あり、また2011年度の日本語教育能力検定試験では、会話終結の特徴や指導について問う設問が出題されていることから(日本国際教育支援協会 2012)、終結は会話教育の重要な指導項目の一つとして認識されていることが伺われる。先行研究の例としては、日本語母語話者と非母語話者間の比較について扱ったものや(岡本・吉野 1997)、具体的にどのような指導が有効であるかを整理し指摘したもの(尾崎 2003)などがある。終結の方法には文化的特異性があり(Bardovi-Harlig et al.1991)、非母語での終結の組織は学習者にとって簡単ではないと予想される。例として徐孟鈴(2006)は台湾人学習者に見られた問題点として、一つの順番で情報を一気に言い、一方的に会話を打ち切ってしまうことを報告している。こういった問題への対処として、終結の行い方にある言語間の差に目を向けることを促すだけでなく、終結の組織の際に用いられる短い応答の発話やその韻律といった非言語的なキューについての理解、産出を指導することもここでは重要となっていると考えられる。また学習者のロールプレイを分析したものとして、ビジネスの文脈で遭遇し得るクレーム対応場面(服部2011)や依頼場面(徐孟鈴 2006)、などが扱われているが、同意を取り付けるといった終結のきっかけが見出しやすい場面以外では、より終結の組織は困難なものとなることが予想される。ここでは場面と終結の組織の関係についての情報も、学習者にとって有益なものとなると考えられる。

2.3.5. その他の終結に関する特徴の研究

終結を組み立てる際の発話における音声的特徴に関する先行研究として、英語会話に関しては Wright(2011)があるが、日本語では終結との関係から直接これを論じているものは管見の限りない。しかし、音声的特徴から「はい」の意味・機能を論じている青柳(2001)では平板調でなされる「はい」が話題分割機能と結びついたものであるという指摘があり、終結の際に繰り返し観察される「はい」(熊取谷 1992)にもこの特徴が観察される可能性がある。

2.3.6. 電話以外の会話の分析

電話会話以外の終結については、以下のような研究がなされている。特定の場所で生じる会話場面を捉えたものであり、扱い方の比重には各研究間に差があるが視覚的やり取りも分析に含めているものが多い。概ね制度的場面に相当する場面を扱ったものとなっている。

最も多く扱われているのはおそらく医療場面の分析であると考えられる。どのように終結がなされているのか、医者と患者の振る舞いの量的分析(White, Levinson & Roter 1994)や両者の言語行動をリスト化しているもの(White et al.1997)などがある。また発話連鎖を丁寧に追っている研究としては、身体の動きにも注目した Heath(1986)の分析をはじめ、基本的な終結の組み立てに関してや(West2006)、終結の導入の仕方と終結直前での話題を導入の関係について(Robinson2001)などが扱われている。

その他の場面として美容院での相互行為に偶然生じた出会いの場面を扱った LeBaron & Jones(2002)は、身体の振る舞いによる交渉を通してどのように終結が達成されているのかを分析している。また終結の行い方にある文化差や非母語話者の抱える困難について、履修相談などを行う大学相談場面を扱った分析がなされている (Hartford & Bardovi-Harlig1992)。またミーティングの終了を扱ったものもある(Boden1994)。

対して日本語で行われた相互行為の分析は非常に少ない。特に具体的文脈の中で実際に生じた相互行為を捉えたものは管見の限りなく、場面を指定したロールプレイにおける非言語行動について扱った馬場ほか(2000)、小熊ほか(2004)は、視線や顔き、お辞儀、参加者間の距離が終結の際の何の機能を担っているのか、共起する発話をもとに分析している。また場面の指示がない対面ロールプレイの終結を扱ったものもある(野波 2011)。その他佐藤(1992)、天野(1992)は地域によって異なる別れの際の挨拶表現を報告している。

2.3.7. 本研究との関係

以上では会話の終結に関係する先行研究について、分析対象の観点から電話会話と対面会話に分け取り上げてきた。前者については発話連鎖あるいは発話機能に焦点を当てた研究(2.3.3 節)、終結の行い方について成人と子供、あるいは日本語母語話者と非母語話者を比較した研究(2.3.4 節)、そしてその他の特徴として音声的要素に焦点を当てた研究(2.3.5 節)に大別しまとめた。また対面会話については、分析対象となっている場面と分析の観点を簡単に述べた(2.3.6 節)。

先行研究の分析対象の特徴として、電話会話の分析から得られた成果がその重要な部分

を担っていることは先に述べたとおりである。本研究では電話会話ではなく対面で行われた会話場面を主に扱うが、発話のやり取りの特徴について注目するのは同じであるため、これらの先行研究、特に 2.3.3 節の発話連鎖にまつわる研究の成果を手がかりに記述を進めていく。本研究全体を通してまずはじめに記述の手がかりとするのは Schegloff & Sacks(1973)の枠組みである。また日本語での発話に関する指摘についても記述に際し適宜参照する。

そして対面会話、主に制度的場面における会話に関する先行研究との関係についていえば、日本語で行われた自然会話場面の分析が管見の限りほとんどないということが大きな特徴として挙げられる。どのような枠組みが日本語でやり取りがなされる制度的場面の記述に適しているのか、参考にできるものが管見の限りないため、本研究では日常会話終結と同じ枠組みを参照することとし、適宜日常会話との異同について指摘する。

また先行研究の多くでは終結の組み立てについて、同一場面内の事例を検討している。本研究では日常会話と制度的場面における会話を、相互行為の機会を締めくくるという共通の特徴から並べて見てみることを通して、各場面の特質と会話終結の特徴との結びつきについても考察していきたい。

3章 日常会話の終結

—立ち話の観察から—

3.1. はじめに—日常生活に生じる会話とその終結—

本章ではごく日常的に行っている会話の終結場面に注目し、その終結に関して記述を行う。毎日の生活の中で私たちは、行っている言葉を使ったコミュニケーションの数だけ、そのコミュニケーションの終結を何らかの形で体験しているはずである。特定の終結に関する資料を見る前に、こういったコミュニケーションにどのような類のものがあるかについて、関係する先行研究を紹介しておきたい。

人びとが行っているコミュニケーション、特に言語活動のバリエーションが、どのような要因によって捉えられるのかについては以前から指摘がある(ネウストプニー1979 ほか)。その一方で、この要因によって決定された具体的なコミュニケーションにどのような類のものがあるのか、その全体像を捉えまとめたような研究は管見の限りない。そんな中で、人びとが行っているコミュニケーションのバリエーションに関わる研究として、本研究の扱う資料にも関連する「松江 24 時間調査」について触れておきたい。国立国語研究所は、「市民の各層がどのような言語生活を営んでいるか、また、言語生活についてどのような問題を持ち、どのような意識を持っているかを調べる (国立国語研究所 1971: i)」ことを目的に、昭和 38 年に島根県松江市において言語調査を行っている。この「松江調査」の一部である「24 時間調査」では、調査対象である一人の主婦の一日の言語行動を観察するという試みがなされている(国立国語研究所 1971)。午前 6 時から午後 10 時までの 16 時間、調査対象となった家で行われた発話をほぼ全て⁶録音し、それに関する事柄をメモするという方法がとられた。得られた発話資料をもとにした報告に南(1972, 1981)などがあり、連続的な資料の区切り方についてなど、長時間にわたる収録資料の特性を活かした試みがなされている。また南(1965)では、対象となった主婦の一日の言語行動を大きく追った記録が、時系列の順にまとめられており、この情報は一人のひとが一日の中でどのようなコミュニケーションの機会に接しているか、生の資料をもとに得られたものであるという点から見て価値のあるものであるといえる。

⁶ 一部収録ができなかった場面があるとしている。例として挙げられているのは対象者が外出した際のやり取りなどで、機材の準備が間に合わなかったとしている(南 1965)。

本研究が使用している資料収集の方法の一つである日常追跡法は、いくつかの点で24時間調査と類似し、また異なっている。両者はともに一人の協力者を資料収集の基点としているという点で特徴を同じくするが、資料収集で追っている場面について、24時間調査の場合は「家」という場所で生じたコミュニケーション場面であるのに対し、日常追跡法は協力者本人が行動した場所に生じたコミュニケーション場面であるという違いがある。また24時間調査の場合は収録対象とした特定の一日の中の16時間をほぼ通して資料収集しているのに対し、日常追跡法で収集し協力者から提供された資料は、幅を持たせた数日の間の、音声の収録が可能でさらに資料提供することが問題ないと協力者に判断された場面に限られる。そのため一日の中の流れを追うということが、24時間調査のようにはできないという特徴がある。

そして大きな相違点は、基点に据えられた協力者の属性であると考えられる。一日で体験される会話は、その人の生きている文脈によって当然異なる。24時間調査の協力者であった主婦においては「家」が中心的な活動の場としてあり、その中で生じた日々の様々な出来事が追われている。対する日常追跡法で今回得ることができたのは、20歳前後の若者の中でも、特に大学生・大学院生という属性を持つ協力者によって体験されたコミュニケーションの資料である。彼らにとっては、家ではなく「大学」という場が日々の活動の大きな部分を担っているようであり、提供された会話資料には、大学に通い講義を受ける様子や、学生同士の短いやり取り、放課後のサークル活動やアルバイトにおけるやり取りが含まれていた。

本章ではこのような協力者の下に生じたコミュニケーションのうちのさらに一部、典型的な会話終結が生じる場面の一つである「立ち話」が生じている場面のみを取り扱う。先に挙げた日常追跡法で得られた資料の中にはこれ以外の会話終結場面も存在していると考えられるが、それらが会話終結か否かに関して必ずしも明確ではないものが含まれており、扱う前に幾らか議論が必要であるといえる。

本章では立ち話における会話終結について、以下の流れで見えていく。まずは実際に別れ、すなわち会話の終結が生じている箇所のやり取りを短く切り取り、この部分について主に発話連鎖に注目し観察し記述を加える(3.2節)。この際英語による電話会話を中心的な分析対象としてなされた研究を参照し、この成果を指標として使用する。これらの研究は英語での会話を扱っており、一方の本研究は日本語での会話を扱っていること、また電話会話と対面会話という違いが先行研究と本研究の間にはある。そのためこれらの研究を分析の中心的な指標とすることの適切性については、厳密には議論が必要であると考えられる。

ただ2章で述べたとおり、現在日本語会話に関する先行研究では日本語でのやり取りが英語会話の終結の手続きに対応することを前提として議論が進められており、その上で日本語会話の終結の際に用いられる表現や発話行為について記述されている。しかしここでは各々の表現が、当該の手続きに相当することがどのように判断されたのかについて疑問が生じる。

こういった混乱を避けるため、現在でも終結研究の主な成果として扱われている Schegloff & Sacks(1973)に一旦立ち返り、これを参照しながら扱う資料の特徴をまずは大掴みにすることを目指す。日本語会話を扱った終結研究に関しては、主に発話の形式やその機能について観察する観点として適宜補足的に参照し、英語会話の終結の手続きが日本語会話に対応するのか否かも含めて、考察を行うことにする。

会話終結は「全域的組織(overall structural organization: Schegloff & Sacks 1973 ほか)」の中に位置付けられるものである。しかし終結が会話内のどのような組織と具体的に絡み合っているのかについては、日本語会話ではそれほど具体的に議論されてきていない。そこで続く3.3節および3.4節では、観察の視野を終結の直前から最後の話題、そして会話の全体に広げ、ここに見られる終結に向けた組み立てを記述する。

最後に3.5節において終結の直前および会話全体の組み立て双方の観察をもとに、扱った立ち話の終結がどのように達成されていたのかについてまとめを述べる。

3.2. 終結直前における終結の組織

本節で取り上げるのは立ち話二事例の終結直前部分である。記述の手がかりとして、Schegloff & Sacks(1973)を参照する。2章の繰り返しになるが要点のみ再掲する。

会話の適切な終結のために本質的な要素は以下の二つである。一つ目は「適切に開始された終結部」、二つ目は「最終交換(terminal exchange)」である。明示的に図式化することは行われていないが、想定される会話終結の発話連鎖は以下のようなものであると考えられる。

【終結部】

- | | |
|--------------------|---|
| 1: 前終結 | } |
| 2: 前終結の受け入れ | |
| 3: 隣接ペア第一成分(最終交換①) | } |
| 4: 隣接ペア第二成分(最終交換②) | |

それぞれの手続きがどのようなものか、典型的な事例に沿って簡単に説明しておきたい。

【Button(1990: 94)_NB: IV: 14: 26】

- 01 Emma: And, u-uh I'm with you,
 02 Lottie: Yeah,
 03 Emma:→ Oright,
 04 Lottie:→ Okay[honey,
 05 Emma:→ [Bye,dear=
 06 Lottie:→ =Bye.

まずは一つ目の手続き、終結部の適切な開始について見てみたい。これは前終結(pre-closing)⁷と呼ばれるものを、話題の終局として分析できる位置で産出することによってなされる。具体的に想定されるものとして挙げられているのは、下降調でなされる「O.K.」、
 「we-ll」のような発話である⁸。上掲の会話においては、3行目の **Oright** がその例である。日本語会話でこの前終結に相当する表現として「じゃ」を挙げる研究(小野寺 1992; 岡本・吉野 1997)がある一方で、英語のこれらの表現のように働く表現が、日本語には用意されていない可能性についての指摘もある(高木 2005)。

前終結で扱われるのは、前の話題についてでも新しい話題についてでもない。そのため発話者はこの順番を取得するが、発言自体を「パス」するものとして働く。このことによって、話し手に新たに話すことがないことを示し、先行する全ての話題を断ち切るものとして作用する。このような特徴が次話者である相手に「自由な」順番を与えることになり、この機会に、言いたかったが言えなかったことをはじめとした新しい話題を導入することが可能になる。前終結によって生じた自由な順番におけるもう一つの選択肢は、新しい話題を導入することをせずに「パス」を返すことである。この場合に前終結は承認され、終

⁷ 正確には「前終結となる可能性のあるもの(possible pre-closings)」と呼ばれるべきものであるとしている。相手はこの前終結の発話された次の順番を利用して、話題を導入することも可能である。その際の前終結となる可能性のあるものは実際にその会話の終結部を導くのではなく、会話の継続に利用されたことになる。

⁸ 前終結は「会話を終了することの正当化」を行うものとされる。Schegloff & Sacks(1973)が挙げる前終結は、「OK」、「we-ll」等、正当化を端的に達成する方法とされるものの他に、もう一つ、正当化を宣言する方法がある。「電話代がかかってしまうのではないか」や「電話を取る前にやっていたことを続けてほしい」など、相手の関心を利用するという方法が取られ得る。これは話題に割り込むような形でも用いることができ、この題材は会話の開始の際の特徴が用いられやすいとされる。

結部は適切に開始されたことになる。上の抜粋の場合、4行目がそれに相当する。

この前終結では、話題導入の機会を相手に与えることを通して、これ以上話すべきことがあるかどうか、会話終結に向かわせることへの確認がなされる。そして話すべきことがないことの表明を返すことで、会話を終結に向けて進めることが承認されたことになる。これによって終結部は適切に開始されたことになる。

続く二つ目の手続きは最終交換と呼ばれる。これは順番交替システムの停止に関わる手続きである。順番交替システムは、「いつ」順番交替が行われるのかについてと、その結果「だれ」が次話者になるのかをその都度決めていくために繰り返し作動し続けるものである。現話者の発話の終わりには移行適切性が生じ、誰かしらによる次の発話が始まるように、もしくは現話者による発話が続くように機能している。つまり会話終結の際に必ず必要である発話の生じない状態をつくるためには、移行適切性を止める必要がある。順番交替システムは、それ自体の中に移行適切性の停止のために働く機能を有していないため、これはシステムの外部からの働きかけによってなされる必要がある。

そして移行適切性を停止させる方法として挙げられているのが、この最終交換の使用である。最終交換は隣接ペアを形成している。適切な位置に最終交換が置かれることによって、その後に生じた発話のない状態が、順番交替システムへの違反によって生じた沈黙ではなく、会話の終結として理解される状況が達成される。上の例の場合、5行目「Bye, dear」と6行目「Bye.」が最終交換に相当する手続きを成している。日本語の場合は、それぞれ別の話者によってなされる「じゃあね」、「バイバイ」のようなペア、私たちが日常で用いる言葉でいう「別れの挨拶」がこれに相当する。

最終交換について、ここで用いられる隣接ペアそれ自体は、会話の終結以外の位置でも用いられ得る。そのためこれらの発話が最終交換として聞かれるためには、その配置が意味を持つことになる。この適切な配置のためにあるのが前終結であり、適切に開始された終結部の中に最終交換が置かれることによって、それが終結として理解されるとしている。

日本語会話の事例についても一つだけ挙げておきたい。

【Call Friend Japanese Corpus(6587)】

01 M: うんまあ[いいってこと([だよたぶん)

02 F: [別に [うんあの::hh あの::いいってことじゃないかと=

03 F: =思[いますよ.

04 M: [はい::

05 F:→ はい[.]それじゃあね::

06 M:→ [うん(.)また.

07 M:→ うん.はい.

08 F:→ んっはい.

この場合、話題の終了が4行目まででなされており、続く5、6行目が前終結の手続き、7、8行目が最終交換に相当すると考えられる。これらの手続きは、全ての事例において、上の二事例のように明確に現れるわけではないと考えられる。Schegloff & Sacksの指摘の中で重要な点は、それまで発話のやり取りを可能にしていた順番交替システムを止めることが、最終交換という隣接ペアによって達成されること、またこの隣接ペアが最終交換として聞かれるために、それを持ち出す環境が前終結というやり取りによってもたらされることである。この構造を観察の手がかりに、以下では実際の会話資料を観察していく。

3.2.1. 事例1「ハナメシ」の終結

はじめに扱うのは、偶然会った二人による立ち話である。参与者であるS(すぎた, 男性)とI(女性)は、以前共通の飲食店(「花めし」)で働いていた元同僚である。現在は二人ともこの店を辞めている。Iはこの会話のなされた時期の少し前に、Sの所属するA大学の職員として働きはじめた。学内を移動していたSはIに偶然学内で出会い7分弱立ち話をしていく。会話の開始の際に、Iが顕著に高い声でSの発見を表明していることや、「久しぶり」、「元気?」という発話があることから、二人は久々に再会したことが読み取れる。

抜粋3-1は会話終結が生じる直前の話題の終盤から、実際に参与者が別れるまでのやり取りである。元勤め先に以前はA大生が多く働いていたのに対し、現在はほとんど働いていないことが抜粋の直前にSによって話されている。1行目はこれの一部を訂正するために、情報を付加している発話である。

【抜粋3-1_ハナメシ】

01 S: =>あ:でも<A大生が入ったっていう:(.)話はよ-たまに(.)聞きます.[()]

02 I: [あそうなんだ.

03 S: まあ(.)一回(.)今度食べに行きましょう.

04 I: hh[hhh

05 S: [() 食べ)に行きましょう.(.)Hhhh

06 I: じゃあまたね.がんばってね.

07 S: はい.〔(.)じゃあ.

08 I: [まあ.

終結直前の話題は元勤務先の近況であり、一緒に店を訪れようという誘いによって締めくくられている。その直後の6行目「じゃあまたね。」は、前の話題の続きではないことが明確であり、別れの挨拶として聞かれる。この発話をSは7行目で受け入れ、「またね」に対応する形式と考えられる「じゃあ。」によって、挨拶を返している。

ここでの発話連鎖において、終結の手続きはどのように観察されるだろうか。順番が前後するが、まずは手続きの二つ目である「最終交換」について見てみると、最終的に順番交替システムを停止させている部分には「じゃあまたね.(6行目)」と「じゃあ.(7行目)」が観察され、別れの挨拶として聞かれるだろう⁹。続いて前終結はどのように現れているかについて見てみたい。これは先行研究の挙げるような形では行われていないといえる。ここで「じゃあ(6行目)」という前終結相当の形式ともされる発話はあるが、次の順番で新たな話題導入を可能にするような順番としては現れていない。

あるいは3行目の「まあ」が前終結に相当し、その後が続いている勧誘が終結部内に挿入されたものであるとして分析することができるだろうか。Button(1990)は前終結に相当する発話部分に続けて、将来の取り決めなどの発話部分を産出し、その受け入れを経て前終結が達成されていく形を、終結の手続きに見られる型の一つとして挙げている。

【Button(1990: 97-98)_NB: IV: 10: 56】

01 Emma: um [sleep good t'night swee[ti,

02 Lottie:→ [Okeh [Okay well I'll-I'll see y' in the mor[ning.

03 Emma: [A:right,

04 Lottie: A'right,

05 Emma: B'ye bye de[ar,

06 Lottie: [Bye bye,

⁹ 厳密には、8行目の発話があるため二つの発話順番のペアとしては現れていない。8行目は単独で発話を構成しておらず、文法的に6行目に依存する形になっている。またこれを受けたSも8行目に対して改めて反応を返すというようなことはしていない。そのためこれは6行目の「がんばってね」に付加されるものと聞かれ得る。

しかし抜粋 3-1 の 3 行目の発話は、4 行目で笑いという、受け入れでも拒否でもない反応が返されている。もう一度繰り返された 5 行目の勧誘に対しては、反応が返されていない。そのためここでの発話連鎖は、いわゆる前終結とその受け入れというやり取りとしては観察されない。そして 6 行目は、別れの挨拶、つまり最終交換の第一成分として聞かれ得る。そのため明確に終結に向けてなされている発話であるということができ、6 行目の時点で別れは既に決定的なものとして提示されているように見える。

3.2.2. 事例 2「楽譜」の終結

もう一つ事例を見てみたい。次に観察するものも二人の参加者による立ち話である。一方が、ある用件のためにもう一方のもとを訪れることで生じた立ち話が終結に至るまでのやり取りである。二人はともに男性で同じ軽音サークルに所属しており、一緒にバンドを組んでいる先輩・後輩の関係にある。後輩 D が先輩 N(のやさん)に今後バンドが扱う曲の楽譜を渡すために、N の研究室のある建物の下で待ち合わせをし、出会ってから 3 分程度立ち話をして別れている。

抜粋 3-2 は会話終結が生じる直前の話題の最後から、実際に参加者が別れるまでのやり取りである。1 行目はこの話題の終了部分であり、ここまで N の研究室がある建物について話されていた(二人が話しているのは建物のすぐ外である)。1 行目は、この建物と比較するために引き合いに出すことのできる自身の研究室を、D は文系であるため持っていないことを述べる発話である。

【抜粋 3-2_楽譜】

- 01 D: 文系研究室とかないんで。
 02 N: あそっか？
 03 (2.6)
 04 D: じゃ(.)またよろしくお願ひ[しま]す。
 05 N: [あっ]
 06 (0.2)
 07 N: ありがと:う。
 08 D: は::い。

結果的に会話最後の話題となった現在二人がいる建物についての話題は、2 行目の最小限

の反応と 2.6 秒の長い沈黙によって終局に至っていることが分かる。4 行目はこの話題とは完全に切り離された、別れの挨拶のように聞かれる。これに N は「ありがとう。」という感謝の表明の形式を用い応答し(7 行目)、D がこの感謝を受け入れる最小限の反応を返し、発話のやり取りは終えられている。

先程と同様に、抜粋 3-2 における終結部がどのように現れているかについても見てみたい。まずは最終交換について、最終的に順番交替システムを停止させている部分には、感謝の表明(7 行目)とその受け入れ(8 行目)という対となる発話がひとまずは観察される。もう一方の前終結については、それほど明確に特定することができない。話題の終局として分析されるという位置の特徴、そして「じゃ」という前終結相当とされる表現の使用が見られるという点からは、4 行目の発話が前終結に相当する発話であると考えるのが自然である。しかし先の事例と同様に、発言権をパスするものとして働くという前終結の特徴は観察されない。具体的には、4 行目の「じゃ」の後には間合いがあるがごく短いこと、またイントネーションの特徴からも、D の発話はまだ途中であると聞かれ、ここでは順番交替が適切とはなっていない。つまり後に続く「またよろしくお願いします。」までが一続きの発話として聞かれる。そのため行為の開始といえる部分を順番内に含んでいることになり、先行研究の挙げる、発言をパスし、次に相手に自由な順番を与えるという特徴は見出すことができない。むしろこの発話も、別れの挨拶それ自体として聞かれることから、最終交換の成分の一つになっていると捉える方が適切かもしれない。話題の終了直後に置かれた 4 行目の発話は、この時点で既に終結に向かってやり取りを前に進めるものとなっている。

以上では立ち話の事例について扱い、会話終結の直前の組織がどのように行われているのかを観察してきた。扱ったのは二つの事例のみであるが、少なくとも前終結に相当する発話の機能と必要性について検討する必要があると考えられる。

ここで見た二つの会話の終結において、最後に交わされている隣接ペア相当の発話の直後では会話が実際に終了しており、また参加者によって不自然さというものも示されていない。これらの発話が最終交換としての隣接ペアであるということが、参加者に適切に理解されているものと考えられる。つまり最終交換の適切な配置を可能にするという、前終結相当の機能は何らかの形で果たされている。

そこでこの適切な配置を可能にしている部分が、日本語会話における前終結相当の表現との指摘のある「じゃあ」の発話であると想定してみる。しかしこれは、終結の開始を提案し、それについて相手に同意または不同意の意向を示すための順番を与える働きをするような発話としては観察されない。そのためその働き方は Schegloff & Sacks の挙げる

「O.K.」等の表現でなされる前終結とは厳密には一致しない可能性がある。

少なくとも本節で見た二つの事例において、終結の開始に関する交渉が明示的に行われていないにもかかわらず、会話終結が何ら問題のあるものとして扱われてはいないこと、そのためこの位置では終結が既に了解されているように観察されることが指摘できる。

3.3. 最後の話題における終結の組織

3.2 節で見た二つの事例において、発言をパスし、相手に自由な発話順番を与える前終結というものは観察されなかった。しかし、とにかく別れの挨拶が産出されれば会話はそこで終われる、というのは明らかに直感に反しており、最終交換のみでここでのやり取りが終えられているとは考えにくい。

会話終結が会話の全体を通して組み立てられるものであることは既に先行研究の指摘があるが(Schegloff & Sacks1973; Robinson2012 ほか)、具体的にどのような組織がみられるのかについての指摘は管見の限りほとんどない。以下では前終結および最終交換として具体的に指摘されているもの以外の資源について、特に大局的な特徴に注目し観察を行う。まずは3.3.1 節および3.3.2 節では最後の話題における終結に向けた特徴について指摘し、さらに3.4 節では「楽譜」の事例について、会話全体を通した終結に向けた特徴を指摘する。

3.3.1. 事例1「ハナメシ」の最後の話題

事例1の終結直前の話題についてまず扱う。ここで終結に向けた組み立てはどのように観察されるかについて見てみたい。

【抜粋 3-3_ハナメシ】

- 01 S: でも今もう:>花めし<().A 大生ほとんどいない。
 02 I: ↑あそうなの?
 03 S: みぞぶちくんくらい° [じゃないすか?°
 04 I: [えなんで?
 05 S: もうほとんど:やめて=
 06 I: =やめちゃったんだ:.じゃあ優秀だった花めしも優秀じゃなくなったんだね?
 07 (0.6)
 08 S: どうなんですかね:[.
 09 I: [hhhh

- 10 (0.4)
- 11 I: A 大生が=
- 12 S: =>あ:でも<A 大生が入ったっていう:(.)話はよ-たまに(.)聞きます.[()]
- 13 I: [あそうなんだ.]
- 14 S: まあ(.)一回(.)今度食べに行きましょう.
- 15 I: h:[hhh]
- 16 S: [(食べ)に行きましょう.(.)Hhhh]

この事例で行われていることを大雑把に捉えようとする、大きく分けて二つの行為を見出すことができる。一つは元勤務先「花めし」の現在の従業員についての情報のやり取り、そしてもう一つは一緒に元勤務先に食事をしに行こうという勧誘である。

一点目について、抜粋 3-3 における勧誘がそれ以前のやり取り、つまり元勤務先の現在の従業員に関する情報のやり取りに対して、どのような位置付けでなされたものなのかに注目したい。端的にいうとここでの勧誘は、それ以前に S が行った、込み入った情報提示の解決策として示されているといえる。S は元勤務先に現在は A 大生が「ほとんどいない(1 行目)」としながらも、A 大生が勤めはじめたという話を「たまに(.)聞(12 行目)」くと情報を追加し、これを修正している。このような修正の直後に置かれた「まあ」で開始された勧誘の発話は、情報のやり取りを切り上げるものとして聞かれる。元勤務先の細かな情報は、「一回(.)今度食べに行(14 行目)」けば分かるという関連として示されているといえ、この後に行われ得たやり取りを省き、話題を切り上げることが勧誘によって正当化されているといえる。

もう一点の勧誘に関して、会話の終結近くの部分でしばしば観察される行為の一つに、参与者同士が将来接触するための具体的・抽象的取り決めが挙げられる(Clark & French 1981; 岡本 1991; 小野寺 1992; 林 2001; 野波 2011 ほか)。未来の機会についての取り決め(arrangement)は「最後の話題」としての性質を持つものとされる。これは一つに「一続きのものとしての会話(conversation-in-a-series: Button1991)」への志向を示し、今ここで相互行為の機会と、未来に行われる相互行為の間に、きちんとした関係があることを表示するという性質を持つこと、そしてもう一つに未来の相互行為の機会を用意することで、今回の機会に行うべきことが、既になされていることを示す性質を持つためであるとされる(Button1987)。勧誘という行為も同様に、未来の相互行為についての取り決めを行うものであるという点から、このような終結を適切にする性質を共有するものであると捉えら

れる¹⁰。話題のまとめに相当する位置で勧誘を行うことは、会話外への志向を示し、終結を持ち出すきっかけとして利用され得るものであり、ここでもその性質が利用されていると考えられる。話題を切り上げることの正当化、および会話外への志向が同時に示されることによって、この会話を終結に向かわせることが強く表示されていると考えられる。

3.3.2. 事例 2「楽譜」の最後の話題

続いて事例 2 についても最後の話題を見てみたい。

【抜粋 3-4_楽譜】

- 01 N: ああ:
- 02 D: け-でもめっちゃいいところですよここ.
- 03 N: ああ:(.)そうでもね:地震の時めっちゃ揺れる.
- 04 D: へ::
- 05 N: さっきもね:結構ギンギン揺れてた.
- 06 D: 耐震構造いまいちなんですかね.
- 07 (0.4)
- 08 D: なんか_
- 09 (1.4) ((バイクの通る音))
- 10 D: 確かにさっきも音がした
- 11 N: ↓ねえ::
- 12 D: 文系研究室とかないんで. ((抜粋 3-2, 1 行目))
- 13 N: あそっか:
- 14 (2.6)
- 15 D: じゃ(.)またよろしくお願いします.

¹⁰ しかしここでの勧誘は、受け入れもしくは拒否を要求する行為であるにもかかわらず、それがなされていない。抜粋 3-3 で返されている応答は「笑い」であり、少なくとも応答の遅延が起こっているという意味で、非優先的応答を予示している。しかし通常非優先的応答はそれを回避するようにデザインされるのが一般的である(Sacks1987; Schegloff2007)にもかかわらず、反応に食い込むような早いタイミングで、もう一度勧誘が一度目(14 行目)の形式を再利用し類似の音声的特徴をもって繰り返されている(16 行目)という点が、通常の勧誘とは異なる特徴として観察される。そのためここでの勧誘は、冗談としてなされたものであると理解される。また抜粋 3-3 以前のやり取りでは、元勤務先の待遇が良くなかったという共通理解が示されており、そこに既に退職している二人が連れ立って食事に行くようなことは非常に微妙な性質を持つ行為である。このようなエスノグラフィックな情報も、勧誘が冗談であることを裏付けているように思われる。

最後の話題は D の 2 行目の発話によって開始されたものである(1 行目は直前の話題に対する最後の反応となった発話であり、気のないような低い声で最小限の受け入れの反応として聞かれる)。N の研究室があり、二人がその下で会話している建物について褒めることにより、前の話題とは全く別の話題への転換が行われている。相手の領域に属するものを褒めることは、評価の対象をよりよく知る相手からの情報を引き出すことを可能にするため、話題の転換に用いることのできる装置であるとされ(張承姫 2014)、これを用い話題化がなされている。

受け手である N はこの褒めに部分的な同意を示した後、否定的な情報を提示することで非同意を示している(3 行目)。それ以降は裏付けとなる情報の提示(5 行目)や、その言い換え、受け入れを示す発話(6, 8, 10 行目)によって連鎖が伸びてはいるものの、行われているのはいずれも建物に対する良くない点、「ゆれ」、「耐震構造」に関する評価に同意し合うことである。さらに 12 行目は D がこの建物进行评估する基準を持たないことを示すものであり、建物に関する話題は生じて程なく尽きつつあることが分かる。N はこれに最小限の反応を返しており(13 行目)、さらに 14 行目で長めの沈黙が挟まれることで、最後の話題が十分終局に達していることが分かる。抜粋 3-2 で見た終結の開始は、このように話題が尽きていることが十分に確認されあった状況で行われている。これは終結の開始が適切であることを見出す資源になっていると考えられる。

3.4. 話題の配列における終結の組織

抜粋 3-4 に挙げた話題の終わりが会話の終わりであるという期待は、その他の資源によっても補われていると考えられる。本節ではさらに観察対象を最後の話題から会話全体に広げ、大局的な終結に向けた組み立てについて指摘する。

話題の終了は、話題の開始だけでなく会話の終了を開始する可能性をも有しているとされるが(Button & Casey1984; 平本 2011)、話題が十分に終わることのできる位置に達することがすなわち会話終結であるというような、直接的な結び付きを持つわけではない。一つの会話内では、複数の話題が境目を持って現れることもできる。予めその会話でなされる話題が一つであることが予期される、単一の話題からなる会話(monotopical conversation)の場合は、その話題の終了が会話終結を開始するきっかけとして利用され得る(Schegloff & Sacks1973: 308)。一方でそうではない場合、事例 2 もその一つであると考えられるが、同様の位置は終結の開始だけではなく次の話題を導入するのに適切な場所と

もなるはずである。

観察の範囲を最後の話題から会話全体に広げてみるのはこのような理由からである。話題の終了が会話終結と結びつくことが適切になるという状況は、どのようにして生じ、やり取りに示されているのだろうか。まずは事例2「楽譜」において、開始から終了までどのようなやり取りが行われたのか、そもそもこの機会はどのような性質のものだったのかについての情報を参照してみたい。「楽譜」の事例内で扱われた内容に大雑把な表題をつけたものは以下のとおりである(表3-1)。

表3-1 事例2「楽譜」で扱われた話題

話題	開始時間	抜粋番号
《開始》((楽譜を渡す)) …[1]	0:00	抜粋 3-5(1)
楽譜(曲)の評価 …[2]	0:02	抜粋 3-5(1)
次回の練習日程、渡された楽譜の扱い …[3]	0:27	抜粋 3-5(2)
Nが練習に積極的に参加していること(のからかい) …[4]	1:53	抜粋 3-5(3)
現在いる建物 …[5]	2:30	抜粋 3-4
《終了》 …[6]	2:59	抜粋 3-2

このように、この会話ではいくつかの話題¹¹と呼べるものがやり取りされている。以下ではそれぞれの話題の性質について、会話の終結の機会との関連から考察を加える。

ここまでで扱っていない[1]-[4]のやり取りについて、やり取りの概要が一望しやすいように、長くなるが抜粋をまとめて掲載する。

【抜粋 3-5(1)_楽譜】

01 D: お疲れさまで:す.

02 N: あざっ s:

03 (0.8)

¹¹ 「話題」が何を指し、どのような観点で単位として区切られるか(あるいは区切ることができないか)については様々な議論があるが(申田 1997 ほか)、ここではこの会話が全体としてどのような事柄を扱うものであったかについて概観することを目的とするため、厳密な定義については一旦措き、「そこで話されていること」と簡単に定めておきたい。

04 D: たけしさんがファンキーにできるかな(とか言ってました.)

05 N: ° hhhhhh°

06 D: むずかしいなっ

07 (0.8)

08 N: ° むずかしいよ(ちょっと)

09 ((中略: 楽譜の特徴について))

【抜粋 3-5(2)_楽譜】

10 D: が::っと全部書いてあるんで.

11 (1.0)

12 N: ° (昔からそんな っすよ)°

13 D: あと:(0.4)あの::(.)土曜日なんすけどど:あ[の:たけしさんの:あの:メール待ちで=

14 N: [うん.

15 D: =(した)んすけどど:

16 N: うん.

17 D: その日集中入っちゃっ:

18 N: うん

19 D: で::(.)<なく>なるかなと思ったら::いややるっなっ:

20 N: hhh

21 D: 金曜日の:夜って空いてますか.

22 ((中略: 練習日程と受け渡しを行った楽譜の扱いについて))

【抜粋 3-5(3)_楽譜】

23 D: まあたぶん(0.6)んなかんじですかね

24 (2.0)

25 N: 了解で s:す.

26 D: のやさんも(.)研究がてら(.)申し訳ないっ s::

27 N: ¥いえ[いえいえ.¥

28 D: [HHHHH h h h

29 N: hh

30 D: 部の重鎮として(.)いけるんじゃないですか完全に.

31 N: hhh .hh

32 D: 部員名簿に(.)書きましようよ.

3.4.1. 開始部分(抜粋 3-5(1))

開始部分(表 3-1[1]-[2]相当箇所)の特徴をまず見てみたい。最初の話題の位置に置かれた話題は、この会話の機会がどのようなものだったのかを捉えるに際し重要な情報を有していると考えられる。

抜粋 3-5(1)1 行目は D による挨拶と聞かれる発話、2 行目は D が楽譜を(持ってきて)くれたことに対する感謝の表明と聞かれる。ここで挨拶が行われると同時に D から N への楽譜の受け渡しがあったと考えられる。楽譜の受け渡しは二人が出会ってすぐさまなされていること、受け渡す際に楽譜の存在について特に言及(例えば「これ今度使う楽譜です」など)されていないこと、またその行為を N は感謝の表明で受け入れていることから、少なくとも楽譜の受け渡しを行うことが事前に同意されていたことが分かる。

電話会話における開始連鎖の次という位置は、最初の話題、多くはその相互行為の理由によって占められるとされる重要な位置である (anchor position: Schegloff1968; Robinson2012)。楽譜の受け渡しは話題それ自体ではないものの、電話会話に関する最初の話題の位置を敷衍し、相互行為の目的として理解され得る位置で生じていると見ることができるのではないだろうか。言語化されている最初の話題については、4 行目から開始している。ここでは「ファンキーにできる(4 行目)」対象は言語化されてはいないが、楽譜を渡すという行為と組み合わせられることで、手渡された楽譜(楽譜に記されている曲)がそのままやり取りの主題として取り上げられている。

以上で見た開始のやり取りからは、事例 2 の会話では楽譜の受け渡しの位置の特徴から楽譜の受け渡しがなされるべきことが事前に了解されていること、そしてこれがこの会話の機会が設けられた理由であることが示唆される。楽譜の受け渡しは、これを行わない限りここでの会話を終了できないような、この機会の目的の一つであると考えられる。

3.4.2. 最初の話題の終了部分(抜粋 3-5(2))

この楽譜に関わるやり取りの終わりは、会話を終えることのできる最初の位置となっていると予想される。抜粋 3-5(2)は、最初に生じた話題の境界と分析されるやり取りの周辺を切り取ったものである(表 3-1[2]の終了と[3]の開始相当部分)。

12 行目までが、楽譜の情報についての発話である。11 行目の沈黙や、12 行目の独り言

のようにつぶやかれた発話からは、この話題が終局に至っていることが示されていると考えられる。

12行目の発話の後Dは、「あと」という累加を示す接続詞を用い、沈黙を挟むことなく順番を開始している(13行目)。このことによって、話すべきことが楽譜に関する内容とは別にまだ残されていることが示されている。そのため終結を開始し得る話題の境界という位置は、話題の開始によって埋められているといえる。

13行目の発話は、「あと」の後に沈黙や言いよどみを複数含んでいる。ここでは順番の冒頭でひとまず話すべきことが残されていることを示した上で、時間をかけて発話の組み立てが行われている。12行目付近が話題の終局に至っていること、そしてやり取りがこの先、会話の終結に向けて方向付けられる可能性があるというDの理解が示されていると考えられる。Dは話題の累加をまず明示することで、沈黙や、その結果生じる終結への方向付けを防ぐことに成功している。ここから開始されるのは練習日程の調整と報告である。

3.4.3. からかいへの推移部分(抜粋 3-5(3))

抜粋 3-5(2)で生じた話題は抜粋 3-5(3)のように収束し、さらに別の話題へと推移していく(表 3-1[3]と[4]の境界相当部分)。23行目から25行目は、この話題の最後の部分である。23行目「んなかんじですかね」でこれまでのやり取りを引用の形に再構成し、発話を締めくくことでやり取り自体をまとめている。そしてこの発話は明示的な受け入れ「了解でs:す」という反応を得ており(25行目)、話題が終局に至っていることが分かる。

この話題を閉じる際に生じた、26行目と27行目に注目したい。26行目の発話は、ここまで話されていた練習日程に関連して、時間を割いてもらうことに対する気遣いと聞かれる発話である。抽象的な気遣いの発話は、具体的な情報のやり取りの中より、それをまとめる位置で用いやすい発話であると考えられる。ここでの26行目の発話は微妙な性質を帯びたものであり¹²、単純な気遣いではなくNを揶揄するものとしても聞かれる。反応としてなされているNの発話に含まれた笑いは、そのような性質への理解を示すものだろう。

¹² この気遣いの発話の持つ微妙な性質とは、直前までの日程調整のやり取りと結び付きがある。この日程調整は、彼らのバンドのメンバーの一人である社会人「たけしさん」(抜粋 3-5(2),13行目)が、練習に参加するためにDやNの大学がある地域までわざわざやって来るため行われているものである。二人はたけしさんが社会人でありながら大学生に混じっての練習に熱心であることに「すげえ」、「社会人(笑いを含みながら)」といった表現を与えており、忙しい「社会人」という属性と、バンドの練習に熱心であるという事実との間にある相容れない性質を面白がっているように聞かれる。抜粋 3-5(3)の26行目「のやさんも研究がてら申し訳ないっす」は、たけしさんが社会人であることに、のやさん(N)が研究に忙しい「院生」であることを擬えて、これまでともに面白がっていた相容れない性質をN自身も有していることをDが取り上げているものと考えられる。

つまりここでは、会話が終結に向かい得る機会である話題の終局に、からかいや冗談と聞かれるような、新しい行為を生じさせ得る性質を含む発話が置かれることで、さらなるやり取りが引き出されている。そのためここは終結の開始の機会として現れていない。この話題は、先に見た楽譜の受け渡しや日程調整がここで行われるべきものとして用意されていたものであるのに対し、偶発的に生じたものであるといえる。

笑いが生じた後には、より明示的に揶揄と聞かれる発話によって D が N に反応を追求しており(30 行目)、サークル内でもっと N の存在を強く示していくべきであるといった冗談のやり取りが展開されていく。

3.4.4. 最後の話題(抜粋 3-4)

そして抜粋 3-5(3)の話題の終わりから最後の話題が生じる。この話題はここまでの話題に対し、明らかに異なる性質のものである。

【抜粋 3-4_楽譜】再掲

- 01 N: ああ:
 02 D: け-でもめっちゃいいところですよねここ.
 03 N: ああ::(.)それでもね:地震の時めっちゃ揺れる.
 04 D: へ::
 05 N: さっきもね:,結構ギンギン揺れてた.
 06 D: 耐震構造いまいちなんですかね.
 07 (0.4)
 08 D: なんか_
 09 (1.4) ((バイクの通る音))
 10 D: 確かにさっきも音がした
 11 N: ↓ねえ:::
 12 D: 文系研究室とかないんで.
 13 N: あそっか:
 14 (2.6)

会話をを行っている建物についてという最後の話題は、その場の資源を用いることで生み出された、場当たりの話題であるといえるだろう。話題の開始である 2 行目は、その前

に沈黙を挟まない直前の話題に密着する形で、また逆接を示す接続詞を用い、何らかの妥当性をもってここで取り上げられた話題であることを表示してはいるが、どの話題とも関連を持たない新規話題である。先に挙げたように、話題開始に用いられた褒めという行為は、沈黙を最小化し話題を引き出すための装置として機能しているという指摘がある(張承姫 2014)。このような装置を用い開始された場当たりの話題は、この会話の機会において交わされるべき話題が尽きつつあることを示しているように思われる。会話の開始以降ずっとそこにある資源に対する褒めが、会話が既に展開した位置で示された時、これは話題として優先性の高いものとしては聞かれない。また D は「めっちゃいい(2行目)」と非常に強い評価をもって開始した褒めを、N の非受け入れを受けてすぐに覆している。このことも、褒めがそれほど強い主張のもとになされたものではないことを示していると考えられる。

以上では、最後の話題以前の話題は会話の機会に先立って用意されていたものであったり(抜粋 3-5(1), 3-5(2))、新たな話題として反応せざるを得ない資源が話題を閉じる際に用いられ(抜粋 3-5(3))と、話題としてここで扱われるべき、もしくは扱わざるを得ない性質をそれぞれ備えていることを見てきた。このような当該相互行為の機会に中心的な話題に対して、最後の話題となった会話を行っている建物についての褒めは、その場の資源を話題化した、いわば周辺的なものであるといえる。当該の話題が実際に取り上げられるか否かは偶有的なものである。しかし実際になされた最後の話題の選択およびその展開において、当該会話の話題が尽きていることが見えるのだとしたら、これは会話参加者が終結の機会を測るための資源となり得るだろう。抜粋 3-4 で交わされた話題は、それ以前の話題との対比の中で、最後の話題として扱われ得る性質を十分に示すものであると考えられる。

3.4.5. 終結(抜粋 3-2)

最後に、これまでの観察を踏まえ、3.2 節に見た事例 2 の終結の部分をもう一度見てみたい。

【抜粋 3-2_楽譜】再掲

01 D: 文系研究室とかないんで。

02 N: あそっか:.

03 (2.6)

04 D: じゃ(.)またよろしくお願ひ[しま]す。

05 N: [あっ]

06 (0.2)

07 N: ありがとう.

08 D: は::い

最後の話題の後に示された「じゃ(.)またよろしくお願いします.(4行目)」という発話は、「あっ(5行目)、ありがとう.(7行目)」と会話全体への志向を示す発話によって受け止められている。

5行目、7行目のこの発話は、次回の接触に関するものと聞かれる4行目に対して、それを受け入れる(例えば「はい」や「よろしく」といった反応があり得るだろう)といったような直接対応する発話とは聞かれない。直接対応しないにもかかわらず、感謝を述べることが行われているのは、それをここで行わなくては今後行う機会を失ってしまうこと、つまり会話の終結が差し迫ったものとして示されたことに敏感に反応したものであると考えることができる。このようなNのやり残した行為を引き出した4行目の発話は、終結の開始としてDに理解されている。

直前の発話に対してではない、そのため会話の全体に対してのものと聞かれる感謝の表明は、会話全体つまり二人の間で生じた今回の機会が何であったかに対するDの理解が示されている。この事例2「楽譜」は、DがNのために楽譜を持ってきてくれるために生じた機会としてNに理解されており、また感謝を端的に受け入れ最後の発話としているDもこれと同じ理解を示しているといえる。

本節では、終結に向けた手続きの一つを担う前終結に代わる、終結に向けた組織について、会話の全体を追うことを通して考察した。事例2「楽譜」の終結は、別れの挨拶以前に、相手に自由な発話順番を与える発話や、事例1に見られる勧誘のような、終結への志向を明確に示す行為のようなものが観察されない。このような手続きを補うものとして事例2では、最後に取り上げられた話題とそれ以前の話題の組み立てから、この相互行為の機会において話題が尽きていること、つまり終結が適切となることが示されていることを見てきた。これは参加者が終結に際し参照できる情報の一つとなっていると考えられる。

3.5. おわりに—終結に向けた局所的・全域的組織—

以上では、対面で生じた相互行為の一場面として立ち話を取り上げ、ここでの終結に向けた実践について記述を行った。終結の合意を形成するための組み立てが、終結の直前の

みではなく会話の全域を通しての組織においてもなされ得ることを、具体的事例の観察を通して確認した。会話の終結は会話の開始とともに全域的組織の中に位置付けられ取り上げられることが多い一方で、終結が会話内のどのような組織と具体的に絡み合っているのかについては、それほど具体的に議論されてきていないように思われる。本章ではこのような背景に対して、観察対象を終結の直前から会話全体に広げ、ここに見られる終結に向けた組み立てを追うことを通し、全域的組織の具体的な実践について記述を行ってきた。

事例 1 では「誘い」という明確な会話終結への志向を示す行為を用いて最後の話題が終了させられていることが、終結に向けた組織として機能している可能性について示し、これを前終結の手続きを補うものとして指摘した。事例 2 においては、最後になされた話題の性質が、会話を終結させることが適当であることを指標するものであることを指摘した。会話終結が適切であることを示す当該話題の性質は、会話内で扱われている話題同士の関係について見る中で得られるものであると考えられる。この会話の機会に中心的な話題、例えば二人が会う理由となっている楽譜に関する話題との対比の中で、二人が話している場所について話すことは場当たりので周縁的なものとして位置付けられるだろう。このような話題の中心性と周縁性を参照する中で、会話を終結させることに対する交渉を担う前終結の役割は補われていると考えられる。

最後に、残された課題の指摘も含め、本章が扱った二つの事例の終結から示唆されることの意味について先行研究との関係から触れておきたい。3.2 節ではこの事例において、終結部の二つの手続きが不完全、あるいは未分化な形で出現していることを見た。この要因として考えられるものにはいくつかの可能性がある。一つには、日本語の表現形式の特徴である。例えば「じゃあ」などは、O.K.などの前終結の表現に当たるものとして挙げられるものであるが、終結の直前の連鎖で多く観察されるという点だけでなく、その細部における振る舞いがどの程度対応するものなのか検討する必要がある。また「じゃあ」や「ありがとう」、「またよろしくお願いします」などのような発話は、終結を切り出す前終結として聞かれ得ると同時に、別れの挨拶ともなり得る形式である(熊取谷 1992)。これは最終交換であることを強く示す Bye のような形式とは、一旦区別して扱うべきかもしれない。

そして二つ目には、相互行為が対面で行われているのか、電話回線を通し非対面で行われているのかという要因があるだろう。この違いは、視覚的資源が用いられ得るかという差だけではない。電話会話では接触を断つ一瞬のタイミングを探ることが行われること、また回線の切断によって一度切られた会話は再び手続きを経なければ再開することができないという性質があり、これは対面で行われる相互行為とは異なる点である。このことは

終結の組み立ての周到さに関与している可能性が考えられる。実際に日本語による電話会話の終結では、やり取りの往復が多く観察されることが指摘されている(藤原 1998)。

さらに三つ目として、この媒体の違いに関連して、生じ得る相互行為場面の性質自体も異なってくるという点も関係が予想される。立ち話という状況は電話会話では生じ得ない。実際には立って行われる電話会話であったとしても、ここでの会話は参与者にとって決して「立ち話」としては理解されない。その会話が何として行われているのかという参与者の理解は、その終結にも影響していると予想される。本章の冒頭で述べた言語活動のバリエーションは、終結の組織に直接関係しているものである可能性が示唆される。この点からも、具体的な言語行動のバリエーションにどのようなものがあるのかに関する研究の必要性が指摘できる。

これらの考えられる要因同士は、おそらく互いに絡み合ったものであると考えられる。以上の可能性について検討するためには、より多くの具体的事例について記述を進める必要がある。

4章 制度的場面における会話の終結

—実習反省会の観察から—

4.1. はじめに

本章では制度的場面における会話の終結について記述を行う。これは日常会話の終結に並んで、私たちが日常で多く体験している会話終結場面の一つである。しかし日本語でやり取りのなされた制度的場面の終結に関しては、これまで研究の焦点としてほとんど扱われてきていないという現状がある。そこで本章では、大学の実習科目の一部として行われた反省会という場면을扱い、ここでの終結がどのようになされているのかについて観察する。

制度的場面における会話と日常会話は連続的なものであり、終結の組織においても会話の全域を参照するという点において共通の特徴が見出される一方で、その参照のなされ方は異なっていると考えられる。本章では参加者の振る舞いの記述を通し、制度的場面に特有な参照先である「反省会の構造」が、会話終結の組織に利用可能な資源となっていることを指摘する。

4.1.1. 制度的場面

制度的な場面と一口にいても、ここには様々な性質のものが含まれる。制度的場面における会話として挙げられるものに、例えば法廷、教室における授業、ニュースインタビュー、診療場面においてなされるやり取りなどがある。この中には私たちが日常的に関わることの多いものからそうではないものまでが含まれている。例えば法廷場面は、法廷で働くような人たちを別として、私たちの日常生活の中でそれほど馴染みの深いものではなく、このような相互行為を一生に一度も体験することがない人もあるかもしれない。一方で学校での授業場面や会社の会議などのようなものは、私たちの多くが体験したことのあるものであり、法廷などと比べると日常生活により密着したものといえるだろう。そしてごく小規模な会議であったり、その参加者が親しい者同士であった場合などにおいて、この場面は日常的なおしゃべりの場面に近い形で現れるかもしれない。

本章で取り上げるのは、大学機関における教育という文脈に生じた「実習反省会」である。これを制度的場面と呼ぶのは、ここでの相互行為に制度への志向が見られるためであ

が、しかしここで行われているやり取りが常に制度へ志向したものであるというわけではない。その場面が制度に志向したものであるか否かは、その時その時の相互行為を通して可視化するものであり、そこでのやり取りは時に制度から逸れたものにもなり得る。

日常会話と制度的会話の境界は必ずしも明確に定義することはできないが(Heritage 2005; Heritage & Clayman 2010 ほか)、Levinson(1992)の「参加者の志向(participants' orientation)」という考えをもとに、Drew & Heritage(1992)は制度的場面の特徴として、以下の三点を挙げている。一点目は、当該制度を想起させる目的、役職、アイデンティティに対する参加者の志向があること。二点目に、そこで行われる仕事の遂行のために、参加者がどう携わるかについて、特定の制約が加えられること。そして三点目は、推論の枠組みや当該制度の文脈に特徴的な手続きを想起させることである。

当該場面が制度的であるか否かは、ただ単純にその場面が授業中であるかそうではないかといったような、相互行為の外部から定められた区別によってもたらされるものではなく、参加者の志向のもとになされた、参加者の振る舞いによって立ち現れるものであると考えられる。会話分析の採用するコンテキストに対する考え方、発話がコンテキストによって形つくられる(context-shaped)という側面と、発話がコンテキストを更新する(context-renewing)という側面の両者が同時にある(Heritage 1984 ほか)ということは、制度的場面の成立についても当てはまる。参加者が当該制度に沿って振る舞うことによって、当該場面がそのような制度的なものとして立ち現れ、さらに参加者がこの制度に沿って振る舞うことによってそれが引き継がれていく、このような繰り返しによって制度的場面は維持されると考えることができる。

制度的場面におけるやり取りに関しては、多様な場면을扱った研究の蓄積がある。例えば学校授業を扱った Mehan(1979)が、ここでのやり取りの連鎖に見られる、教師による開始(Initiation)、生徒による応答(Response)、教師による評価(Evaluation)という型(IRE 連鎖)を指摘したことは広く知られている。このような連鎖を用いることで、教える・学ぶという活動が、教師と生徒の両者によって組み立てられていくことが指摘されている。これは単純に教師と生徒が、授業として決められた時間に教室にいるだけではなされ得ない。ここには、参加者たちが当該場面を理解し、そのように振る舞う能力を以ってしてはじめて、授業という活動が達成されることが示されている。

4.1.2. 本章の位置付け

日常会話の終結と制度的会話の終結とを、同じ終結という括りのなかで議論することが

適切かどうかについては検討する必要がある。ただ先述のとおり、日常会話と制度的会話を明確に切り分けることは難しく、それが一般に日常会話、あるいは制度的会話として扱われることを理由に、終結が全く別のものであるとしてしまうことは、明快である一方で、会話の終結とは何かを広い視野から考察する機会を奪ってしまうように思われる。

少なくとも「発話を伴った相互行為の終わりを形づくる」という点において、両者は共通の課題に取り組んでいると考えることが可能である。制度的会話の終結が、例えば日常会話の終結の中心的な例である「別れ」と同じ意味での終結ではないことは了解した上で、これらとともに終結という観点から観察し、相違点のみではなく共通点についても見出すことができれば、会話の終結について、これがどのようなものなのかを検討する材料となり得ると考えられる。

4.1.3. 観察の手順

次節以降では実習反省会の音声資料を扱い、終結のやり取りを見て行きたい。まず 4.2 節では実習反省会の概要について述べ、その中で本章が焦点を当てる箇所について 4.2.1 節で限定する。続いて具体的な観察に入る。日本語で行われた制度的場面の終結それ自体に焦点を当てた先行研究は管見の限りほとんどないため、実習反省会の終結に見られた中心的なやり方について、会話終結の手続きの一つである前終結の行われ方の観点から、観察される二つの型をそれぞれ記述する(4.2.2 節, 4.2.3 節)。観察の結果を先取りすると、この二つの型の一方は終結を行うか否かの交渉が明確に示されているものであり、もう一方はその部分を欠いているものである。

4.3 節では後者のような、終結の直前での交渉を必要としないやり方での終結がどのようにして可能になっているのかについて、反省会にある制度との関係から考察する。反省会は制度のもとに全体の構造を持っており、その構造が随時参照されながら会が進められていく、つまり終結に向けて進められていくことによって、会話終結がいつなされるのかに関する情報が事前に示されていることを指摘する。

続いて 4.4 節では、終結の手続きの二つ目に相当する箇所について扱う。4.3 節の議論からは、終結の手続きがなくとも反省会の終結は達成され得ることが示唆される一方で、参加者の間には二つ目の手続き、最終交換を実行することへの志向が観察される。このことを、最終交換を交わすことに問題が生じている場面の記述から示す。

最後に 4.5 節で、実習反省会において終結がどのように達成されているのか、またここに制度的場面という特徴がどのように関係しているのかについて、本章の考察をまとめる。

4.2. 実習反省会の終結

はじめに実習反省会という場面がどのようなものなのか説明しておきたい。これは、大学機関の学部生、大学院生を対象とした実習科目の一部として行われたものである。この科目では、実習生が大学近隣に住む日本語非母語話者に募集をかけ、集まった人びとを対象に、自らが作成した指導案をもとに日本語の授業を行う。指導案や実際の教壇実習に対しては、教員およびティーチング・アシスタント(両者をまとめて以下「教員」とする)が指導にあっている。

教壇実習は平日月曜から金曜の 4 週間にわたって、一日に三コマが行われる。各コマは一名の実習生(以下「授業担当者」とする)が担当し、同日に授業を行う三名がチームとなり授業案を組み立てる。授業の様子は、別室で授業担当以外の実習生(以下「観察者」とする)および担当教員(各回一名以上、4 名で持ち回り)によってリアルタイムに観察されている。教壇実習の直後には授業担当者、観察者、担当教員が集まり、実習の反省・感想や改善案などについて共有し合う。本章で扱うのは、この教壇実習後に行われる反省会という相互行為場面である。

反省会に参加する実習生は、授業担当者三名と、それを見学した学生 4-8 名である。そこに担当教員一名が加わり、会の進行をとり仕切る。参加者は計 8 名から 12 名である。収録した資料の内訳は以下に示すとおりである(表 4-1)。

表 4-1 実習反省会収録資料内訳

資料番号	収録日	収録時間 ¹³	参加人数	担当教員
X1	2011 年 5 月 16 日	1 時間 10 分	9 名	A1
X2	2011 年 5 月 17 日	1 時間 18 分	9 名	A2
X3	2011 年 5 月 18 日	1 時間 10 分	10 名	A3
X4	2011 年 5 月 19 日	1 時間 32 分	12 名	A4
X5	2011 年 5 月 25 日	1 時間 16 分	11 名	A3
X6	2011 年 5 月 26 日	1 時間 26 分	8 名	A4
X7	2011 年 5 月 30 日	1 時間 23 分	10 名	A1

¹³ 収録時間は一回の収録で得られた、参照可能な資料の時間数である。ここには反省会が始まる前後の雑談なども含まれるため、実際に行われた反省会そのものの長さはこれよりも短い。

各回の会の進め方は担当教員に任されているが、どの回も大きくは同じ流れで会を進行している。共通するおよその流れは、以下のようなものである。

1) 開始

「じゃあはじめましょうか」など、実習反省会の開始の宣言か、それに相当する発話が教員によってなされる。それまで多方面で生じていた発話や雑音が止む。教員が会の流れの説明や、参加者に期待される姿勢などについて簡単に述べる。

2) 反省・コメントの共有

教壇実習の一コマの授業に対し以下 A、B、C が行われる。

- A. 授業担当者の反省
- B. 見学者のコメント
- C. 教員のコメント

A がはじめに行われるのは、どの回も共通している。一方で B は、座席の順に観察者全員が話す形式の場合と、コメントのある人が挙手する形式の場合、あるいはこの両者を併用する場合とが見られる。また B の途中では、授業担当者がコメントを返したり、教員が関連するコメントや見学者のコメントを要約したりといった発話を挟む場合がある。また B や C の際には、授業担当者への質問(授業中の特定の部分について、そのような指導方法を採用した理由についてなど)なども適宜挟まれる。

この A から C を一セットとし、一コマ目の授業、二コマ目の授業、三コマ目の授業の順に、当日行われた三コマ分が扱われる。

3) 終了

三コマ目の授業に対する教員のコメントの後に、教員が続けて何らかのまとめのコメントを行う場合があり、その後反省会の終結がなされる。会の開始とは反対に、雑音や多方面での発話が聞かれるようになる。詳細について 4.2.1 節以降で見ていく。以上で述べた反省会の流れを模式的に表すと図 4-1 のようになる。

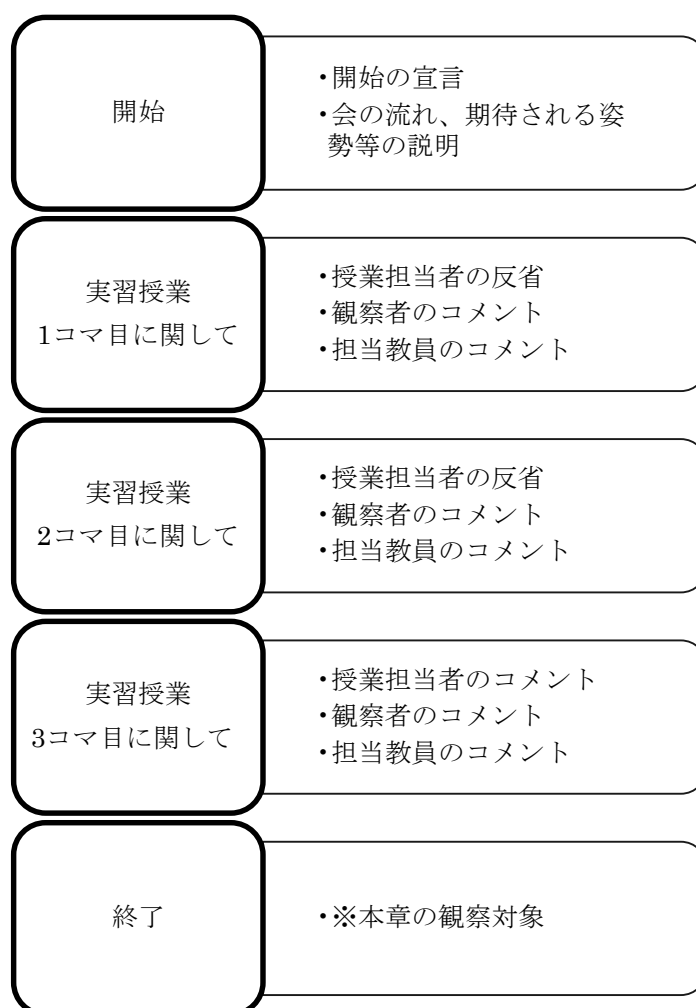


図 4-1 実習反省会の全体像

この実習反省会には、授業担当者、観察者、そして教員という三つの立場に合わせて、発言する機会が割り振られているという特徴がある。発言の機会が参加者の立場に応じて異なって生じるということは、順番交替システムが何らかの制約を加えられた形で作動していることを意味している。これは制度的場面の特徴(Drew & Heritage1992)の主に二点目に関わるものであり、反省会で行われるべきことの遂行に向けて、参与の仕方に特定の制約が加えられているものとして観察される。

制度的場面には、そこでの相互行為が順番交替システムの制約を強く受けるもの「フォーマルな場面」と、そうではないもの「フォーマルではない場面」があるが(江口 2000 ほか)、この反省会の場面は前者の「フォーマルな場面」に位置付けられるものである。

4.2.1. 観察の焦点

まずは終結部分の一つ取り上げながら、観察の焦点について整理する。

【抜粋 4-1_反省会(X5)】

- 01 A3: うん.>もうちょっと<.hh もっとこう:.hh うん.詳しく書いて(0.6)あ:(.)練習
 02 できるようなキューのね?シートなんかも分かりやすいの作っ↑て(.)こうやら
 03 せたら(.)よかったんじゃないかな° と思います° .sh はいっじゃあ>すいません
 04 長くなって以上です.<
 05 (0.6)
 06 A3: あと(.)なんか(.)言い忘れた:人とかいいませんか?大丈夫ですか?
 07 (0.4)
 08 A3: じゃまあ書いておわ-お渡ししてください.じゃあ終わります.
 09 A3:→ お疲れさまでした::
 10 複:→ ありがとうございます::

ここで行われていることを大雑把にまとめると以下のようになる。まず最後の授業に対する教員(A3)のコメントがあり(1-4行目)、「はいっじゃあすいません長くなって以上です」という発話によってコメントの終わりが示される。間合いを置いた後、言い忘れの確認(6行目)、「じゃあ終わります」という終結の宣言がなされ¹⁴、挨拶として聞かれる対となる発話によってこの回のやり取りは終了している。

反省会の最後の発話と聞かれるものは多くの回に共通のものが観察される。会の進行を担当する教員による「お疲れさまでした」という発話と、これに応答するものとして聞かれる「ありがとうございます」、「お疲れさまでした」という発話である。これは挨拶-挨拶という隣接ペアとして聞かれる。ここでは、日常会話の終結において順番交替システムを停止させる働きを担う最終交換と、ひとまず並行的に捉えておくことにする。抜粋 4-1のやり取りにおいて、最終交換に相当する箇所は以下の部分である(抜粋 4-2)。また別の回における最終交換の例を抜粋 4-3 に示しておく。

¹⁴ 8行目「じゃまあ書いておわ-お渡ししてください。」は、授業の評価シートの受け渡しのことを指している。後の抜粋 4-8 や抜粋 4-9 では、反省会の中でこの受け渡しが行われている。

【抜粋 4-2_反省会(X5)】

- 01 A3:→ お疲れさまでした::
 02 複:→ ありがとうございます::
 03 ((雑音))

【抜粋 4-3_反省会(X1)】

- 01 A1:→ お疲れさまでした::
 02 複:→ [お疲れさまでした::
 03 複:→ [ありがとうございます::
 04 ((雑音))

以下では、この最終交換相当の発話に至るまでの部分(図 4-2)がどのように組織されているのかについて見ていく。主に終結の直前の内容となっている「三コマ目の授業に対する教員のコメント」以降がどのように組織されているのかに焦点を絞り、実際の発話を取り上げて記述を行う。必要に応じてこれ以外の部分の発話、また反省会の流れを参照することにする。

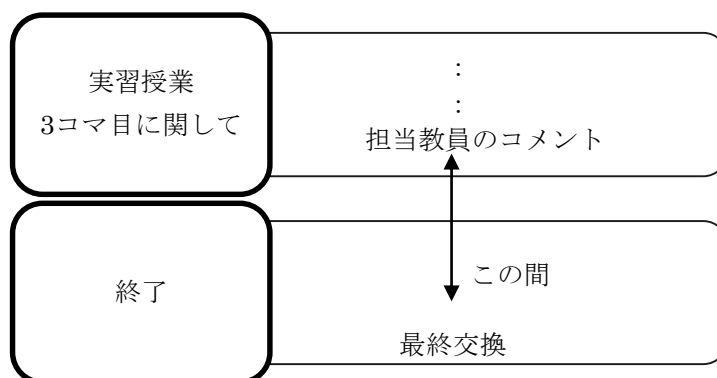


図 4-2 観察対象とする部分

4.2.2. 終結の組み立て 1—日常会話に類似した組み立て—

ここで先ほどの抜粋の観察に戻り、最終交換以前の部分を見てみる。

【抜粋 4-1_反省会(X5)】 再掲

- 01 A3: うん.>もうちょっと<.hh もっとこう:.hh うん.詳しく書いて(0.6)あ:(.)練習

- 02 できるようなキューのね?シートなんかも分かりやすいの作っ↑て(.)こうやら
 03 せたら(.)よかったんじゃないかな° と思います° .sh はいっじゃあ>すいません
 04 長くなって以上です.<
 05 (0.6)
 06 A3:→ あと(.)なんか(.)言い忘れた:人とかいませんか?大丈夫ですか?
 07 (0.4)
 08 A3: じゃまあ書いておわ・お渡ししてください.じゃあ終わります.
 09 A3: お疲れさまでした::
 10 複: ありがとうございます::

ここに見られる終結直前の組み立て方は、ある点において日常会話の終結に関する指摘に類似している。

1 から 4 行目では、担当教員 A3 が三コマ目の授業に対するコメントを述べ、コメントの終了が言語的に明示される(「以上です」)。ここで一つの発話機会のまとまりの区切れ目がつくられている。そして続く 6 行目の A3 の発話「あと(.)なんか(.)言い忘れた:人とかいませんか?」は、言い残したことのある参加者が、ここで話題を導入することができるということを示す発話である。

日常会話の終結における手続きの一つとされる前終結は、話題の終局で、相手に対し話題導入の機会を与える働きを担い、終結に進むか否かの交渉を行うものであった。今見ている 6 行目の発話は、先行するやり取りの終局に置かれているという位置の特徴、また話題のある人にそれを導入できる機会を提示するという機能の特徴について、前終結と類似していることが指摘できる。

ただし日常会話と異なる点として、発話デザインの特徴がまず挙げられる。英語によるミーティング会話を扱った Boden(1994)は、前終結の連鎖が極めて明示的に行われることを指摘しており、挙げられている表現「Okay, anybody e:lse?」、「Do we have any other business?」も、今見ている 6 行目の発話に類似している。話題の導入機会を与えているこの発話は、質問の形式が用いられ、隣接ペアの第一成分として組み立てられている。それによって、第二成分の産出が適切となる次の順番がその機会であることが明示される。また「言い忘れた人とか」という表現を合わせて用いることで、この機会を得ることができるのは言い忘れのある人誰でも、つまりこの場にいる参加者全員にその資格があることを言語化するものとなっている。

このようなやり方は、抜粋 4-1 とは別の回にも観察される。以下のようなものがある。

【抜粋 4-4_反省会(X3)】

- 01 A3: まあもちろんまあ::↑ね(.)こう::いくつとか(.)言う練習にはなったと思いま
 02 すけ ど,(.)>° そうですね。° <そのへん(.)m:もうちょっと工夫(.)できたら良
 03 かったかな?ってすみませんね:.[なんか終(h)わっ(h)た後に急:に思い出した_=
 04 C: [あ:いえいえいえ。
 05 C: =大丈夫[夫です。
 06 A3: [.hhh はい.すみませんでした。
 07 A3: .hh ↓は:い.あっじゃあ ↓もう: ↓7時も過ぎて(.)しまいましたので私が話しす
 08 ぎたのかもしれない° けど°
 09 複: ((笑い))
 10 A3:→ 他になんか(.)まだ:言い忘れ>私みたいに<言い忘れた[人とかいません?
 11 複: [((笑い))
 12 A3:→ 大丈夫ですか?:[もう書きますか?(0.4)あとは。
 13 複: [((紙をいじる音))
 14 A3: はい.じゃっ今日:の反省会はこれで終わらしましょう.お疲れさまで[した:.....
 15 複: [ありがとうございます
 16 いました::

この1から3行目でも、教員であり進行を取り仕切る A3 が、C の担当した授業に対して追加のコメント¹⁵を行っている。コメントを追加したことに対する謝罪と受け入れがなされた(3-6 行目)後、反省会の終結が開始されているように聞かれ、先ほど見たものと類似した言い残しを確認する発話が 10 行目でなされている。

以上二つの場面では、第二成分の位置で言い忘れが導入されることはなかった。つまり前終結相当に対して「パス」が返され、終結に向かうことへの同意が示されている。ただし可能性としては、実際にこの機会が使用されることがあり得る。この発話によって提示された機会が用いられ、言いそびれたことに関する発話がなされたやり取りの例が抜粋 4-5 である。

¹⁵ 当該コメントが追加されたものであるという理解については、4.3.1.1 節で詳述する。

【抜粋 4-5_反省会(X2)】

- 01 A2: あたり忘れとか重複し過ぎっていうのはないかなっていうのは_
- 02 B: うん.
- 03 A2: 思いました.>なんか<また終わったらまた今度逆からとるとか.
- 04 B: うん.
- 05 A2: こっち終わったら? (っていうふうに).°
- 06 (4.0)
- 07 A2:→ 私の方からは以上です.他に(.)何かありますかね.:結局(.)15 分か.
- 08 複: ((笑い))[
- 09 A2: [7 時 5 分に¥終わるかな¥(h)っと思った(h)のに.(.)hhh
- 10 ? : hhh
- 11 C:→ あなんか:,
- 12 A2: はい.
- 13 C:→ キムさんからのつつこみで,
- 14 A2: はい.
- 15 D: [キムさんからつつ(h)っこ(h)み(h)
- 16 B:→ [えっと::ゴールデンウィークは:3 日からぐ-え:5 日までじゃ:ないんです¥ね::
- 17 って¥
- 18 C: う::ん.
- 19 F: あ::[:まあそうだ.
- 20 E: [あ::29 日からだ.

担当教員 A2 が 7 行目でコメントの終了を示した(「私の方からは以上です.」)後になされた「他に(.)何かありますかね.」も、コメントの導入機会を提示する発話であり、先ほどの二つの事例に類似する発話である。直後は A2 による独り言として聞かれる発話と、それに対する笑いが挟まれるが、これが収束した 11 行目で、参加者の一人 C から「あなんか:」と発話が開始されている。ここで開始された話題の導入を聞く姿勢があることを、A2 は発話を促す「はい」という反応によって示している(12, 14 行目)。この後は、C が授業を担当した際に生じた小さな疑問点についてのやり取りが続く。

このように与えられた話題導入の機会を利用することで、進行を操作する担当教員以外

の参加者が発話の機会を再び得てこれまで言うことができなかったことを言い、結果として終結を遅らせることが可能になっている。前終結と同等の発話を組み込んだ反省会の終結の組み立てを用いることによって、終結をここで行うか否かの交渉が、制度的場面かつ多人数の参加者の間でも達成されている。以上のような終結に際しての交渉が反省会の複数の回において観察される。

4.2.3. 終結の組み立て 2—日常会話と異なる組み立て—

一方で、言い忘れの有無を尋ねるようなことがなされず、三コマ目の授業に対する教員のコメントの後、教員が発話を継続し終結に至るやり方も観察される。

【抜粋 4-6_反省会(X1)】

- 01 A1: .hh まあ徐々に:ねあの集中(.)のっ日本語コースの中で教えるべき(.)項目って
 02 いうのはなんだろうかっていうそのコースデザインに関することっていうのも、
 03 みんなで考えていってほしいなっというのが希望として一つありますね。
 04 (2.6)
 05 A1: ° はい° 以上です。
 06 (11.0) ((タイピング音))
 07 A1:→ ということでえ::ねっ(.)次回に向けての課題ということで(.)ねっ各自ね(.)あ
 08 の::>今日みたいな<ティーチャートークに気をつけようと思った.とかねこれを
 09 こうやろうと思ったというこう明確なね(.)目標みたいなのは各教師あったと思
 10 うんですけれども、今回に出た(.)え:反省というのを生かしつつ(.)次回はあれ
 11 がんばるとか(0.4)そういう気持ちで:え::アクションリサーチ的に臨んでいっ
 12 てもらいたいなと思っています。
 13 (1.6)
 14 A1:→ お疲れさまでした::
 15 複: [お疲れさまでした::
 16 複: [ありがとうございました::

まず抜粋 4-6 で行われていることの概要を見ておく。3行目まででは三コマ目の授業に対する教員のコメントがなされ、沈黙を挟んだ後、コメントの終了が「° はい° 以上です.(5行目)」という発話で示される。ここまでの流れは前節で見た回と共通している。異なるの

はこれ以降の終結に向けた組み立てである。A1の発話の間に置かれた間合いとして聞かれる長い沈黙(6行目)の後、発話が再開される(7-12行目)。そして発話の後に再び沈黙を置いた後、最終交換相当の発話によってこの回は終結する。この間に、言い残したことがある人が発言することのできる機会を明示的に示す形での、前終結に相当する発話はなされていない。これが前節までで見てきた終結と異なる点である。言い換えると、この時点においてA1は終結のタイミングを他の参加者と交渉することをしていない。しかし挨拶-挨拶の最終交換は同様の形でなされており、その後の参加者の振る舞いからも、ここが参加者たちにとって終結として問題なく理解されている様子が観察される。つまりこの反省会における終結は、日常会話の終結の手続きに含まれるような手続きとは異なる手続きによって、達成され得るものであると考えられる。そこで次節ではこの手続きを担うものについて制度的場面の特徴を参照してみたい。

4.3. 実習反省会における制度

抜粋4-1などに観察される前終結相当の発話は、反省会の参加者がもし話したいことがあればそれを話す機会を与え、終結を先送りする機能を担っていた。対する抜粋4-6では、このような機会を設けないやり方で終結を達成していることを見た。つまり後者の終結直前の位置では、終結を先送りする可能性への志向が前者のように示されていない。では参加者間の交渉を挟まずに、進行を担う参加者が単独で反省会を終えることが当然のものとして扱われるのはどのような場合だろうか。このことは制度的場面と強い結びつきがあると考えられる。そこで、4.3.1節では終結について一旦措き、実習反省会の制度の持つ特徴について見てみたい。

注目するのは、当該場面で何がどのような順序で行われるのかという会話の構造である。医療場面における医者と患者の振る舞いについて分析を加えたRobinson & Stivers(2001)は、ある活動の段階、例えば問診を終えた時、患者は続いて行われる活動の段階、例えば触診への移行を医師の明確な指示を受けなくとも適切に行っている例を複数示している。ここでの患者たちは、活動の各段階がどのような順序で行われるかの構造に志向し振る舞うことによって、その移行を達成しているとされる。では実習反省会における構造およびそれに対する参加者の志向はどのようなものだろうか。

4.3.1. 実習反省会の構造

実習反省会は実習科目の一環として行われる、明確な目的を持った活動である。最も明

示的に目的とされているのは、その日行われた教壇実習について意見を共有し合い、今後の日本語教育に関する活動(一番に想定されるのは、自身が日本語教師として実際に教えること)に活かすことのできる知見を実習生が得ることである。この目的は明確である一方で、有益な知見を得ることが達成されたのかどうかを客観的に判断することは困難である。しかしどこかの段階で反省会は終わらせなくてはならない。

このような状況で反省会を終わらせることが最も適切となるのは、各参加者が提示すべきであると判断した意見が、全て共有された時であると考えられる。4.2節に挙げた、三コマそれぞれの授業に対して、参加者に発話の機会を配分しコメントを行うという会の進行方法は、この達成を見えやすくする方法の一つであるといえる。

実習反省会の構造について、ここでもう一度振り返ってみたい(図 4-1, 再掲)。

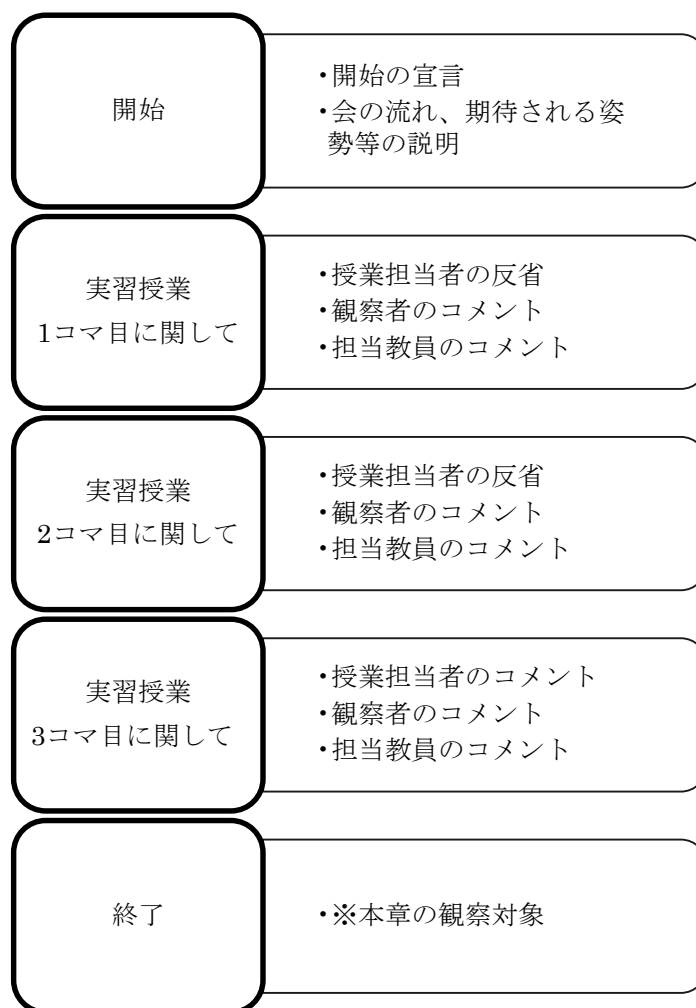


図 4-1(再掲) 実習反省会の全体像

この構造は実習反省会で何がどのような順序で行われるのかについて、参加者に一定の情報を与えている。最後に行われるべき活動が何かについてもここに含まれる。そのため参加者は、この構造をもとに反省会を終える最も適切な時がいつなのかを参照することができるといえる。

4.3.1.1. 実習反省会の構造への志向

このような反省会の構造が参加者に志向されていることは、各回の反省会が結果としてこの展開を見せたことだけでなく、会の進行中における参加者の振る舞いからも見ることができる。例を一つ挙げる。

【抜粋 4-7_反省会(X3)】

- 01 A3: .h そうだね.:あと:.hh なんとかね:,(.)ひとつふたつとか:(0.6)>入れられ<(.)
- 02 ね.[いちまいにまいと↑か:入れられたらよかったですけどね:なんか難しい=
- 03 B: [そうですね::
- 04 A3: =ですねっ.
- 05 (0.6)
- 06 A3: これは.
- 07 (0.6)
- 08 A3: はい.
- 09 (0.6)
- 10 A3:→ あ h(.)あと(.)>ちょっとごめん<(.)↓もどっていい?
- 11 複: ((笑い))
- 12 A3:→ す:(h)いません↑もう終わったと思ってた. .hhh ↑ごめんね.
- 13 (0.4)
- 14 A3: 私ちょっともうそ-そういう(.)流れで考えたら:;>たとえばほら<(.)あの:(.)実
- 15 質に基づいた(.)会話?っていうことでもと s-あの:考えたら:;>たとえばほら<
- 16 ((中略 32 秒 A3 の発話(表現の例示)))
- 17 A3: ど-どういう風に
- 18 C: ° えっ[h:°
- 19 A3: [班で考え(.)° たんですよね?
- 20 C: あっ k:;>なんか<自分:だけの考えかもし[れないんですけども,

- 21 A3: [あっそうなんだ.]
- 22 ((中略1分38秒 C(一コマ目の授業担当者)とA3のコメントのやり取り))
- 23 A3: まあもちろんまあ::↑ね(.)こう::いくつとか(.)言う練習にはなっただと思いま
- 24 すけど,(.)>° そうですね。° <そのへん(.)m:もうちょっと工夫(.)できたら良
- 25 → かったかな?ってすみませんね.: [なんか終(h)わっ(h)た後に急:に思い出した_=
- 26 C: [あ:いえいえいえ.]
- 27 C: =大丈夫[夫です.]
- 28 A3:→ [.hhh はい.すみませんでした.]

抜粋4-7に観察されるのは、反省会の流れに反する行為である。抜粋の冒頭部分は、教員A3が3コマ目の授業に対するコメントを行っており、このことは3コマ目の授業担当者であるBがこれに反応を返していることからいえる(3行目)。「はい」という発話(8行目)と沈黙(9行目)によって、A3のコメントの終わりが示された後の10行目の発話に注目したい。このA3の発話「あh(.)あと(.)>ちょっとごめん<(.)↓もどってい:い?」の後に行われていることは、一コマ目の授業に対するコメントである。これはコメントで言及されている内容に加えて、一コマ目の授業担当であるCが、A3のコメントに受け答えしていることから分かる。つまり10行目の「もど」とは、三コマ目へのコメントの後に、一コマ目へのコメントを行うことを指している。反省会の構造にある一コマ目から二コマ目、三コマ目の順にコメントするという流れに反していることをA3は「もど」と言及し、しきりに謝罪(10, 12, 25, 28行目)、また弁明(25行目「急:に思い出した」)している。ここで示されているのは、A3が自らの振る舞いが反省会の流れに逆行するものであると捉え、それが謝罪、弁明すべき違反であるという理解である。つまり無標とされる正常な進行とは、三つの授業へのコメントは一コマ目から三コマ目の順に扱われ、そして各コマに対するコメントは扱う対象が次のコマへ移るまでの間に行うというものであり、そのような反省会の構造への志向がここでのやり取りに示されているといえる。

反省会の問題が起こっていない状態とは、期待される構造に沿って進んでいる状態であり、抜粋4-7ではそれが滞っていた。これは三コマ目から一コマ目へ、という現在のコメントの流れが、期待される構造に対して逆行しているという状態である。会における現在の進行状況を参加者がリアルタイムに把握できるのは、期待される反省会の構造に参加者が志向し、その中に現在行われていることを対応付け、位置付けることができるためであるといえる。

4.3.1.2. 構造化の手がかり

前節で見た抜粋 4-7 の例は、現在の発話で一コマ目について話されているのか、三コマ目について話されているのかといった、当該発話が扱っている話題という情報を利用し、反省会の構造との対応付けが行われているものであった。対応付けに用いることのできる情報は、他にも観察される。本節では現在の発話を会の構造に対応付けるために、参加者が参照していると考えられるその他の資源について指摘する。

4.2.2 節で取り上げた、日常会話と類似の特徴を持つ終結のやり方で用いられていた「あと(.)なんか(.)言い忘れた:人とかいいませんか?」などの発話について、この発話が日常会話の前終結のように、終結のタイミングの交渉を担うものであるということは既に指摘した。加えてこのような発話は、反省会を構造化するという側面を有していることに本節では注目したい。ミーティングでの相互行為を取り上げた平本・高梨(2012)は、「何か質問はありますか」という発話が、説明を行うミーティング場面の局面を構造化する働きを担っていることを指摘している。話題の境界の後にこの質問がなされた時、あるひとまとまりの説明に関わる話が終了したことが、説明の受け手に示されるとされる。「何か言い忘れた人はいませんか」も、この発話に類似する側面を持っているといえる¹⁶。この発話がなされた時、ここまでのやり取りは言い忘れがなければ終わることができる局面に至っていることが相手に示され、また言い忘れがあれば、これまでのやり取りとは独立にそれを新規に提示することができる局面に至っていることが相手に示される。つまり前終結相当としたこの発話は、反省会を構造化するものでもあるといえる。このような要素を以下では「構造化の手がかり」と呼びたい。ミーティング会話について Linde(1991)が挙げている、話し合うべき事柄項目間の移行で用いられる話題の終了を示す談話標識(「Well」、「OK」、「So」など)や、評価の発話(「Well that's OK.」など)も、ミーティング会話の構造化の手がかりの一つ

¹⁶ 平本・高梨(2012)の扱う「何か質問はありますか」と、本章で見られる「何か言い忘れた人はいませんか」は、応答の優先性 (Schegloff2007)に関しては、逆の特徴を持つ形式となっている。前者の優先される応答は「ある」であり、質問を導入することに志向しているのに対し、後者の優先される応答「いない」は、導入される話題がないことに志向している形式である。平本たちが指摘するように、説明場面では説明を受ける者たちの理解や納得がその達成に重要であるという性質がある。一方でここで見ている反省会について、この発話を受ける参加者たちは、その時点まで既に発話の機会を十分に与えられており、その中で「言い忘れ」という事態が期待はされないと考えられるため、二場面は異なる性質を持つ。またこれらの発話が用いられる位置にも違いがあり、「何か質問はありますか」はひとまとまりの説明の節目ごとに繰り返し用いられ得るとの指摘があるのに対し、「何か言い忘れた人はいませんか」が用いられるのは、それが言い忘れとして聞こえるような位置、何らかの機会を逸した箇所である。なお反省会において、実習生のコメントを募るような場面でも類似の表現による構造化が見られるが、ここで繰り返し用いられる形式は例えば「他にどうでしょうか」や「他に何か」などであり、極性が示されておらず、そのため形式の側面については応答の優先性が問題とならないものとなっている。

といえるだろう。このような発話を用いることで参加者たちは、遡及的に、また予測的に、自分たちが現在、当該ミーティングの中でどこにいるのかを知ることができる(Atkinson, Cuff & Lee1978)。つまり反省会が終結しその全貌が示された後、行われたやり取りを振り返る中で漸く当該部分の会話全体における局面が理解可能になるのではなく、参加者たちは相互行為の進行しているその時に、現在までのやり取り、この後に生じるやり取り、そして現在進行中のやり取りが、反省会の進行の中のどこに位置付けられるものなのかについて把握することができる。

4.3.1.3. 制度的場面の構造と構造化の手がかりの対応付け

構造化の手がかりから得た現在の局面についての情報を、実習反省会の構造の中に対応付けることによって、参加者が現在の会の進行について情報を得ている可能性について以上で見てきた。ではここで前終結相当の発話を伴わない終結の組み立て(抜粋 4-6, 再掲)に戻りたい。

【抜粋 4-6_反省会(X1)】再掲

- 01 A1: .hh まあ徐々に:ねあの集中(.)のっ日本語コースの中で教えるべき(.)項目って
 02 いうのはなんだろうかっていうそのコースデザインに関することっていうのも、
 03 みんなで考えていってほしいなっというのが希望として一つありますね。
 04 (2.6)
- 05 A1: ° はい° 以上です。
 06 (11.0) ((タイピング音))
- 07 A1:→ ということでえ::ねっ(.)次回に向けての課題ということで(.)ねっ各自ね(.)あ
 08 の::>今日みたいな<ティーチャートークに気をつけようと思った.とかねこれを
 09 こうやろうと思ったというこう明確なね(.)目標みたいなのは各教師あったと思
 10 うんですけれども,今回に出た(.)え:反省というのを生かしつつ(.)次回はあれ
 11 がんばるとか(0.4)そういう気持ちで.え::アクションリサーチ的に臨んでいっ
 12 てもらいたいなと思っています。
 13 (1.6)
- 14 A1:→ お疲れさまでした::
 15 複: [お疲れさまでした::
 16 複: [ありがとうございました::

ここには前終結相当の発話は観察されないものの、構造化の手がかりが複数用いられている。教員 A1 の発話には、5 行目の「はい」、 「以上です。」といった発話部分、また沈黙(4, 6, 13 行目)という、発話の区切れ目を明示する要素が観察される。また 7 から 12 行目の発話内容は「次回に向けての課題ということで(7 行目)」、「臨んでいってもらいたい(11, 12 行目)」といったような表現から、今回ではなく次回以降の教壇実習について扱われていることが分かる。また一コマ目から三コマ目という特定の授業、またそれを行った授業担当者へのコメントがこれまでなされていたのに対し、「各自(7 行目)」、「各教師(9 行目)」と、当日授業を行った三人をまとめて扱う表現がなされている¹⁷。ここでは 7 行目以降の発話が実習反省会のまとめの部分を担当していることが示されている。

三コマ目の授業に対する教員のコメントから最終交換の第一成分までという長い時間、A1 は発話順番を取得し続けている。しかしこの一続きの発話は、その中で異なる局面を担当していることが、A1 の発話中に置かれた構造化の手がかりによって示されているといえる。

以上の考察をまとめて、終結との関係から一度整理したい。ここまで言い忘れの導入機会を明示する抜粋 4-4 および抜粋 4-5 との対比で、抜粋 4-6 の終結の際には、前終結相当の発話が用いられていない、つまり終結を行うことへの同意や非同意を交渉することが行われていないという特徴があることを取り上げてきた。抜粋 4-6 の終結は、終結の直前に発話機会を要する参加者がいることを想定しない形で組み立てられている。

そこで、この時点では終結が行われることが適当であることが、既に何らかの形で保証されている状況が成立していると想定し、この要因を実習反省会の制度に求め、以下二つの特徴を指摘した。一つは反省会がこの中で行われることについて構造を持っていることである(4.3.1.1 節)。ここには、何がどのような順序で行われるのかの情報があり、その順序の最後に何が位置付けられているかの情報も当然含まれている。そしてもう一つは反省会でなされた発話中や発話間に、現在の発話の局面を示すことを行う、構造化の手がかりが埋め込まれていることである(4.3.1.2 節)。そして後者から得た現在の発話の位置付けを、前者の構造に照らし合わせこの中に位置付けることによって、実習反省会が現在進行して

¹⁷ 抜粋 4-6 における 1 から 3 行目の発話は、3 コマ目の授業で行われた具体的なタスクに対するコメントに関連してなされたものである。この部分のように、特定の授業およびその担当者に向けたコメントを行う発話順番内で、実習生全員に向けたコメントが挟まれることもしばしば観察される。この内容に着目すると 7 行目以降でなされている全体に向けたまとめコメントに類似しているが、挟まれた沈黙や「はい、以上です(5 行目)」という発話からは、A1 が 1-3 行目を 3 コマ目のコメントとして行っていることが伺える。

いる、あるいは停滞や逆行していることがリアルタイムに参加者に分かるようになっていると考えられる。

会の進行に反した発話がなされる抜粋 4-7 から示したように、参加者は基本的に会を前へ前へと進めることに志向している。つまり参加者は、反省会が着々と終結に向かっていることを、構造化の手がかりの示される要所で確認することができる。抜粋 4-6 では、教員であり会の進行を取り仕切る A1 が、終結に至るまで長く順番を取得しているが、この中でも構造化の手がかりによって局面の変化が示されており、単独の話者の発話内でも反省会が進行していること、終結に向かっていることが分かるように組み立てられているといえる。つまり反省会終結の直前においては、既にどこで終結がなされるかを強く予想できるように反省会自体が組み立てられていると考えられる。

電話会話の終結がいつなされるかは、それが唐突なものとならないよう参加者間の調整を経て決定されるものであった。一方本章で見た実習反省会は、会のごく最後で参加者全員の了解を得るような方法をとる必要はない会話であると考えられる。これは反省会の制度の存在によって、会を進めることが適切であるという情報が随時やり取りされており、その進行に沿って終結の同意が積み重なるようになってきているためであると説明できる。「何か言い忘れた人はいませんか」という、日常会話で見られるいわゆる前終結に相当する手続きは、反省会を終結する際の手続きとしては必須のものではないことが示唆される。

4.4. 終結の手続きへの志向

しかし会が進行していること、またその結果終結が適切な局面に至っていることが理解できるだけでは、会の終結としては不安定な状態であると考えられる。なぜなら終結の際の相互行為には終結の手続きの一つ、最終交換を交わすことへの志向が観察されるためである。本節ではこのことを見てみたい。

終結の手続きとして先行研究で指摘されてきた二つの手続きのうち、前終結相当の発話については、非常に明示的に行われる場合と、そのような手続きとしては現れない場面をここまで見てきた。これに対しもう一つの手続き、最終交換について見てみると、4.2.1 節で触れたとおり全ての回に最終交換が観察されることに加えて、終結に際しこの手続きが参加者に強く必要とされていると考えられる振る舞いが見られる。以下ではその事例を挙げる。

【抜粋 4-8_反省会(X2)】

ゴールデンウィークが何日から何日を指すかとゴールデンウィークの正式な名称について話されている(抜粋 4-5 で提示された話題から続くやり取り)。

01 E: 私はもうてっきりその3日間だとや-その後のみ(h)っか(h)か(h)んだと.[どうなの?]

02 D: [あ…….]

03 A2: う::[ん]

04 E: [>とと思いました.<

05 A2: まあちょっと調べてみないと分かんないで[すね hhh]

06 D: [確かに¥微妙なライン¥に(° なります°)]

07 ?: あ:ありがと ((評価シートの受け渡しをしていると考えられる))

08 ?: すいま[せん.ありがと:: ((評価シートの受け渡しをしていると考えられる))]

09 A2:→ [はい(.)じゃあお疲れさまでした.]

10 複:→ ありがとうございます::

11 複:→ ありがとうございます::

ここで話されているのは、A2によって示された言い残したことを導入する機会(抜粋 4-5, 7行目「他に(.)何かありますかね:」)を利用し提示された話題である。抜粋 4-5 からこの抜粋 4-8 までの間では、話題を導入した参加者や、教員以外の参加者も盛んに順番を取得している。これは実習反省会の大部分で見られる、制約の加えられた順番交替システムの働き方ではなく、少なくとも順番交替の組織において参加者は反省会という制度への志向を示していない。また発話でのやり取りに並行して、実習授業を評価するシートの受け渡しという本来ならば反省会の終了後に行われことがなされている。抜粋 4-8 のやり取りは、一見すると反省会後の雑談として観察されるような特徴を示しているといえる。

このような中で、9行目の挨拶として聞かれる発話がなされ、実習生たちはこれに声を揃えて挨拶を返している。これは他の回に観察されるものと同じく、最終交換として聞かれるやり取りである。反省会の終結が明示されずに、反省会後のようなやり取りに移行していた9行目以前の状況の中で、そのまま反省会の枠組みを退化させることが可能であったにもかかわらず、A2は最終交換を切り出し、また他の参加者もそれに一斉に反応を示している。ここでは参加者が最終交換という手続きに志向していることが伺える。この手続きによって、反省会の終結はいつの間にか生じたものとしてではなく、一点で明確に生じるものとして達成されているといえる。

最終交換への志向が伺える類似の事例を、もう一つ挙げておきたい。

【抜粋 4-9_反省会(X4)】

- 01 A4: まあ(.)どういうときにこっちをつかうほうがいいのかとか.そういったぼ-差が
 02 ポライトネス ポライトっていうのを(0.6)まあ s::分かってもらう?う::ん.ってこ
 03 と:だと思うんで:,は:い.まあともう一回あるわけですね::まあちょっと:(.).hh
 04 え::教案がんば(h)って::hhh .hh
 05 B: がんばります.[は:い.
 06 A4: [いや::いやでもほんと落ち込まないでね hhh
 07 B: は:い.
 08 A4: うん.
 09 B: 大丈夫で s:.
 10 A4: ♪は::い.♪
 11 (3.0)
 12 A4: まどういうことも(.)慣れですから.
 13 (4.0)
 14 A4: ま(.)う::ん.(1.0)[みんなで[教案()を研究し合う時間ももうないと=
 15 C: [すいませ::ん. ((評価シート受け渡し))
 16 D: [ありがとうございます::す. ((評価シート受け渡し))
 17 A4: =思うんですね::
 18 (0.8)
 19 A4: ですがど:
 20 (16.0) ((椅子を引く音、紙を触る音、足音など雑音))
 21 E:→ お疲れさまで::す.
 22 A4:→ ° お疲れさまでした.°
 23 複:→ [ありがとうございました:.
 24 複:→ [ありがとうございます::す.

1 行目からの部分は、三コマ目の授業に対する教員のコメントの終盤である。3 行目「思うんで:,は:い。」までなされている具体的なコメントと比較すると、これ以降では抽象的なコメントがなされているということができ、三コマ目の授業担当者 B への励ましや気遣い

の連鎖が生じている(3-10行目)。この連鎖は反省会の参加者間で意見を共有し合うというよりも、A4からB個人に向けたものとなっているといえる。

間合いが置かれ(11行目)、その後もA4は発話を行っているが(12, 14, 17, 19行目)、これは他の参加者に、反省会の進行を担当する教員の発話としては扱われていない。発話の途中では、別の参加者が声を潜めることなく発話を行っているためである(15, 16行目)。A4が進行を担当する教員として発話を行っていると捉えているならば、他の参加者はこれを聞くことが求められる。しかしそのような志向は見出されず、評価シートの受け渡しや席の移動(20行目)という、本来反省会の後に行われる行為がなされている。そのため参加者全員が発話を聞き、発話が聞かれることに志向して行われる反省会は、この時点において対個人の指導や雑談のような、反省会後の性質を示している。つまり反省会がその性質を失いつつある状態が観察される。この点において、抜粋4-9は抜粋4-8と類似の特徴が指摘できる。

その中で、21行目では最終交換のきっかけとなる発話が学生Eから起こっている。これに応答したA4の発話「°お疲れさまでした。°」に対して、それまで各々で発話やその他の行為を行っていた実習生は声を揃えて答えている。

4.3節で述べたように、反省会が終結の局面に達していることは、構造を参照する中で理解可能になっていると考えられる。しかしこのことは終結の手続きが、終結の達成に対し何の働きも果たさないということの意味するのではない。本節で見た参加者の振る舞いからは、終局に至った反省会をいつの間にか退化させるという方法ではなく、何らかの形で明示的に区切りをつけることへの志向が伺える。その手段として最終交換が用いられていることを指摘した。

4.5. おわりに

本章では、制度的場面の一つに位置付けられる実習反省会において、終結がどのように達成されているのかを記述してきた。終結における言語的やり取りには以下のことが観察された。反省会を終結させるか否かの交渉に相当する部分には、話すことがまだ残されているのか否かを明確な言語表現を用いて確認するものと、反対にこの交渉の機会が明示されないものの二つのやり方が観察された。後者のような終結の組み立てであっても、反省会は適切に終結に至っていることから、終結の直前における参加者間の細かな交渉は必要とされないことが示唆される。これは反省会全体の構造と、現在の発話の中にある構造化の手がかりとを対応付けることで、会が進行していること、またその結果会が終結に向か

っていることを参加者が常に確認することができることによると考えられる。会が進行していくことに対する同意を、随時積み重ねていった結果として終結に至る、というこの状況において、終結直前の段階では既に終結が参加者に了解されている状況が生じている。日常会話のような、終結を行うことが適切かどうかを交渉するやり方を使用することはできるが、それがなければ終結が適切に達成できないというような、必須の手続きではないことが示唆される。

3章で見た日常会話、立ち話における終結の組み立て、および本章で見た制度的場面における会話、実習反省会における終結の組み立ては、会話全体の組織を参照しながら、終結が適切であることを終結の直前よりも前に把握できるようになされているという点において共通している。一方で、参照しているものとその方法には異なる点がある。まず立ち話では、どのような話題がどのような順序で取り上げられるのかについて明確なリストがあるわけではなく、立ち話という場面にある緩やかな期待を参照しながら、今生じている話題やこれまでの話題の間の位置付けがどのようなものなのかが会話が進行していく中で理解され、終結に近づいていく。必ず話されなくてはいけないこと、例えば会う名目に相当するようなもの以外のことは、この会話場面の成立を左右するようなことはない。

一方の反省会の場合、何がどのような順序で行われるのかについて参照されるリストがあり、ここに含まれる全てが会話の成立に必要とされるものである。現在どの程度終結に近づいているのかは、極端に言えばそこまでのやり取りの流れがどのように展開してきたかが分からずとも、現在の発話がリストのどれに相当するものなのかが指示できるならば、ある程度理解することが可能である。

反省会に限らず、何らかの会合で、この後何が行われるのかが分からなかったり、今何をやっているのかが分からない時がある。これは本章の考察でいうと、当該の会合が持つ全体構造や、現在の局面が分からず、会合が進んでいることが確認できない状況である。この時私たちは、この会合が一体いつ終わるのかと不安になる。つまり私たちは会が終結に向かって進むことに常に志向しており、これが保証されない時、有標な事態として終結を強く意識することになるのではないだろうか。

終結を行うタイミングの交渉は、手続きとして任意のものと考えられる一方で、反省会の終わりを明示的に区切るということに対しては一貫した志向が伺える。これは反省会においては挨拶・挨拶という最終交換相当の手続きとして現れている。反省会が徐々に終わってしまいそうな状況であっても、誰かが最終交換を切り出し、またそれにその他の全員が応じるという、明確な一点での終結を達成しようとする振る舞いが観察される(抜粋 4-8,

4-9)。反省会後も発話は継続して生じているが、これらは反省会とは異なる雑談として聞かれるものである。参加者はこの二つを区別して捉えようとしており、その手段として最終交換が用いられているといえる。

なお本章で扱った反省会では観察されなかったものであるが、制度的場面の終結全体に視野を広げ考えてみると、当該場面で行われている相互行為に区切りをつける方法は、最終交換に限らないと考えられる。式典などのような場面においては、終結が一人の宣言によって達成されることも一般的である。宣言を用いるのか、挨拶を用いるのかは、参加者の人数や関係性をはじめ、様々な要因が関係していると考えられる。このことについては本章の扱う会話資料のみでは議論することができない。ただ少なくとも宣言よりも挨拶の方が、参加者たちが相互行為を行っていることが見えやすく、また「相手の顔が見えている」必要のある行為であるといえる。実習期間中関係を持ち続ける、固定されたメンバーの中で行われる反省会の終結に、挨拶が用いられるのは自然な選択であるように思われる。

最後に、本章で扱うことができなかった視覚的やり取りの可能性について述べておきたい。このような多人数でのやり取りを記述するに際し、視覚的情報を扱うことができているのは本研究の大きな問題であり、今後の課題となる部分である。先行研究では、例えば座る姿勢の変化や、時計に視線をやるなど、身体動作によって示される前終結について指摘がある(Linde1991)。本章では音声的情報から拾うことのできる明らかな行為、例えば評価シートの受け渡しや席の移動などのみを扱ったが、その他にも視覚的資料にのみ現れる情報が、多くやり取りされていることは間違いない。この点については、6章の映像資料を用いた事例研究の中で再び触れる。

5章 日常生活に生じる「活動」の一つとしての会話

5.1. はじめに

ここまで3章および4章の二つの章にわたって、日常会話および制度的場面における会話の終結がどのように組織されているのか観察を行ってきたが、本章では日常会話・制度的場面における会話という区分を取り外し、会話の活動としての性質を軸に捉え直すことを試みる。以下では会話終結の特徴を(1)当該場面が何を行う機会として生じているのかという「目的」、および(2)その目的に対し「会話がどのような位置付けを担うものであるのか」という二点との関係をもとに整理し直す。ここから会話終結の組織がいつどのようになされるかが、当該場面の目的に特徴付けられていることを見る。また会話終結について議論するに際し、複数の活動が一つの時間軸に連なり生じる中に、当該会話が生じているという視点が必要となる場面があることを指摘する。

5.2. 分析の準備

記述の整理に入る前に、本章の目的と扱う場面の概要について簡単に触れ、本章の流れについて説明する。

5.2.1. 分析対象の概要

本章では、3章および4章で観察した三場面に、新たに三場面を加えた計6場面を取り扱う。概要は以下のとおりである。

事例1) 実習反省会(抜粋 5-1(A), 5-1(B))…4章

直前に行われた教壇実習について意見共有をする場面。

事例2) シューズ(抜粋 5-2)…本章で新たに扱う

スポーツ用品店で、商品の売り場を店員に尋ねる場面。

事例3) ハナメシ(抜粋 5-3)…3章

元勤務先の同僚と偶然出くわし立ち話する場面。

事例 4) 楽譜(抜粋 5-4)…3章

サークルの後輩が先輩に楽譜を渡しに訪れる場面。

事例 5) 廊下(抜粋 5-5)…本章で新たに扱う

歩いて講義室まで移動する場面。

事例 6) メール(抜粋 5-6)…本章で新たに扱う

サークルの先輩と後輩が偶然出くわし立ち話する場面。

新たに扱う場面の詳しい情報については、資料を取り上げる際に示す。

5.2.2. 本章の流れと主な主張

5.3 節以降では 5.2.1 節で挙げた場面において会話終結がいつどのようになされているのか、当該会話場面の特徴をもとに三つの組に分け、順に観察の要点を述べる。ここから会話終結が当該場面で志向されている目的の達成を参照し組織されていることを見ていく。

会話場面の分類は、まず当該場面において「主要な活動」が会話か会話以外の活動であるのかによって二分する。さらに当該場面において会話が何を担うものとして生じているのかという「当該場面における会話の位置付け」によって二分する(表 5-1)。

表 5-1 会話場面の分類

		主要な活動	
		会話	会話以外の活動
当該場面における 会話の位置付け	具体的目的達成 の手段	①	—
	交感	②	③

このようにして取り出した三つの分類とそれに該当する場面は以下のとおりである。また観察の結果を先取りし示す。

①会話が主要な活動であり、具体的目的を達成するための手段としてなされている場面

5.3節で事例1「実習反省会」および事例2「シューズ」の二場面を見る。事例1は教壇実習について意見を交換し合うという具体的な目的のために、事例2も同様にランニングシューズに関する情報を得るといった具体的な目的のために、参加者たちが言語活動を行う場面である。いずれも会話は具体的目的達成の手段としての役割を担っている。

ここでの会話終結では、当該会話が生じるきっかけとなった具体的な目的が参照されており、この達成と同時に終結が生じている。

②会話が主要な活動であり、交感を行うものとしてなされている場面

5.4節で事例3「ハナメシ」および事例4「楽譜」の二場面を見る。事例3は具体的な目的のために用意されたのではなく、偶然の出会いによって生じた場面である。事例4は楽譜の受け渡しという具体的な目的のために用意された場面ではあるが、3章で見たように交感としての会話が行われている。いずれも会話以外に主だった活動が行われているわけではないため、これを主要な活動として位置付ける。

ここでの会話終結では、具体的目的の達成時には終結が生じないという特徴が観察され、終結がなされる以前には十分にコミュニケーションを交わし合ったことを示すような会話全体の組み立てが観察されることから、コミュニケーションを行うという相互行為それ自体の達成が会話終結に際し参照されている場面であるといえる。

①に位置付けられる事例1および事例2、②に位置付けられる事例3および事例4を見ると、終結がいつ達成されるのかは当該場面が制度のもとにあるか否かに依存してまとめることができるかのように思われる。しかし友人同士のおしゃべりがなされている日常会話に相当する場面であっても、②の二場面とは異なる振る舞いを見せるものがあることから、主要な活動が「会話」であるのか「会話以外の活動」であるのかの軸を新たに設ける。

③会話以外が主要な活動であり、かつ会話は交感を行うものとしてなされている場面

5.5節では事例5「廊下」を扱う。移動という活動が会話と同時に行われており、会話は交感を行うものとして位置付けられる場面である。

会話終結は繰り返し生じている話題の切れ目のうちの一つで、最終交換が切り出されることにより達成されている。当該場面の会話のやり取り自体を参照することでは終結を切り出すきっかけは見出せず、会話以外の活動、ここでは同時に生じている移動という活動

の達成が参照されているといえる場面である。

5.6節では、これら5つの場面の会話終結の特徴をもとに、終結の組織、当該場面の目的、そしてその目的と会話との関係という要素について整理しまとめる。

最後に5.7節ではこの①から③の区分の中では捉えることの難しい事例として事例6「メール」の終結について観察する。ここから、会話終結の際に参照されるものとして、会話の内部(①および②)や会話と同時に生じている活動(③)に加え、会話の前後に生じる活動があることを示す。そして会話終結について議論するに際し、複数の活動が時間的に隣接し連なる中に、当該会話が生じているという視点が必要であることを指摘する。

5.3. 具体的目的の達成を参照した終結の組み立て

表5-1の①に位置付けられる二場面における終結の組み立てについてまとめる。ここでは具体的目的の達成に志向した終結の組み立てが観察される。扱うのは事例1「実習反省会」と、新たに取り上げる事例2「シューズ」の二つである。いずれも制度的場面の特徴を持つ。両場面における会話は、特定の目的のために用意された相互行為の場に生じたものであり、この場面の主要な活動として行われている。

5.3.1. 事例1「実習反省会」

はじめに取り上げるのは、4章で制度的場面として取り上げた実習反省会の終結である。同じ日に行われた教壇実習について意見を交わし合うこの会には、授業を担当した実習生と、それを観察した実習生、そして教員が参与している。当日は三コマの授業が行われ、各授業に対し基本的に全ての参加者が反省・コメントを述べることを三度繰り返す形式が取られる。この進行は授業の観察者である教員が取り仕切る。

終結がどのように達成されているかについて、二つの型を4章で指摘した。一つは最終交換と聞かれる「お疲れさまでした」や「ありがとうございました」といった挨拶の発話の前に、「何か言い忘れた人はいませんか」といったような、明確な前終結相当の発話が挟まれるものであり(抜粋5-1(A))、もう一つはこのような発話が挟まれないものである(抜粋5-1(B))。

【抜粋5-1(A)_反省会(X5)】

01 A3: うん.>もうちょっと<.hh もっとこう:.hh うん.詳しく書いて(0.6)あ:(.)練習

- 02 できるようなキューのね?シートなんかも分かりやすいの作っ↑て(.)こうやら
 03 せたら(.)よかったんじゃないかな° と思います° .sh はいっじゃあ>すいません
 04 長くなって以上です.<
 05 (0.6)
 06 A3:→ あと(.)なんか(.)言い忘れた:人とかいませんか?大丈夫ですか?
 07 (0.4)
 08 A3: じゃまあ書いておわ-お渡ししてください.じゃあ終わります.
 09 A3: お疲れさまでした::
 10 複: ありがとうございます::

【抜粋 5-1(B)_反省会(X1)】

- 01 A1: ということでえ::ねっ(.)次回に向けての課題ということで(.)ねっ各自ね(.)あ
 02 の::>今日みたいな<ティーチャートークに気をつけようと思った.とかねこれを
 03 こうやろうと思ったというこう明確なね(.)目標みたいなのは各教師あったと思
 04 うんですけれども,今回に出た(.)え:反省というのを生かしつつ(.)次回はあれ
 05 がんばるとか(0.4)そういう気持ちで.え::アクションリサーチ的に臨んでいっ
 06 てもらいたいなと思っています.
 07 (1.6)
 08 A1:→ お疲れさまでした::
 09 複: [お疲れさまでした::
 10 複: [ありがとうございます::

この手続きの有無は、会話終結のタイミングの操作を行うことができるのが誰なのかに関わる特徴である。抜粋 5-1(A)の明確な前終結相当の発話は、「何か言い忘れた人はいませんか」、「他に何かありませんか」などの発話が、この会が終結をこの後に迎えていいのか、あるいは言い忘れなどについての発話の機会を設け、今しばらく終結を遅らせるのかについての交渉を可能にしていた。この明確な前終結相当の発話は、参与者全員が終結のタイミングの操作に関与できることを示している。反省会では参与者の全員にコメントの機会が割り振られているため、その全員が「言い忘れた人」になり得る性質を有しており、また「他に何か(言いたいこと、扱うべきこと)がある」可能性を有している。対する抜粋 5-1(B)は、教員の発話権が継続し、それを譲る機会を生じさせないままに最終交換の第一成分が

なされるものである。この場合、この段階で終結のタイミングを決めることができるのは教員のみである。

最後に話題を導入できる機会を設けない、抜粋 5-1(B)のようなやり方が利用可能であることは、反省会の終結のタイミングは参与者全員の交渉を経ずとも決定され得ることを示している。4章(4.3.1.1節)で見たように、現在扱われているコマ以前の授業に対してコメントを行う際には、「ちよつとごめん」、「戻っていい?」のように、それが「言い忘れ」であり、「戻る」ものであるとして断りや謝罪が行われている。つまりここでは、反省会の有する構造に沿って会が進行し着々と終結に向かっていくことが無標な状態として志向されており、構造の最後の部分(当日最後の授業について教員がコメントを述べ終わる部分)に達した時が終結のタイミングとして参与者に扱われている。最後に言い残しの確認がなくとも反省会を終えることができるのは、この時点が終結の適切となる時点として志向されているためである。

この実習反省会は、参与者全員に発話機会を割り振る形式で組み立てられており、そして全員の発話機会が終えられた時が反省会で行われるべきことが全て終えられた時として扱われている。これは反省会で目的とされている「教壇実習について意見を交換し合う」ということの達成の指標として、全員が意見を言い終えることが利用されているためであると考えられる。

5.3.2. 事例2「シューズ」

スポーツ用品店で、客が店員に品物の場所を尋ねる場面である。5.3.1節の反省会のように、何をどのような順序で話すかについて明確な計画が事前に存在するわけではないが、何がやり取りされるために生じた相互行為であるかについて、事前に強力な期待が存在する場面である。順番交替システムに制約が加えられるのではない形で行われるが、制度的な場面としての特徴を有する場面である。詳しくは後述するがここでの相互行為で参与者たちは互いに「店員」、「客」という役割に基づいて振る舞っている。観察の結果を先取りすると、会話はこの役割に期待される情報の授受を前提として開始され、その役割が果たされた時即座に終結するという特徴がある。

以下に挙げる抜粋 5-2 は、親しい友人である H と K(ともに男性)がスポーツ用品店を訪れ、店員と短く会話を交わす場面である。本節ではじめて扱うため、会話資料をやや丁寧に見て行きたい。二人は店に入ってしばらくの間、冗談のコメントをしつつ近くの商品を適当に眺めながら、ランニングシューズ売り場を探している。その後店員(S, 女性)に声を

掛けるところから抜粋 5-2 は始まる。S は直前に別の客の対応をしており、二人はそれが終わるのを側で待っていた。

【抜粋 5-2_シューズ】

- 01 S: ([)
- 02 H: [ランニングシューズって、
- 03 (0.2)
- 04 S: ランニングシューズ.えっと<シューズコーナー>の方がですね;
- 05 H: はい.
- 06 (0.4)
- 07 S: <今この:>(0.4)>こっ[ち<アウトレットにいるんですけども(.)いちばん左の奥が=
- 08 H: [ああすげ.
- 09 S: =シューズコーナー↑そちらのほうに:(0.4)° ありますね.°
- 10 K: あ:ア[ウトレットかここ.
- 11 H: [アウトレットって::,要は安い_
- 12 (0.2)
- 13 S: そうですね[ええと::
- 14 K: [ここにも(.)あるんです[か?ランニング° シューズ°
- 15 S: [ナイキとアディダスの:(.)モデルが古くな=
- 16 S: =ったものが:アウトレット::
- 17 (0.4)
- 18 S: [>ナイキアディダスの<(.)のみなんですけども[この(.)なかです]ね.
- 19 H: [こ- [こっち(.)に(.)]
- 20 H: 中にもランニングシューズはまあある-(0.2)探せ[ばある-
- 21 S: [あるかもしれ=
- 22 S: =ないですけども:[まあシューズコーナーの方が:
- 23 H: [ないかもしれ(° ない°)
- 24 S: [>そうですね.<[↑は::い.
- 25 H [はい. [° わかりました.°
- 26 (0.8)
- 27 K: シューズ安いほうがいいなあ.

28 H: シューズコーナーとりあえず行ってみようよ.

29 K: うん.

簡単にここでのやり取りの流れを追ってみる。S と H、K の相互行為は、1 行目の S の発話の途中で H がランニングシューズについて尋ねることによって開始される¹⁸。全くの初対面である参加者同士が挨拶などの先行連鎖を経ずに、会話そして情報要求という行為を開始していることには、情報要求が何ら特別の要求ではないこと、また互いがそのような会話を交わすことが説明を要さないものであるという理解が示されている。そしてこのランニングシューズについて情報を得ることが、全くの他人である S と二人が会話を行う理由として理解することができる。

S はシューズコーナーがどの位置にあるか、何らかの地図に相当するものを用いて説明を行うが(4-9 行目)、H は説明の際に用いられた「アウトレット」という言葉に反応し、それが示す対象について確認の質問を行っている(11 行目)。14 行目および 19、20 行目の発話から、二人はアウトレットという言葉がランニングシューズの売り場である可能性と結びつけて聞いたことが主張されている。これに対し S はアウトレットにランニングシューズが置いてある可能性について情報を提示し(21, 22 行目)、H が「° わかりました。」と理解を明示的に示すことで(25 行目)、S と二人のやり取りは終結する。H、K と S、三人によるやり取りは 25 行目が最後となっており、続いて生じているのは H と K の二人によるやり取りであるため、ここでは 25 行目の発話を三人による会話の終結として扱うことができるだろう。

ここで S と H、K の間に別れが生じているが、これまで見てきた別れの場面とは様相が異なっている。まず特徴的な点として、これまでの場面では最終交換として観察された挨拶の発話がないことが挙げられる。非常に早いテンポでのやり取りが行われ、最後の発話も同時発話によってなされているため、最終的な発話がどれであるか特定することは現実的ではないが、理解の表示(23 行目「ないかもしれない」)に対する承認「>そうですね.<(24 行目)」と受け入れ「° わかりました。」(25 行目)、あるいは、情報提示(22 行目「シューズコーナーの方が:」)の受け入れの応答「はい.(25 行目)」とその受け入れ「↑は::い.(24 行目)」が、最終的な発話に相当し得るだろう。いずれであっても最後の発話になっているのは、

¹⁸ 聞き取りが困難なため、どのような行為を行っているのか特定することができないが、客に対する何らかの呼びかけのような音調で産出されている。4 行目からは明瞭に音声収録されていることから、この間に録音を行っている H が S に歩み寄ったと予想される。

直前の相手の発話を受け入れる性質のものであり、やり取りの連鎖が終了し得る時点に至っていることが分かる。

ここでの終結を、ここまで記述の手がかりとしてきた終結部(Schegloff & Sacks1973)の二つの手続きで捉えるのは困難である。話題の終局に置かれ、会話の終結を交渉する類の前終結は観察されず、情報の要求によって開始された連鎖の終結がすなわち会話の終結として扱われているといえる¹⁹。

終結がいつ達成されるのかという視点から捉え直すと、以下のとおりである。先述のとおり会話の終結は、ランニングシューズ(がどこにあるのか)について情報を求めることから開始する連鎖の終結と一致している。この連鎖をランニングシューズに関する話題と言い換えるならば、この「シューズ」の場面は、話題の終了が、即会話終結として扱われていることになる。このことから、この会話が単一の話題からなる会話(monotopical conversation: Schegloff & Sacks1973)であることへの参加者の志向が観察される。単一の話題からなる会話とは、結果的にその会話が単一の話題によって構成されたというようなことではなく、一つの話題のみが予め期待され生じた会話のことを指す(ibid: 307)。一つの事件について話した時に電話を切ることが予め期待される警察への 110 番などが、この一つの例であると考えられる。

抜粋 5-2 に観察されるこのような志向は、この会話が自由なおしゃべりとして特徴付けられるようなものではなく、制度的な文脈に生じた会話であることの影響を受けていると考えられる。会話の開始の特徴にも示されているとおり、挨拶がなく本題に入り本題が終わると挨拶なしに終了となるという特徴は、この会話がその本題だけのためになされたものであることを、互いにまた事前に了承していることを示しているといえる。

客がランニングシューズに関する情報を得るために開始し、情報を与える者としての店員(S)・得る者としての客(H、K)という制度的な関係の下にあるこの会話が、H と K が十分に情報を得たことが確認される時点で終わられるのは、終結のタイミングとして最も自然である。その他の話題がないかについての確認がなされず一つの話題の終了が会話の終結として扱われているのは、抜粋 5-2 の会話が情報の授受という具体的な目的に特化し生じたものであることが了解されていることによると考えられる。

¹⁹ Clark & French(1981)は最終交換に相当する発話(「いとまごい」に分類される)が関係性の維持が不要な際には行われないと指摘しており、この場面の終結の組織もその指摘と一致した形でなされている。

5.3.3. まとめ—具体的目的の達成と結びついた会話終結—

5.3節で取り上げた事例1「実習反省会」およびスポーツ用品店における客と店員の会話である事例2「シューズ」の終結に見られる特徴について、当該場面が何を行う機会として生じているのかという「目的」と、その目的に対し「会話がどのような位置付けを担っているのか」という観点からもう一度まとめると、以下のとおりである。

事例1「実習反省会」の場合、終結させるか否かの交渉に相当する部分には、言い残しの有無について尋ねる発話によって明示的に終結が可能であるか確認するものと、このような交渉の機会を全く示さないものの二つのやり方が観察される。交渉の機会を示さない組み立てが利用できるのは、反省会全体の構造が参与者には利用可能な資源として与えられていることによる。ここでは会が内部に何をどのような順で行うのかについての情報、反省会が持つ構造に対して、現在の発話がどの部分に相当するものかを対応付けることが可能になっており、会が進行していること、同時に会が終結に向かっていることが要所で確認できるように組み立てられているためであると考えられる。そのため反省会がその構造の中に含むものが全てこなされた時が会を終結する時であるとして、終結の直前よりも以前に了解されている状況が生じているといえる。

そして反省会の構造は、各コマの授業に対し意見を述べる機会を、参与者全員に十分行き渡らせるような組み立てになっている。これは「教壇実習について意見を交換し合う」という反省会の目的が十分に達成されたことを可視化するものとしても働いていると考えられる。つまり反省会を構造に沿って終える時は、反省会の目的が達成された時となっている。

もう一つの事例2「シューズ」の場合は、一つの話題「情報の授受」が扱われ、それが達成された時が即座に終結として了解され合っていることが特徴といえる。実習反省会と同様に事前の期待があり、この場合は情報の授受の終了が会話の終結であることが共有されているといえる。

両場面に共通するのは、具体的目的のために当該相互行為が生じていることである。反省会がその構造の内部に含むやり取りが一通りこなされた時、あるいは店員と客が必要な情報を授受し終えたことが了解された時、つまりいずれも会話の生じる理由となった具体的目的がやり遂げられた時を参照し、会話終結が達成されている様子が観察される。具体的な目的の達成に志向し組み立てられたこれらの場面において、会話はその具体的目的を達成するための手段として現れている。

5.4. コミュニケーションの達成を参照した終結の組み立て

では事前に具体的な目的が共有されていない場合、会話終結はどのような組み立てになっているのだろうか。本節では表 5-1 の②に位置付けられる、事例 3「ハナメシ」と事例 4「楽譜」の二つの場面をもう一度振り返りまとめたい。いずれも日常会話場面の特徴を持つものである。この会話は 5.3 節で見た制度的文脈に生じた二場面とは対照的に、事前に用意された当該場面の目的が存在しない、あるいは存在してもその目的に対応する形での終結の組織が観察されない。だからといって終結は無秩序なタイミングで達成されているのではなく、コミュニケーションの達成に志向した終結の組織が観察される。5.4.1 節、5.4.2 節で観察の要点を述べる。

5.4.1. 事例 3「ハナメシ」

日常会話の終結場面として 3 章で扱ったものである。以前同じ職場で働いていた同僚の二人が偶然出くわし生じた会話であり、互いの近況や共通の知人の近況について話し、抜粋 5-3(1)のように別れている。

【抜粋 5-3(1)_ハナメシ】

- 01 S: =>あ:でも<A 大生が入ったっていう:(.)話はよ-たまに(.)聞きます.[()]
 02 I: [あそうなんだ.
 03 S: まあ(.)一回(.)今度食べに行きましょう.
 04 I: h:[hhh
 05 S: [(食べ)に行きましょう.(.)Hhhh
 06 I: じゃあまたね.がんばってね.
 07 S: はい.[(.)じゃあ.
 08 I: [まあ.

終結が切り出されるきっかけは、一方が行った冗談と聞かれる「誘い」であることを 3 章で既に述べた(3.3.1 節)。「誘い」をはじめとした、参与者同士が将来接触する取り決めは、会話の終結において多く観察されることが指摘されている(岡本 1990 ほか)。このような取り決めは具体的なものであるか抽象的なものであるかにかかわらず、参与者同士の関係性が会話後も続くことを示し合うものであり(Clark & French1981; 岡本 1991)、Button(1991)や Levinson(1983)をはじめとした、今行われている会話と今後行われ得る会

話との関係の中で終結を捉えるという視点と通じるものである。またこのような取り決めは、別れの際に生じる人間関係へのマイナスの影響を修正するものであるとされる(田中1982)。

その一方で誘いは、会話のどの位置でなされても会話終結を導くものとして聞かれるといったような、終結に絶対的に働くキューのようなものではないと考えられる。そのため誘い以外の部分にも、終結に対する志向の提示を補うものが現れているかもしれない。

3章では「楽譜」の事例について、会話全体を通した終結に向けた組み立てを見てきた。同様に本節で振り返っている「ハナメシ」の事例にも、終結に利用可能な組織が会話全体を通して示されているのではないだろうか。そこで本節では、終結が切り出されるきっかけとなったこの誘い自体が会話に持ち出されるタイミングについて指摘する。

偶然の出会いによって生じたこの事例では、終結に至るまでに以下のような話題が取り扱われている(表5-2)。

表5-2 事例3「ハナメシ」で扱われた話題

話題	開始時間	抜粋番号
《開始》((出会い))今何をやっているところなのか	0:00	-
Iの近況(仕事について)	0:35	-
Sの近況(進路、新しい仕事について)	3:30	-
元勤務先の同僚の近況	5:10	-
元勤務先の同僚の所属学部についてとIの驚いた出来事	5:45	抜粋5-3(2)
元勤務先で現在働くスタッフ	6:25	抜粋5-3(1), (2)
《終結》((別れ))元勤務先に食べに行く誘い	6:50	抜粋5-3(1)

立ち話はIによる、Sとの遭遇に驚く発話によって開始し、Iがどのような仕事をしているのかについての質問を発端にIの近況が報告される。一通り報告がなされた後、今度はIがSの学年を尋ねることを発端に就職活動や現在のアルバイトについてなど、Sの近況が話される。続いて二人の共通の知人である、元勤務先の同僚たちの近況についてがやり取りされる。さらに彼らの所属についてSが具体的な名前を挙げながら尋ね、Iが情報提供を行う。この立ち話にしては詳しい情報の確認は、その直後Iによって示された、以下のような語りの準備として聞かれる。

【抜粋 5-3(2)_ハナメシ】

- 01 I: ♪()>だって<入った時にさこれを名簿とかいろんなこういろいろやってた
 02 の.見て.すぎたの名前を見つけ:みぞぶち君の名前を[見つけ:♪
 03 S: [医学ですからね.
 04 I: そ::[hh
 05 S: [hhh
 06 I: たかなしみのりさん?
 07 S: あ:はいはい[はい.
 08 I: [うん. 知ってる子ばかりじゃ:ん.[hhhh
 09 S: [そうなんです.でも今もう花め
 10 し A 大生ほとんどいない.
 11 I: あそうなの?
 12 S: みぞぶちくんくらい.
 13 I: えなんで?
 14 S: もうほとんど:やめて=
 15 I: =やめちゃったんだ:.じゃあ優秀だった花めしも優秀じゃなくなったんだね?
 16 S: どうなんですかね::
 17 I: hhhh A 大生が=
 18 S: =>あ:でも<A 大生が入ったっていう:(.)話はよ-たまに聞きます.
 ((抜粋 5-3(1), 1 行目))

ここでは I が仕事の都合で学生の名簿を見る機会があり、その際に元勤務先の同僚の名前を複数見つけたというエピソードが、うれしい、おもしろい、あるいは奇妙なもの、興奮をもって体験されたものとして語られている(1-8 行目)。先に行われていた彼らの所属の確認は、このエピソードを語るきっかけとして組み立てられたものであったことがここで示され、また所属を S に確認していない「たかなしみのりさん(6 行目)」を挙げることによって、自身が S とは独立して情報を持つことを示し、エピソードが実際のものであることを主張していると考えられる。

またここでは、I 自身が名簿を開き次々にそれを見つけて行ったということが、具体的な名前を列挙するという粒度(*granularity*: Schegloff2000; 西阪 2008)の高い表現で描写され

ことで、エピソードのクライマックスが示されている。Sは「そうなんです」という承認の発話でこのエピソードに反応し²⁰、これに関連させながら元勤務先の現在のスタッフについての情報を提示する(9-18行目)。直前のエピソードとは相対する、元勤務先と参与者、また知人たちの繋がりが現在薄いものとなっていること、そして互いに元勤務先の現在の状況に詳しくないことが共有され、話題として収束を見せている。最後には、互いに元勤務先の現在に詳しくないことをきっかけに、Sは元勤務先に一緒に食べに行こうとIを勧誘し、直後Iによって別れが切り出され、ここでの立ち話は終結している(抜粋 5-3(1))。

ここで表 5-2 で示した会話全体の組み立てに立ち返り、この 7 分弱の立ち話で取り上げられた話題とその配列について見てみたい。会話は互いが今何をしているのか、そして互いの近況から始まり、二人が共通してもつ知識に関わる話題、元勤務先についておよびそこでの知人たちについてへと推移している。ここには今現在の参与者に関わることを中心とし、二人の共通点である以前の勤務先やそこでの知人といった周辺的な話題へとという序列が見出せる。

そしてこの周辺的な話題、共通の知人の所属を尋ねるやり取りを引き継ぎ、立ち話のごく後半でなされたのが抜粋 5-3(2)のやり取りである。Iの仕事中に思いがけず生じた元同僚(に関する情報)との接触という体験の語りになされ、しかし彼らは現在元勤務先にはおらず、また元勤務先の現状について不確かであることが示され、話題が収束していく。ここでは興奮をもって語られた過去の体験と、それとは対比的に彼らとの接点が薄れている現在に関する情報提示という、Iのエピソードを頂点に一つの山を描くような、話題が膨らみ萎むという軌道が観察される。

中心的話題から周辺的話題へとといった話題の配列、またその中に生じた盛り上がりと収束、さらにそれに引っ掛ける形での誘いを利用し終結を切り出すといった組み立てによって、最終交換までに一つの会話としてのまとまりが見出される。全ての会話にこのような話題の配列や会話としてのまとまりが見出せるとは限らないが、こういった組み立てが終結に利用されている可能性が指摘できる。

そしてこの組み立ては、偶然久々に出会った知人との立ち話に適切な内容、長さを参照しながらなされていると考えられる。移動の途中という、別の活動との間に予期せず生じた会話において、参与者たちが長々と話し続けることは当然期待されない。立ち話以外の

²⁰ この承認という反応は、面白い体験の語りの反応としては不適當であり、8行目まででなされていたIによる語りは、実際にはSによって面白い体験を語ったものとしては受け入れられなかったことが示されている。SはIの体験の面白さや奇妙さなどではなく、元同僚の名前が名簿にあるという事実の部分に反応し、元同僚たちについてより情報を持つものとして振舞っている。

活動が後に控えているという圧力が、会話の外部から加わっているだろう。一方で徐々に会った相手と会話を交わす機会が生じたからには、関係の良好さを表示し合い、それなりの満足を得られるものとしてこれを組み立てる必要がある。これは会話の内側において生じる要求ということができるだろう。特定の目的をきっかけに設けられた会話の機会とは対照的に、何を行えば会話が終えられるというようなことが偶然の立ち話には明示的に用意されているわけではない。しかし徐々に再会した参加者たちが互いに近況を報告し合い、共通の話題についてある程度話し尽くした時点というのが、立ち話を終結させるのに適切な時であることは私たちが日常から体験していることである。そのタイミングが参照されている可能性がこの会話資料からは示唆される。

以上のように、この場面は話をする事、換言するとコミュニケーションそのものの充足を参照した形で組み立てられていることが見出される。5.3節で扱った場面において会話が目的達成のための手段として位置付けられるのに対し、本節での会話はそれ自体が目的に相当する位置付けのものとして現れているといえる。

5.4.2. 事例4「楽譜」

日常会話の終結場面として3章で扱ったものである。サークルの先輩・後輩という二人の間で交わされたやり取りであり、サークルで今後扱う予定の楽譜を一方がもう一方の研究室のある建物まで持って来た際の会話である。この場面は抜粋5-4のように終結に至っている。

【抜粋 5-4_楽譜】

- 01 N: ああ:
- 02 D: け-でもめっちゃいいところですよここ.
- 03 N: ああ::(.)そうでもね:地震の時めっちゃ揺れる.
- 04 D: へ::
- 05 N: さっきもね:結構ギシギシ揺れてた.
- 06 D: 耐震構造いまいちなんですかね.
- 07 (0.4)
- 08 D: なんか_
- 09 (1.4) ((バイクの通る音))
- 10 D: 確かにさっきも音がした

- 11 N: ↓ねえ….
- 12 D: 文系研究室とかないんで.
- 13 N: あそっか?.
- 14 (2.6)
- 15 D: じゃ(.)またよろしくお願ひ[しま]す.
- 16 N: [あっ]
- 17 (0.2)
- 18 N: ありがと:う.
- 19 D: は::い.

終結の際の発話連鎖に特徴的なのは以下の点であった。話題の終局として位置付けられる位置、抜粋 5-4 における 14 行目では、会話を終結させるか否かを確認する手続きである前終結に相当するものがなされていない。次ぐ 15 行目は「じゃ(.)またよろしくお願ひします。」という挨拶と聞かれる発話が占めており、終結はこの時点で既に決定的なもののように示されている。

この時点で終結が適切なものとして示されている理由として、会話内でなされた話題同士の性質が参照されている可能性があることを 3 章で指摘した(3.4 節)。二人が会話の機会を設ける契機となった、楽譜の受け渡しという中心的な話題と対比すると、最後に取り上げられている二人が話している建物についての話題は、場当たりのであり周辺の話題に位置付けられる。この話題がさほどの展開を見せずに沈黙に至っている位置(14 行目)は、会話の終結を開始するのに適切な位置であるといえる。参加者が終結に際し参照できる情報の一つに、このような話題の性質に関する情報があると考えられる。

5.3 節で見た制度的場面と異なるのは、終結が切り出されるのが、二人が会うきっかけとなっている目的が達成された後に、いくらかやり取りを行った後であるという特徴である。会話終結は楽譜の受け渡しという現実的な目的に関するやり取りの達成後、いくらか冗談や世間話のような「あそび」を設けた後、話題が尽きた局面に達していることが確認され得る位置で生じている。つまり楽譜を受け渡すという具体的な目的がある会話場面ではあるが、この会話場面の組織はその具体的な目的の達成を参照するのではなく、冗談や世間話のようなやり取りを交わし合うことという、参加者相互の適度なコミュニケーションに志向した形でなされているといえる。

5.4.3. まとめ—コミュニケーションの達成と結びついた会話終結—

本節では、偶然の出会いから生じた立ち話(抜粋 5-3, 事例 3「ハナメシ」)と、特定の目的をもとに生じた立ち話(抜粋 5-4, 事例 4「楽譜」)の二場面の終結についてまとめを行った。事例 3 の場合はもともと当該会話が生じたのが偶然であるため、互いに明確な目的やその達成時点が共有されているわけではない。事例 4 では当該会話の生じたきっかけである楽譜の受け渡しが達成されても会話はしばらく継続した後に終結する。先ほど見た 5.3 節の二場面のように、明確な目的のある会話の機会であり、その目的の達成に合わせて終結が組織されているものと比較すると、本節で扱った二場面はそもそも特定の目的のもとに生じたのではない場面であったり、会話のきっかけとなった目的(事例 4, 楽譜の受け渡し)の達成に対応しない終結の組織となっている。しかし終結に至るまでの組織を参照すると、参加者がこの会話の機会を「立ち話」という適度な交感を目的として志向していたことが見出される。

参加者は気の向くままに会話を続け終結させているのではなく、中心的なものから周辺のものへとといった話題の配列、そしてその周辺的话题の尽きたことや、会話内の盛り上がりや収束といったことを経験した後に終結を切り出している。このことから、出会った二人が当たり障りなく別れるにあたり、参加者は適度なコミュニケーションの達成を参照しており、それに向けてこの相互行為の機会全体を組織していることが示唆される。これらの場面の目的は、交感、適度なコミュニケーションであるといえる。会話は 5.3 節で見た手段としてのものと対照的に、目的それ自体として位置付けられる。

5.5. 会話以外の活動の達成を参照した終結の組み立て

以上の事例 1「反省会」(5.3.1 節)、事例 2「シューズ」(5.3.2 節)、事例 3「ハナメシ」(5.4.1 節)、事例 4「楽譜」(5.4.2 節)の 4 場面を見ると、終結がいつ達成されるのかは当該場面が制度のもとにあるか否かという特徴からまとめることができるように思われる。しかし友人同士のおしゃべりがなされている日常会話に相当する場面であっても、コミュニケーションの達成を参照するのではないタイミングで終結が生じていることがある。

この例として表 5-1 の③に分類される事例である、歩きながらの会話を見てみたい。事例 5「廊下」では、会話の終結が同時に生じている別の活動の達成を参照し組み立てられている。

5.5.1. 事例5「廊下」

以下に示す抜粋 5-5 は、場所を移動しながら行っていた会話が終結する場面である。友人同士である J(男性)と N(女性)が大学近隣のレストランで一緒に昼食をとり、歩いて大学に戻り、N が講義を受ける部屋まで J が付き添っている。店を出てから別れの挨拶以降も継続して足音が聞かれることから、別れる時も含めほとんど立ち止まることなく移動を続けていると推察される。移動中、大学への移動手段についてや道端の花のようなその場で目にしたものについて、また次回食事をしてみたい場所についてなどが沈黙を挟みながら途切れ途切れ話題に上っている。

抜粋 5-5 は別れの前、既に大学に到着し講義室のある建物内を歩いている箇所で、1 分 20 秒程度のやり取りである。約 10 秒の沈黙の後、1 行目の発話がなされている。

【抜粋 5-5_廊下】

- 01 N: さむっ.
- 02 J: h 確か(h)に.(.)さっきまで暑かったのに:.
- 03 N: う:ん.
- 04 (5.0)
- 05 N: ほほほほほほほほほほほほほほっ(.).ほほほ ((何かの曲のリズムで))
- 06 (6.0)
- 07 J: 久しぶ[り:]
- 08 X: [あ::° こんにちは:]
- 09 (3.0)
- 10 N: ふふふふふ(.)んふふふふ::>ふふふ<ふ:>ふふふ<[ふ: ((何かの曲のリズムで))
- 11 J: [((鼻をすする音))]ちよと寒いな:h
- 12 N: 寒いね::
- 13 (15.0) ((大勢の談笑する声が小さく聞こえる))
- 14 N: この階段危ないんでしょ?
- 15 J: 何が:?
- 16 N: 地震で.
- 17 J: まじで:h[hh
- 18 N: [hhhh][hh
- 19 J: [もっと言った方がいいんじゃないのそういうのって.=

- 20 N: =え何か言ってたよ前.
 21 (0.4)
 22 N: 誰か.
 23 (1.0)
 24 N: 次地震来たら崩れるらしいよ.
 25 J: まじで?
 26 N: hhh
 27 (0.2)
 28 J: ((鼻をすする音))
 29 N: でも1か月以内にマグニチュード8来るんでしょ?
 30 (1.0)
 31 J: や:来てもおかしくない° よね°
 32 (0.4)
 33 N: こわ.
 34 J: やだね.
 35 N: ° うん°
 36 (1.2)
 37 N: じゃあ.
 38 J: じゃね[:.
 39 N: [う:ん.

抜粋 5-5 で観察されるのは、その場の気温に関する発話の短いやり取り(1, 2, 3, 11, 12 行目)や、出くわした知人(X)と交わされた挨拶(7, 8 行目)、また N が何らかの節を付けて小さくハミングする(5, 10 行目)といったような行為である。この間には長めの沈黙が複数挟まれており、J と N の二人の間で働いている順番交替システムへの志向は、非常に緩やかなものであることが伺える。14 行目から別れの直前までは、二人が今昇っている階段を取り上げ、その耐震性や地震が起こる可能性といった、地震に関する話題が生じている。直後 1 秒強の沈黙を挟み、別れの挨拶が交わされ(37-39 行目)、以降二人の間のやり取りは起こらなくなる。39 行目の前後の音声資料には J の足音が継続して収録されており、二人は別れる際にほとんど立ち止まっていない、つまり講義室に到着したとほぼ同じタイミングで別れの挨拶を交わしているといえる。

大雑把にこの場面のやり取りを捉えたところで、終結の手続きはどのように現れているのかについて見てみたい。ここでの会話終結は話題の切れ目の位置で、37行目「じゃあ。」38行目「じゃね。」の挨拶の隣接ペアと、それを受け入れる第三部分「うん。」という発話によって成立している。つまり最終交換に相当する手続きのみが観察され、前終結は観察されない。

ではこの終結は何を参照し切り出されているといえるだろうか。別れの挨拶は先述のとおり、講義室に到着したのと同様になされていると考えられる。挨拶の第一成分が発話される直前には1秒強の沈黙が生じているが、これはそれほど長い沈黙としては聞かれない。なぜなら彼らはこの場面において散発的に発話を交わしており、抜粋5-5およびそれ以前から、短くやり取りが生じ沈黙が挟まれることが繰り返されているためである。

Schegloff & Sacks(1973)が指摘する会話状態の一つに「トークが今にも起こりそうな状況が継続している状態(continuing states of incipient talk)」というものがある。これは飛行機で隣同士になった際や家で家族と過ごす際などに生じる、短い発話のやり取り同士の間に繰り返し起こる沈黙の部分をつかえたものである。このような状況における参加者たちは、会話それ自体ではない、別のイベントの構造によって共在状況に置かれているとされる(Schegloff2007)。

抜粋5-5も、この「トークが今にも起こりそうな状況が継続している状態」の生じている場面であるといえる。そして会話終結の組織に際し参照されているのは、会話とは別の目的の達成、この場面でいえば移動の達成であるといえる。換言するとこの場面における終結は、ここまで見てきた事例1から事例4までのような、会話のやり取り自体、会話という活動の内部にあるものを参照することで見出されているのではなく、移動という会話外部の活動の終結に合わせて切り出されているということである。会話は移動という活動に並行して生じ、その活動の継続の範囲内で交わされている、この場面の目的でも手段でもないものとして位置付けられる。

ただし会話終結では移動の達成のみが参照され、会話自体は全く無秩序になされているわけではないことにも注目したい。この場面で扱われているのは、二人が移動する中で得られた資源を用いた当たり障りのない話題であり、立ち話の事例である「楽譜」の場面における最後の話題、二人が話している建物の耐震構造についてと類似した性質であるという特徴がある。このような話題が短く生じ、沈黙が生じるということが繰り返し起こっている。つまり発話でのやり取りには、いつでも終わることのできる局面が維持されているという特徴が観察される。目的地に着いた時即座に別れの挨拶が交わされるという終結の

タイミングは、このような局面を維持する中で可能となっていると考えられる。そうではなく、何らかの長い展開が見込まれる話題がここでなされていたとしたら、移動しながらの会話はしばらくの間立ち話となり、終結の組織はまた異なるものとなったと考えられる。

5.5.2. まとめ—会話以外の活動の達成と結びついた会話終結—

事例 5 の会話の組織には、移動という活動の達成に合わせた会話終結への志向が見出される。結果としてこの場面は、移動を目的とした場面として現れている。この場面における会話は場面の主要な活動、移動の手段でも、それ自体が目的となる活動でもなく、移動という別の活動の構造に収まる形で、平行して生じている活動に位置付けられるものである。

5.6. 終結の組織に見る当該場面における会話の位置付け

5.3 節から 5.5 節では、教壇実習の反省会(事例 1, 5.3.1 節)とスポーツ用品店での会話(事例 2, 5.3.2 節)、元同僚との間に偶然生じた会話(事例 3, 5.4.1 節)と楽譜の受け渡しのために生じた会話(事例 4, 5.4.2 節)、そして歩きながらの会話(事例 5, 5.5.1 節)という 5 つの場面を取り上げ、終結の特徴、いつどのように終結が達成されているのかについてまとめた。この特徴と対応付けられるものとして、本章では当該場面が何を行う機会として生じているのかという「目的」と、その目的に対し「会話がどのような位置付けを担うものであるのか」という観点を取り上げ、会話終結が当該場面の目的を参照し組み立てられていることを指摘した。以下では本章の冒頭で示した表 5-1 を再び参照しながら、当該場面の特徴と会話終結の組み立てについて要点を述べる。

表 5-1(再掲) 会話場面の分類

		主要な活動	
		会話	会話以外の活動
当該場面における 会話の位置付け	目的達成の手段	①	—
	交感	②	③

①、②、③に共通していたのは、各場面の会話終結が当該場面の主要な活動の目的達成に応じたタイミングで生じていることであった。そして会話は主要な活動の目的に対して、場面に応じ異なる位置付けを担い得る。本章で見たのは目的達成のための手段として位置

付けられるもの①)、コミュニケーション、つまり会話それ自体が目的として位置付けられるもの②)、そして会話ではない別の活動の構造内で付随的に生じ、会話自体は当該場面の目的としても手段としても位置付けられないもの③)の三つであった。

会話がこの場面の主要な活動であり、かつ具体的な目的を達成するための手段として生じているという特徴を持つ①の場面として、事例 1 および事例 2 を見た。ここでの具体的な目的とは、当日の授業について意見を共有し合うことや、シューズコーナーの場所について情報を得ることであった。二つの事例に共通していたのは、当該会話が生じるきっかけとなった目的が達成されるのと同時に終結が生じているという特徴である。

会話がこの場面の主要な活動であるという点では共通しているが、会話は交感することを担うものとなっている②の場面として、事例 3 と事例 4 を見た。ここでは、当該会話が生じるきっかけとなった目的がない、あるいは存在するとしてもその達成された時ではない時に終結が生じていることが観察される。これは事前に用意されていた目的の達成に加えて、それをきっかけに生じたコミュニケーション自体に志向して終結が組織されているためであると考えられる。コミュニケーションそれ自体という目的はその達成が曖昧であり、そのため終結のタイミングについて情報を持たないように思われるかもしれない。しかし一見とりとめもなく行われているかに見える、コミュニケーション自体を目的とした会話にも、そこで経験されることに対して一定の期待があり、この期待に沿って会話が組み立てられ、終結のタイミングが探られ、終結が達成されていることが示唆される。これは会話内で取り上げられている話題には、中心的なものから周辺的なものへといった、出現順序に優先性が見られ、終結の直前では既に周辺的话题に到達していること、また終結の前に話題が膨らみ萎むといった、大きな山を描くような軌道が観察されることがこの理由として挙げられる。会話は交感を担うものであるとともに、この場面の目的それ自体として位置付けられる。

以上の①と②は表 5-1 で縦の軸を同じくし、会話終結の機会が会話内部を参照することで見出されるという点で類似している。

最後に当該場面の主要な目的が会話以外の活動であり、会話が交感を担うものとして生じている③の場面として、事例 5 の移動しながらの会話を見た。会話終結は繰り返し生じている話題の切れ目のうちの一つで、唐突に別れの挨拶がなされ生じている。終結を切り出すきっかけは事例 1 から事例 4 の場面とは異なり、当該場面の会話内のやり取りを参照するのみでは見出せない。ここでは会話内でのやり取りではなく、移動という活動を参照し、移動の達成と同時に別れの挨拶がなされ会話が終結していることが観察される。

しかし会話終結の手続きに関する先行研究の指摘にあるように、いつでも挨拶の交換が行えるわけではない。これは発話や進行中の話題の最中で突然別れの挨拶を切り出すことはできないという、私たちの日常の感覚からも明らかである。そこで注目したいのが、事例 5 では世間話に相当する当り障りのないやり取りを継続することによって、移動達成のタイミングに合わせて挨拶が切り出せるような環境が準備されているという点である。あくまで終結のきっかけは移動という主要な活動の達成を参照したものであるが、この機会に備えているという点において、会話内にも終結に向けた組み立てが見出されるといえる。つまり会話は主要な活動を達成するための手段としても、主要な活動の目的それ自体としても機能してはいないが、会話の交感を行うものとしての位置付けも参照されているといえる。会話の交感としての性質が参照されている点は②と類似し、この特徴は表 5-1 で②と③が同じ横軸に位置付けられる部分に示される。

ただし当該場面が現実的目的に志向するものなのか、あるいはコミュニケーション目的に志向するものなのかは、現実には常に二者択一のものではなく兼ね合いの問題であると考えの方が、日常で体験される感覚に近いように思われる。そのいずれを優先することも、実際の会話では可能である。事例 5 の廊下を歩きながらの会話を挙げるならば、移動の達成後立ち話になることも可能性として十分にあり得る。この場合、並行して生じる活動のない立ち話は、コミュニケーションの充足を参照し終結すると予想される。今回見た事例 5 の場合は、浅い話題について沈黙を挟みながらゆっくりとしたペースで維持していることに示されるように、彼らは移動の中で十分にコミュニケーションを果たしてもおり、そのため移動の達成に合わせて別れることが可能になっているといえる。

5.7. おわりに—活動の連続の中に位置付けた会話の分析に向けて—

以上ではそれぞれ性格の異なる会話場面 5 つを取り上げ、それぞれにおける終結の組織と、当該場面の目的、そして目的と会話の関係から整理してきた。最後に、ここまで扱ってきたものとはいくらか異なる状況に生じた立ち話の場面を取り上げる。ここでの会話終結は、本章で着目してきた観点からどのように記述することができるだろうか。

5.7.1. 事例 6 「メール」

抜粋 5-6 に示すのは、サークルの先輩(R, りかさん)と後輩(C)が、大学内を移動中に偶然出会った際のやり取りである。二人はともに女性である。R と C は共同でイベントの運営を行うことになっており、その打ち合わせをビデオ電話で行うことが事前に決まっていた。

打ち合わせ日時について相談するために、CはRにメールでの連絡を二度試みていたが、返信がなく、R側に何らかの問題が生じている可能性についてサークルのメンバー内でも話題になっていた。会話当日の晩には食事会(「企画部のごはん」)の予定があり、互いにそれに参加することを知っている。二人は出会ってから40秒程度やり取りを交わし、慌ただしく別れるに至る。

【抜粋 5-6_メール】

01 C: ↑あ:[りかりかさん連絡つか[なくてどうしようと思った….

02 R: [おつかれ:(:い). [え??

03 R: まじで?

04 C: えっメールしましたよわたし.

05 (1.0)

06 C: ええ?

07 R: え……?

08 (1.0)

09 C: ええ?

10 R: え……?

11 C: に(.)二(h)度もメー(h)ル(h)し(h)た(h).

12 R: え……?

13 (0.6)

14 R: うそ.

15 (2.6)

16 C: でも:(.)>あの時でもいいですよ<企画部[の>あの<ごはん?

17 R: [あ:あ::.

18 C: その時決めましょ?

19 R: うん.

20 R: [ごめんね::.

21 C: [()]

22 C: >すいません<メールしました.

23 R: わかった.

24 C: スカイクで.

- 25 C: [やりましたよ?]
 26 R: [おっけ:.
 27 R: >うんうんうん.<=
 28 C: =その日時とか今日決めましょ?
 29 R: おっけ.
 30 C: は::[:い.
 31 R: [あ:今日でもいいよ.あ今日だめだ.
 32 (1.0)
 33 R: まあいいや.あ-(あした)送る.(あした)メー[ル.夜に.]
 34 C: [は::[:い.]
 35 R: ごめんねごめんね:?
 36 C: あっ(.)↑大丈夫です.

ここでは大きく以下のことがやり取りされている。まず二人が偶然出会い、それと同時に C が以前から抱えていた問題、R と連絡がつかなかったということを表示する(1 行目)。以降、R はこの問題に気づかなかったことと、C はこの問題が事実であることを説明する(2-14 行目)。C はこの問題の解決案について提示し、R が同意するが(16-30 行目)、直後に R は別の案を提示し、すぐに棄却(31 行目)した後、C に連絡することを約束する(33 行目)。最後に R が謝罪し、C はこれを受け入れることで二人の会話は終結している。

抜粋 5-6 は偶然の出会いによって生じた立ち話の場面として位置付けられる。ここでは適度にコミュニケーションを交わし別れることが目指されると予想される。二人は移動の最中に出会っており、後述するように何らかの事情で十分に会話する時間を設けることができない状況であることが示されている。そのため本来であれば、表 5-1 の交感を行うものとしての会話に沿うように、挨拶や短いやり取りでこの会話を切り上げるのが自然である。

しかし「ハナメシ」(抜粋 5-3)と比較するとよく分かるように、偶然生じた会話であるにもかかわらず、ここでは会話冒頭で C によって示された「連絡がつかない」という問題への対処という、具体的で重大な目的への志向が観察される。C はこの問題を会話の冒頭、挨拶にも優先するものとして表示することによって緊急性を示しており、このことによって第一の話題には「連絡がつかない」という問題が扱われることになっている。表 5-1 でいえば、ここでの会話は具体的目的の達成の手段として位置付けられることになっており、実際のやり取りもこの具体的な目的の達成された時点、問題が一旦解決に至った時(30, 34

行目)が、終結のタイミングとして志向されていることが分かる。しかしこの問題には別の対処が提案されたため(31行目)、やり取りは継続することになっている。

終結のタイミングに関してもう一点特徴的なのは、この会話の後半では移動が開始されはじめていることである。移動が厳密にどの位置で開始されたかについては音声資料のみからは判断することができないが、31行目や35行目、36行目の発話が声を張り上げるようにしてなされていることから、この位置では既に二人は遠ざかった位置で発話を交わしていると推察される。また33行目では、「まあいいや。」と細かいやり取りを諦め、「あ(あした)送る。(あした)メール.夜に。」と、言いよどみを含みながら、後から語を追加していくという、十分な時間をかけて発話を組み立てることができない様子が観察される。またCの反応を受けての発話としては聞かれず、Rが一方向的に宣言する発話となっている。そして最後の二度繰り返された謝罪(35行目)も、急いで付け加えたものとして聞かれ得る。

コミュニケーションに志向したやり取りは立ち話に必ずしも必要ではないが、ここでの会話は、そのようなやり取りが生じていない以上に、非常に「急いで」なされているという特徴がある。これは、この会話が互いの移動の途中という別の活動の間に挟まれていることと関係しているのではないだろうか。実際に二人はやり取りを完全に終える前に移動を開始し、この移動の妨げにならないよう、言い残しをいわば会話に押し込むように急いで行っている。移動という会話の前後にある活動の圧迫を受けながら、ここでのやり取りは開始し終結していると考えられる。

この場面は、これまでつかなかった連絡を補うための何らかの取り決めを行うという具体的な目的のある立ち話として生じている一方で、移動の途中で偶然生じた会話であるという性質をも有している。本来であれば参照できる、限られた時間内で適当なコミュニケーションを行うという目的と、突然判明した具体的で緊急性のある目的の両者の折り合いをつけることが要求されることになっている。具体的な目的達成を限られた時間内に収めるという問題に対処しようとした結果が、このような遠ざかりながら、互いの合意を十分に確認し合うことのできないやり取りの終結として現れていると考えられる。

5.7.2. もう一つの視点—前後に生じる活動と結びついた会話終結—

事例3「ハナメシ」や事例4「楽譜」の事例では、会話内部にコミュニケーションの達成に沿った構造が見いだされることを先に見た。このような構造は、上で見た前後の活動の加える制約、換言すると会話外部にある構造との兼ね合いの中で実現されているものであることを気づく。現在行われている活動に続く活動の開始を優先しなくてはならない時、

事例 6 であれば場所の移動という活動を差し迫って行わなくてはならない時、立ち話に適当なやり取りを適当な時間を掛けて行うことは難しい。

3章や4章では、会話を終えるに際し会話の内部をどのように組み立てているのか、つまり当該会話の内側で何が行なわれている必要があるのか、その制約について見てきた。加えて本章では、会話終結に際し参照される当該会話以外から与えられる制約として、「同時に行われる」別の活動、例えば場所の移動を参照していることを見てきた(事例 5「廊下」)。さらに、会話外部からの制約は「前後に行われる」別の活動からも生じ得ることを、急いでなされた立ち話から見た(事例 6「メール」)。つまり会話の終結に際しては、今行われている会話と同時に生じている活動を互いに参照し合っていることに加え、今行われている会話とその前に生じていた活動、あるいはその後が生じる予定の活動同士も参照し合っていると考えられる。ここで会話の終結について考察するにあたり、これを日常生活に生じている活動の連続の中に位置付けて議論する必要があることが示唆される。

6章 共在状況に生じる「活動の連続」

—学外実習における学習場面の観察から—

6.1. はじめに

5章では会話終結の際に参照されているものとして、当該会話自体だけでなく、「同時に行われる」別の活動が参照されている可能性について示した。さらに5章の最後では、移動の途中に生じた立ち話を急いでまとめ上げようとする事例(5.7.1節)を取り上げ、「前後に行われる」別の活動が参照されていることを示した。ここでは現行の活動の中で達成しようとする事と、隣り合って生じる活動の中で達成しようとする事の両立が困難であるというジレンマ状態が生じている。それが二つの活動の接点の部分である会話終結と続く活動の開始(あるいは中断されていた活動の再開)に現れていた。

このようなジレンマ状態になかった会話は、直後の活動が直接終結の組織に現れることはなかったが、会話終結が次の活動との接点を担うものであることは共通している。本章ではこの活動同士の接点、現行の活動の終結および次の活動の開始という、活動と活動の境界に焦点を当てる。

私たちが体験している活動の境界は、電話回線を切るように一点で取り返しの付かないものとして生じるものばかりではないと考えられる。これらは他にどのような性質のものがあり得るだろうか。本章で扱うのは会話あるいは活動の連続としての性質が見出しやすい、共在状況が継続する場面である。共在状況とは人びとが同じ空間に直接居合わせて相互にモニターし合える状況である。この中で活動の境界がそこにいる人たちにどのように体験されているのか、そのあり方の一つについて本章では考察する。

6.2. 先行研究および本章の位置付け

会話終結を扱った研究の多くでは、会話がその内側で完結するという側面に焦点を当て記述することが主になされ²¹、典型的には電話会話の回線の接触によって設けられた相互行為の場が扱われてきた。ここでの開始や終結のように、会話を行う際に用いていた相互行為チャンネルの接触と切断が伴う境界というものがある一方で、共在が維持される状況下で

²¹ ただしここでの終結の組織には、現在行われている会話だけでなく、参加者たちが次に会う機会への志向が示されることも指摘されている(Button1991ほか)。

生じる境界というものもある。本章はこのような境界に焦点を当て観察を行うことを通して、隣接して生じる活動を参照し合いながら活動の開始と終結が組織されること、また境界は一点で生じるものばかりではなく、時間幅を持って立ち現れるものがあることを見て行きたい。

6.3. 観察対象と観察の手順

6.3.1. 観察対象「合宿の形式で行われる学外実習」

扱うのは、大学の学部生に向けて開講されている実習科目の一場面である。主な課題は実習地での特定の話者への聞き取りをもとにライフヒストリー²²を執筆することであり、聞き取りは長期休暇中の6日間、対象となる実習地を実習生と教員が訪れ、寝食をともにしながら進める。ここでの行動は三食および一日一度、夕食後に行われる全体ミーティングの時間のみ実習生と教員が同じ場に集まることが決められているが、それ以外の時間は実習生が課題達成に関わる活動を自身で選択し、概ね自由に行動することができる。つまり実習生たちは常に実習中という文脈下でありながら、6日間朝から晩までという長い時間をどのように行動するかが任されている。このうち4日目の全体ミーティング後の自習時間を収めた音声・映像資料に生じていた活動の境界部分を取り上げる。この場面に居合わせるのは実習生(S)7名(SA/SB/SC/SD/SE/SF/SG)と教員(T)4名(TW/TX/TY/TZ)の計11名である。

6.3.2. 収録方法

収録は一台のビデオカメラとICレコーダーで行った。図6-1では自習に用いられた部屋と収録機材の配置、および映像中の実習生および教員の着席位置を示した。また収録された映像の例を図6-2に示す。

²² ライフヒストリー(生活史)とは、「個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したもの(桜井 2002)」である。この実習では対象とする人物本人による語りや所有されている資料を中心に、その人物を知る家族や近隣の方々への聞き取り、地域の有している資料、その他専門的な情報を扱う文献資料などを複合的に用い、実習生一人一人がそれぞれ一つのライフヒストリーを執筆する。

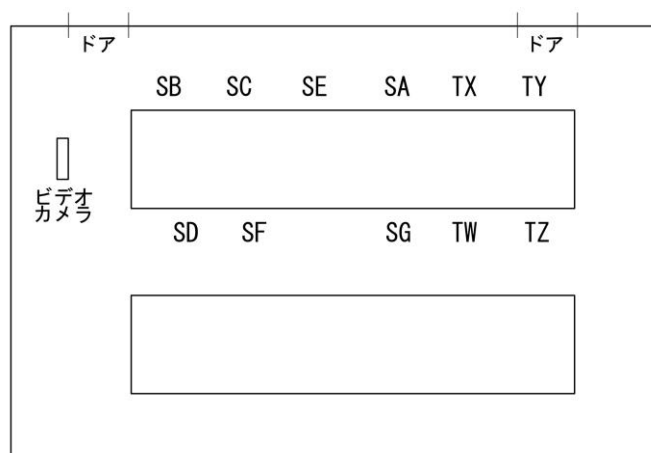


図 6-1 機材の配置と着席位置

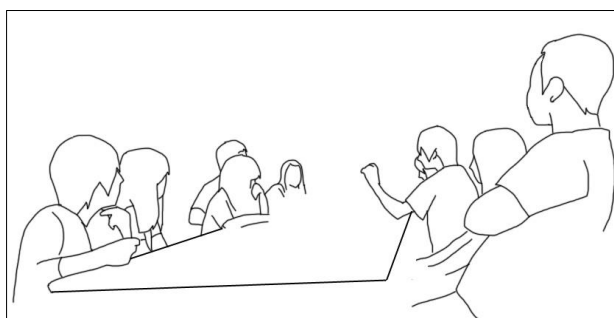


図 6-2 収録映像の例

収録した映像・音声資料には、収録機材と対象の距離や角度の条件などによって、一部観察しにくい箇所が生じている。そのためこの場面に生じた発話、また居合わせた人びとの視線や姿勢などといった身体の振る舞いの細部について、詳細に追うことができない箇所がある。このような資料の限界はあるが、本章では観察可能な箇所をもとに活動の境界の可能性について考察することにする。

6.3.3. やり取りの概要と本章が扱う部分

この場面におけるやり取りの大筋について、本節で概観しておきたい。本章で見ていく会話資料は、一日一度行われる夜の全体ミーティング後 2 時間程度を収録したものから抜き出した。全体ミーティングの最後には、テーマ別で分けた一部の実習生に対して、全体ミーティングの解散後の活動を別室で行うようにとの指示がなされている。その一部の实習生および教員たちが別室に移動する途中から収録を開始している。

部屋に関する指示があった一方で、この部屋で具体的に何を行うのかについては事前の指示がなされていない状況であった。収録された資料には、この場で何を行うのかについて交渉し合い、その結果ミーティング形式での指導(以下「ミーティング²³」とする)が生じる様子が収められている。収録された資料内で行われていた活動は次のようなものである。

1) 移動

一部の実習生および教員たちが、全体ミーティングを行った部屋とは別の部屋に移動してくる。一つの長机に着席する。

2) 自習・雑談²⁴

学生の一人(SG)は無言でノート整理を行う一方で、その他の学生(SA/SB/SC/SD/SE/SF)は課題の達成に直接は関係しない話題について盛んにやり取りしている。

3) 自習・雑談終了/ミーティング開始

学生たちの雑談をしばらく観察していた教員の一人(TW)が雑談に参加する。その後この場をどのような場にするかについて S たちの意向を尋ね、ミーティングが開始される。

4) ミーティング

30分弱、聞き取りに関する相談や意見交換、翌日以降の聞き取りのスケジュールに関する確認がなされる。

5) ミーティング終了/自習開始

この直後に行う作業について確認し、ミーティングが終結する。その後も同部屋で各自の作業が行われる。

このうち本章で注目するのは、隣接する活動の終了と開始が生じている 3 および 5(下線箇所)の二部分である。6.4 節で自習・雑談からミーティングへの移行を、6.5 節でミーティ

²³ ここで行われていたことを表現する際に「ミーティング」という表現は実際には用いられていない。本章で用いる表現は、当該活動部分を指示するために便宜的に用いるものである。

²⁴ 注 23 と同様に、「自習」、「雑談」という表現は実際には用いられておらず、この表現は当該活動部分を指示するために便宜的に用いるものである。なお後の 6.6 節で指摘するように、参加者たち自身は別の活動としてこれらを行っていた可能性がある。

ングから自習への移行を順に見て行く(図 6-3)。

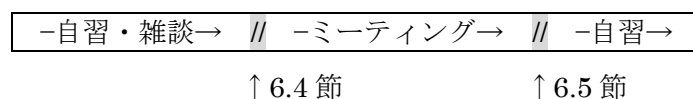


図 6-3 観察箇所模式図

この境界部分を中心に、聞き取ることのできる限りにおいて発話を書き起こしたものを軸に分析を行う。また、その際の発話以外の振る舞いについては、活動の境界の分析に関わると考えられるものを適宜本文の記述中および図で指摘する。図は映像の特定箇所のキャプチャ画像を線でなぞったものを示す。

6.4. 自習・雑談終了とミーティング開始という境界

まずは収録の開始時点で生じていた活動から、次の活動への移行がどのように行われているかを見て行きたい。

6.4.1. 観察 1—境界以前—

活動の境界が生じる以前にこの部屋で行われているのは、雑談や自習と呼べる活動である。以下のような振る舞いが観察される。一名(SG)を除いて学生たちは、聞き取りの中で得られた情報である「屋号」について盛んに話している(図 6-4)。しかし、このグループの隣に座る人はまっすぐ前を向き虚空を眺めていたり(TX, 図 6-5)、イヤホンをして自習をする(SG, 図 6-6)といったことに観察されるように、同じ机に同席はしているが、そこへ関与しないことを強く表示している。ここからは雑談という焦点の定まった相互行為が、それに参与しない周囲をも巻き込み得るものとして存在していることが伺える。

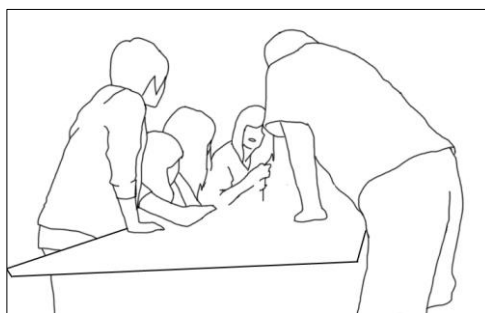


図 6-4 「屋号」に関する雑談

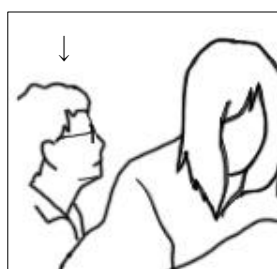


図 6-5 雑談非参与者(TX)

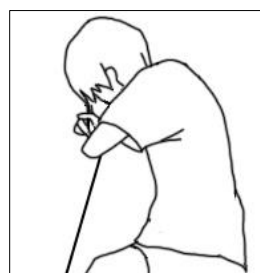


図 6-6 雑談非参与者(SG)

焦点の定まった相互行為(**focused interaction**: Goffman1963)というのは、「人びとが近接して、話を交互にしながら注意を単一の焦点に維持しようとはっきりと協力し合う場合に起こる(丸木・本名訳 1980: 27)」相互行為のことである。同じ状況に居合わせた二人以上の人びとが一緒になり、単一の認知的、視覚的注意を維持しようとする状況であれば、会話だけでなく社交ダンスなどといったものもここに含まれる。これら焦点の定まった相互行為は、いわゆるコミュニケーションとして想像しやすい。

一方で私たちが行っている相互行為には、焦点の定まった相互行為だけではなく、焦点の定まらない相互行為(**unfocused interaction**: Goffman1963)というものもある。焦点の定まらない相互行為とは、「その場にいる別の人が自分の視野に入る時に、その人を一瞬ちらりと見て、その人に関する情報を集める場合に起こるコミュニケーション(丸木・本名訳 1980: 27)」を指す。これは人びとが同じ社会的状況に居合わせるだけで生じるものである。例えば電車に乗り合わせた人びとは相手のことを一瞥はするものの、その後すぐ視線を外すことによって互いに特別の関心がないことを示す。Goffman はここで相互行為が起こっていないと捉えるのではなく、焦点の定まった相互行為に移行しないよう注意深く行為が調整されていることに注目し、このような相互行為を焦点の定まらない相互行為とした。

雑談および自習の場面においても、雑談という焦点の定まった相互行為に加えて、雑談

の参加者と雑談に参加しない他の人との間には、焦点の定まらない相互行為が生じているといえる。具体的にいえば、雑談の参加者とそれ以外の人とは、焦点を共有した相互行為を行ってはいないものの、互いに視線の端に相手を捉えており、モニターし合っている状況が継続している(図 6-7)。このことは後に生じるミーティングの開始に際し利用されることになる。

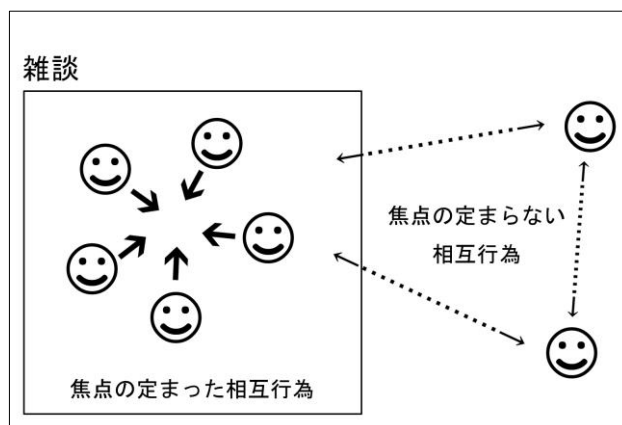


図 6-7 焦点の定まった相互行為と焦点の定まらない相互行為

このような状態がしばらく継続した後、ミーティング形式での指導という別の活動への移行の契機が TW によってつくられる。

雑談の参加者たちの間では、親族の屋号に関して SA による長い発話が数分にわたり行われていた。TW は入室後しばらくの間これを遠巻きに眺めていたが(図 6-8)、その後雑談グループの背後に歩み寄り、SA が語りの途中に書いたメモ(屋号を表す紋の絵)を覗きこむ(図 6-9)。SA は TW に視線を向け、何の話をしているのかを TW に説明し、さらに語り続ける。TW はそれに笑いを含みながら評価の発話を行い(1 行目)、グループからも笑いが起こり同意が示される(2, 3 行目)。直後に TW は屋号に関する情報を提示し(4 行目)、S たちは熱心にそれを聞いている(5 行目)。

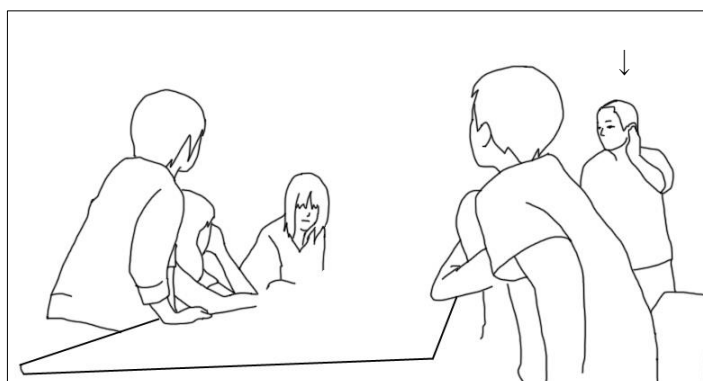


図 6-8 雑談を遠巻きに眺める TW(承認されていない参加者)



図 6-9 雑談の輪の中心(SAの手元)を覗き込む TW(承認された参加者へ)

【抜粋 6-1_学外実習(TW が雑談へ参与)】

- 01 TW: hh かつこいいねそれ。(首をかしげながら、笑顔)
- 02 S: ((笑い))
- 03 SC: かつ(h)こい(h)い(h)で(h)す(h)ね(h)え.hh
- 04 TW: 屋号っていろいろあって[:だから:あの::
- 05 SA: [はい.
- 06 ((中略 2分 17秒 TW による屋号の説明))
- 07 TW: だからいろ:んな屋号の付け方がある(の).
- 08 S: う::ん.
- 09 TW: だからもっとふざけた(0.8)つけ-付け方(.)もある.
- 10 S: [へ:::
- 11 SB: [ふ:::ん >なんか<[うちが知ってたの落語で::,蕎麦屋さんが:,
- 12 TW: [その::

13 SC: うん.

14 ((中略 27 秒 SB の屋号に関する理解が語られる))

15 SB: それが屋号だと思ってたから,家にも付くのおかしっ>みたいな.<

((抜粋 6-2, 1 行目))

TW が雑談に参加するまでを、参与役割(participation status: Goffman1981)の変化に注目してまとめると以下ようになる。参与役割とは、当該会話における「話し手」、「聞き手」という区別をさらに細分化したものである。ここでは「聞き手」の役割の区別について見ておきたい。まずは会話への参与を認められているか否かの区別から、「承認された参与者(ratified participant)」、「承認されていない参与者(unratified participant)」の二つに分けられる。承認された参与者はさらに、発話を向けられている参与者である「受け手(addressesee)」と、そうではない参与者「傍参与者(side-participant)に二分される。そしてもう一方の承認されていない参与者は、話し手に存在は気づかれている「傍観者(bystander)」と話し手に気づかれていない「盗み聞き者(eavesdropper)」に分けられる。

TW について見てみると、最初の遠巻きに雑談を眺めている状態は、承認されていない参与者である傍観者として位置付けられる。そして雑談に歩み寄り話し手の手元を覗き込んだ時点で、承認された参与者である傍参与者、そして SA から説明を宛てられた受け手へと、参与役割を変化させている。そして抜粋 6-1 のように SA の発話に対する評価「hh かつこいいねそれ.(1 行目)」で発話順番を獲得し、さらに 4 行目以降で長い発話順番を維持し、屋号に関する情報提示を行う。以上のように TW は会話の外側に位置付けられた聞き手から内側の聞き手へ、そして発話順番を獲得するというように、段階を踏みながら会話への参与を果たしている。

6.4.2. 観察 2—境界部分—

続いて自習・雑談終了とミーティング開始という活動の境界が生じている部分について見ていく。先に述べたとおり、この部屋では実習生の課題達成に関わる活動を行うことが期待されているが、具体的に何をどのように行うかが定められていない。このような状況で生じているミーティング形式での指導の開始は、「じゃあはじめましょうか」などのような明確な宣言を用いるようなやり方ではなく、ミーティングを行うか否かの交渉を経て成立している。そのためやり取りはやや混み合っている。

【抜粋 6-2_学外実習(自習・雑談からミーティング形式での指導への移行)】

- 01 SB: それが屋号だと思ってたから,家にも付くのおかしっ>みたいな.<h
 02 (0.4)
 03 SD: まあ家っ° て>のもあるんじゃない.<° =
 04 SA: =hh い(h)え(h)につ(h)付¥[>きうる<よね¥
 05 TW:→ [あの::(.)なんというか・あの::(.)ちゃ・ちゃんとした
 06 → 姿勢で:(.)あの:(0.4)確認したい(0.6)し h-すべきこととか>なんか<そういうのあ
 07 → りますか?
 08 S: [° う::ん°
 09 S: [え::
 10 TW: 質問とか.
 11 (1.6)
 12 TW: あの::(0.8)もうちょっとくだけた雰囲気になってもいいのか.
 13 TW: まだ[なっはいけないのか.
 14 TX: [HAHAHAHA
 15 SB: hhh
 16 SE: あ:::.
 17 SC: [あ:なるほどなるほど:.
 18 SF: [え::.
 19 SD: じゃあ一旦ちょっと厳しくいきましょう.
 20 S: [hhhhh
 21 SB: [あっ(h)そ(h)うな(h)の?hhhh
 22 ((中略 10秒 沈黙、S同士で質問があるか小声で確認し合う、考えていること
 23 の表示(資料を見る、「うーん」という発話)))
 24 TY: 私からちょっと聞いてもいいですか?((挙手しながら))

抜粋 6-2 が自習・雑談とミーティングの境界部分であり、やり取りの大筋は以下のとおりである。TW に続いて長い発話順番を取得していた SB の語りが終局に達するのを待ってから、TW は表現を選びながら慎重に確認事項を要求する発話を行う(5, 6, 7 行目)。学生から応答が得られないこと(8, 9 行目)を受けて、TW は「質問とか.(10 行目)」と具体的な行為の例を挙げ学生の応答を促す。さらに応答が不在であること(11 行目)を受けて、TW は発話順

番を継続し、5、6、7行目の確認事項の要求の前提である、ミーティングを行うかどうかの判断を要求する(12, 13行目)。ここで学生はTWの発話を理解したことを表示し(16, 17行目)、19行目でミーティングを行うという判断が示される。そして確認事項を用意するための沈黙が生じるが(22, 23行目)、結局学生側から確認事項は提示されず、24行目で教員側からの進捗の確認が行われる。

6.4.3. 境界の性質に関する考察 1

抜粋 6-2 に生じている活動の境界について、以下のような特徴を挙げるができる。

まず一点目として、自習・雑談の終了(あるいは中断²⁵)がミーティングの開始によって境界付けられており、活動の開始や終了は隣接する活動に依存して生じている点が挙げられる。この境界はどのように組織されているのかに注目してみると、「くだけた雰囲気(12行目)」ではなく「ちゃんとした姿勢(5, 6行目)」でという態度の異なりとして指し示され、さらにそれは「もうちょっと(12行目)」という程度で捉えられるものとして扱われている。このことからミーティングの開始は「雑談」と「ミーティング」という別の活動への変更ではなく、今行っている会話を引き継ぐ中での態度の変更として提示されている。

一般的なミーティング開始では、ミーティングに参加すると予想される人たち全員の注意を獲得するような発話、例えば開始の宣言のようなものを利用することができる。それに対してこの場面では、雑談という既にある相互行為の焦点をもとに、雑談に参加しない人たちをこの相互行為に取り込む方法がとられている。

その一方で、この異なりは態度以上に活動の違いとして志向されていることが指摘できる。例えば14行目では、雑談へ関与しないことを強く表示していたTXが大きく笑いで反応し、また10行目直後ではSGがイヤホンを外すといった様子が観察される。これは相互行為への関与あるいはそれに備える振る舞いといえる。つまり相互行為の態度が「くだけた雰囲気」ではなくなるという変化のみではなく、この場に集った全員が参加する性質の活動、ミーティング形式での指導が開始する可能性が志向されている。

ここまでの間、TWが雑談に参加する者として発話順番を取得し(5行目)、雑談に参加する実習生たちに対し交渉を持ちかける中で、笑いによる反応を行ったTXやイヤホンを外し自らの参加に備えているSGといった雑談に参加していない人たちを取り込み、新たな活動の開始が形成されている。このような活動開始のやり方は、雑談参加者とそれ以外の人たち

²⁵ これが終結なのか中断なのかは、どちらの可能性も参加者には残されており、この時点では判断することができない。結果的にはミーティング後再びこの会話の枠組みを取り戻すことはなく、これが自習・雑談の終了部分となった。

の間に焦点の定まらない相互行為が生じていたため可能になっているといえる。雑談に参加しない人たちは、雑談に関与はしないものの、雑談で何が行われているのかに対する観察を維持しており、その結果雑談に続く位置でミーティング開始の交渉が始まったことに素早く反応することができているのである²⁶。

もう一点指摘したいのは、活動の境界の現れ方についてである。注目したいのは活動の開始に関する交渉中、抜粋 6-2 の「くだけた雰囲気はまだなつてはいけない(=ミーティング形式での指導を行う・受ける)」という理解が得られた 19 行目の後に、相談などの確認すべき事項を探ることが行われているということである。つまりミーティングを行うことが決定した直後に学生たちが行おうとしていることは、5 行目から 7 行目で既になされた相談事要求に答えることである(図 6-10)。

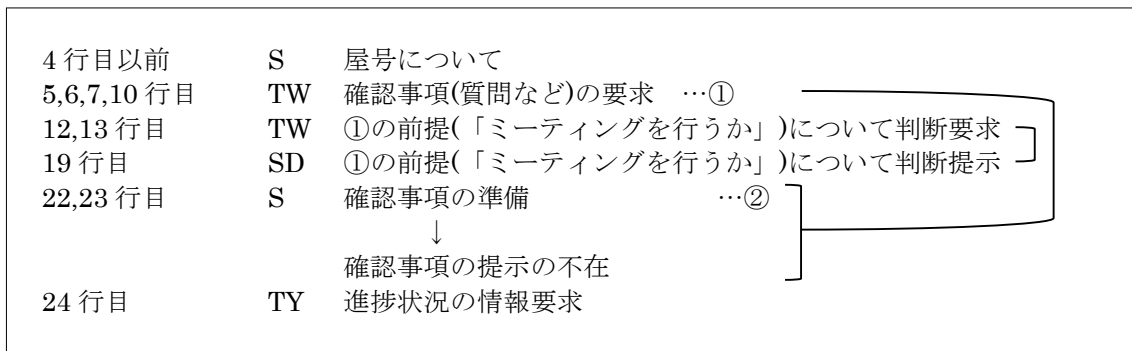


図 6-10 抜粋 6-2 における活動の境界部分(簡略化したもの)

図 6-10①の時点は、学生たちによってミーティング開始としては扱われていない。しかし交渉を経てミーティングを行うことが決定した直後②で学生たちが行っていることは①の応答の準備である。つまり学生たちがミーティングの実行が決定された直後に行おうとしていることは、ミーティング実行が決定される以前になされた①の行為に対する応答である。

結果としては①への応答は返されず、長い沈黙によってこの不在が明らかになっている。そしてこの応答の不在に対して行われたのが、教員という、本来ならば確認事項を受け付ける側の参与者(TY)から学生に向けた質問である。TY は発話の前の沈黙の間、応答を用意する学生たちに視線を向け逸らすことを繰り返し、確認事項の提示が行われないことを目で確認している。そして 24 行目の発話の直前では、上半身を机と平行にするように覗き込み、

²⁶ この部屋には別にもう一つの長机があるにもかかわらず同じ机に集まるといふ振る舞いからは、ここにいる人たちとの間で、自身が参与すべき活動が今後起こり得るといふ期待が示されていると考えられる。そのため彼らがここで行っているのは自習やぼんやりすることであると同時に、何らかの自身が参与すべき活動が生じた場合にいつでも応じられる状態を維持しながら「待つ」ことと位置付けることもできる。

参加者の様子を机の端まで確認した後、図 6-11 のように挙手を伴いながら順番を取得し(24 行目)、進捗状況の情報要求を行う。TY は学生たちから確認事項の要求が行われることを十分に待ち、これが行われなかったことを受けて、教員である「私から(24 行目)」逆に確認を行っているのである。



図 6-11 挙手して発話を開始する(TY)

学生たちおよび TY の振る舞いからは、ミーティングの実行が決まった直後②の位置を、①で行われた確認事項の要求に応答する位置として扱っていることが示されている。そのためミーティングの実行が決まる前の時点ではミーティングにおける発話として扱われていなかった①の発話を、参加者たちは②の時点ではミーティング内で行われる最初の行為として扱っているといえる。

まとめると以下のとおりである。ミーティング実行が決定付けられた後、参加者たちにはじめに行うべきものとして扱われていた行為は、確認事項の提示という行為である。これはミーティングという活動を行うことが決定される前になされた発話、確認事項の要求という行為への応答として位置付けられる行為である。この発話は産出されたその時には活動の開始としては扱われていないものの、結果的にミーティング内で行われる最初の行為を構成する成分として扱われている。このことから活動の境界には生じたその瞬間には不確定なものとして理解されるようなあり方が存在するといえる。

なおここで開始された活動がそれ以前の雑談の延長ではないことは、TY の 24 行目の発話が挙手を伴い開始されていること(図 6-11)から裏付けられる。それ以前で行われていた雑談とは異なる、発話順番の取得に対する志向が見出せるためである。そしてこの机に着席する全員が TY に注意を向けてこれを聞いており、新たな参与枠組みが構築されていることが観察される。

6.4.4. まとめ 1

以上の観察についてまとめる。次の二点が 6.4 節で扱った活動の境界に関する観察の要点である。

まず一点目として、自習・雑談の終了がミーティングの開始によって境界付けられており、反対にミーティングの開始は先に生じていた雑談を引き継ぐ形でなされているといったように、この共在状況における活動の開始や終了は隣接する活動に依存して生じていることである。

そして二点目に、活動の境界は結果的に開始として扱われている発話の産出後、しばらくの交渉を経てから開始が決定付けられることで確定していることである。境界は当該相互行為が行われているその時には不確定なものとして現れている。

さてこのような活動の移行は、いつ開始されたと考えるべきだろうか。結果的にミーティングの最初の行為として扱われているのは 5-7 行目の TW の発話であるが、それ以前の TW の振る舞いは、活動の移行に向けたものとして見ることができるかもしれない。TW は傍観者から承認された参与者へ、そして発話順番の取得という段階を踏み、一度雑談への参与を果たし、そしてこの雑談内の発話を通してミーティング形式での指導を行う交渉を開始している。

6.5. ミーティング終了と自習開始という境界

続いて、6.4.2 節で生じたミーティングが終了し、新たな活動が開始する箇所について見ていく(図 6-3, 再掲)。

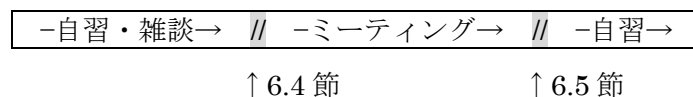


図 6-3(再掲) 観察箇所模式図

6.5.1. 観察 3—境界部分—

ミーティング形式での指導は開始から 30 分弱で終了する。抜粋 6-2 以降では実習生の質問を受け付けた後、翌日以降の作業について確認し合い、解散の提案がなされる(5 行目)。

【抜粋 6-3_学外実習(ミーティング形式での指導から自習への移行)】

- 01 TW: あの話聞いてて::(.)この人:もそうかなと思ったら,(<だけど.>だ->大丈夫?<
- 02 (2.5)((S うなずき))
- 03 SG: 大丈夫っす.
- 04 (2.0)

- 05 TX: じゃあ(.)解散:>でいいですか?<=
 06 TW: =うん.(1.0)大丈夫かな?
 07 S: はい.((うなずき))=
 08 TX: =で SG さんとは今みたいな話をここでしてるから:(.)その推移が知りたいって
 09 言うかね一体そういう時どうするんだみたいな人は>どうぞ<その(.)最後まで
 10 いなくてもいいから:, うん.
 11 TW: あるいは後で(.)あの:SG さんの後でまた個人的に_
 12 TX: そうそう.
 13 TW: ° (しょうかい)したりとか° あの相談したいとか:,あとまあ((実習地名))で
 14 撮ったものを:その::TZさんに相談したいとか:(.)()たりとか:あの:
 15 >そういうのは<(.)自由に(.)やってみよう.
 16 S: はい.((うなずき))
 17 (2.4)
 18 TX: ° よ° し h:∴∴
 19 (2.2)
 20 SE: ° ()かなあ°.
 21 SC: 行っていいのかなあ.
 22 SA: ([])
 23 TW: [と・とりあえずさ:このまず紙をさ(.)あ・年表作ってあるの?
 24 SG: 年表こっちに作って:で今日また新たに聞いたやつを:(報告が続く))

ミーティングが終了できる局面に達していることが明示的に確認されている 5-7 行目の後は、終了が成立し得る最初の位置となっているが、TX は学生たちの反応に密着したタイミングで順番を開始し、ミーティング内の発話を継続してこの後の行動について提案を行う(8-10 行目)。またこれと同列の選択肢として TW もその他の行動について例示し(11, 13, 14, 15 行目)、発話の最後「やってみよう(15 行目)」という提案に学生は強く頷き同意を示している(16 行目)。

この提案と同意というペアが、ミーティング終了の成立として理解されていると考えられる。この後には何らかの区切りへの志向や緊張状態からの解放を示す振る舞い、例えば TX に発せられた大きく息を吐き出すような「° よ° し h:∴∴(18 行目)」、ほぼ同時のタイミングで SC が伸びをするように両腕で髪を搔き上げ整える動きが観察される(図 6-12)。また

発話のやり取りも生じているが、全員に聞かれることに志向した声量や発話のやり方とは異なることから、ミーティングではなく学生同士の間でなされる雑談として聞かれる性質のものへと変化していることが分かる。



図 6-12 髪を掻き揚げる(SC)

その後 23 行目では先ほどまでミーティングを取り仕切っていた TW が SG に向けて、ミーティング中と同様の声の調子で発話を開始する。この時周囲は二人に一度視線を向ける。すぐに視線を逸らす者もいれば、SG の発話中しばらく視線を向けたままの者もいる。そしてしばらくの後、席を立つ者が現れ出す。

6.5.2. 境界の性質に関する考察 2

ここで生じている活動の境界については、以下の点が指摘できる。

まず一点目に、ミーティング終了の際に用いられている「(この後に行う活動の候補)自由に(.)やってみよう.(11-15 行目)」という発話は、ミーティング後の活動開始の宣言としても聞かれるという点に注目したい。これはミーティングという活動と自習という活動同士が隣接して生じることに沿ったものである。会話の終了付近で会話外への志向を示すことはしばしば行われるが、それ自体が終了の発話を担っていることは、次の活動の開始と現行の活動の終了が近接しているという特徴によって可能になっていると考えられる。そしてこの終了あるいは開始の宣言を境に、TW や TX が例示したような活動をはじめることが適切になっている。

第二に、活動の終了が終了後の参加者の振る舞いの積み重なりによって確定的なものとなっている可能性が指摘できる。まず 23 行目で TW と SG のやり取りが開始した際に、周囲が二人に視線を向けるという振る舞いが観察された。ここでは、どのような活動が開始されたのか、またその活動に自身が参与すべきであるのかが確認されていると考えられる。

そして終了の前に予告されていた次の活動、教員との個人的な相談が始まったこと、またその内容が自身の課題達成に役立つものであるのかが確認された後²⁷、席を立つ人が現れ出す。このタイミングに注目してみると、はじめに席を立ちはじめた SC に、やや遅れはするものの重なるタイミングで SA と TY も同じく席を立っている(図 6-13)。ここでは互いが立ち上がることを知覚し合っているだけではなく、ミーティングが終了したこと、また続く活動が開始されたことと結びつく複数の振る舞い、例えば伸びや髪を整える動作、「°よ° し h……」という発話、机にうつ伏せるように上体を倒す姿勢、雑談、個人相談、といったような振る舞いの積み重なりを観察する中で、席を立つことが適切であることが見出されていると考えられる。

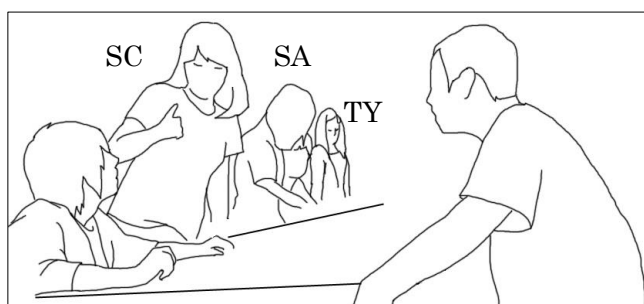


図 6-13 離席(SC, SA, TY)

席を立ちその場を離れることは、そこで行われる相互行為への参与を断ち切るものである。自身に関係する活動が終了しその後も起こらないことが明らかであれば、その後に生じる活動の内容に注意を払う必要はない。そのため大学の講義などの後であれば、学生が即座に講義室を立ち去っていくことがしばしば行われる。一方この場面では、この後に行われる活動が自身の課題達成に関わる可能性があり、その活動の態度によってはミーティングの延長として現れてくることも可能性として残されている。そのため席を離れることは慎重に判断される必要があると考えられる。

²⁷ ミーティングの後半では、ミーティング後 SG と教員の間で個人的な相談を行うことが全員に向けて予告されており、必要に応じて実習生はこれを聞いて参考にすることが提案されている(8-10 行目)。そのためここではやり取りに各実習生自身が参与すべきかの判断に際し、SG と TW がはじめたやり取りがミーティングとは異なる個人相談であることだけでなく、その内容が自身の参考になるものか否かの情報が求められ、やり取りの「内容」についても注意を払うことが適切になっている。

6.5.3. まとめ2

6.5節の観察の要点は以下の二点である。

第一に、次の活動の開始を提案する発話とそれへの同意によって、ミーティングの終了が示されていることである。この場面の、活動同士が隣接して生じるという性質に沿ったものであるといえる。

第二に、活動の終了が、終了後の参加者の振る舞いの積み重なりによって確定的なものとなっていることが示唆される。先行する活動(ミーティング形式での指導)を取り仕切っていた TW の発話をきっかけに、その他の者の注意が一度集まり離れていくという振る舞いは、この活動が自身のこれまで参加すべきであったミーティングではない、異なる活動であるかを確認するものであると考えられる。そしてミーティング終了直後ではないにもかかわらず複数の参加者が類似のタイミングで離席するのは、この間に行われたミーティングが終了したという理解を示す行為、例えば伸びや学生同士のおしゃべりといったものの観察が積み重なる中で、離席が適切である状況の確定を同様に見出したためである可能性が指摘できる。

共在状況が継続する中では、活動の境界の前後でも相互行為自体は継続可能な状況が維持される。活動の境界が確実に生じているのかを確かめる方法の一つには、境界以降にその活動が続かないことを見届けることが挙げられる。当該活動ではない活動は時間の経過の中で積み重ねられ、境界はより確実なものとなっていく。このように時間幅を持って開始や終了が確実なものになっていくというような境界のあり方があると考えられる。

6.6. フィールドの性質との関係

本章が扱った活動の境界のあり方は、長い時間と広い空間を実習生の自主性のもとに活動するという、実習場面の文脈の影響を受けたものであると考えられる。以下では実習というフィールドとここでの境界の組織との結びつきについて述べる。

まず6.4節で見た境界における特徴、ミーティング開始の交渉以前にまずは雑談への参加を果たすこと、そして開始の宣言ではなく実習生の意向を尋ねる形でミーティングを開始するというやり方を TW が採用していることについて述べる。実習生たちはライフヒストリーの執筆という課題達成に関わる取り組みを自由に選択し、自主的に行動することが求められている。今回扱った場面もこのような期待のもとに生じたものであり、自習が行われている部屋で何がどのように行われるのかについて明示的に指示されているわけではなかった。このような中で実習生たちは屋号という、実習地の聞き取りで得た、実習地の人

びとが生活に用いている一つの資源について話し続けており、TW が会話に参入してきた時もそれをやめることはなく、TW に説明をするというあえて「提示する」ことを行っていた。このような振る舞いからは、ここでのやり取りを雑談の参加者たち自身は実習に無関係なおしゃべりとしては捉えておらず、教員の介入があった時にもそれを説明することができる、この場で行うことが適切なものとして理解していたことが示唆される。屋号は実習地の聞き取りで得た、実習地の人びとが生活に用いている資源であり、実習生たちにとって何らかの議論の価値のあるものとして扱われていたとしても不思議はない。

一方でこの屋号に関するやり取りが、いわゆるおしゃべり、雑談として扱われるような性質のものであったことが、TW の「ちゃんとした姿勢(抜粋 6-2, 5,6 行目)」と対比される「くだけた雰囲気(抜粋 6-2, 12 行目)」という叙述を受けてはじめて公然化されている。つまりここで行われていた活動は進行しているその時、参加している学生本人たちにとってはこの場で行うことが適切なものであったのに対し、6.4 節で見た活動の交渉の中で、それが「ちゃんとした姿勢」ではないものとして TW に扱われたことが明らかになっている。

明確な境界を形成するやり方、例えばミーティングの開始を宣言したり、実習生が雑談を即座に取り止めたりすることが選択できたにもかかわらず、それが行われず、活動の境界の形成が込み入ったやり方として現れていることは、この場で何を行うことが適切であるのかが明確に定められていないという実習の文脈が影響していると考えられる。

また 6.5 節で見たミーティングの終了にも、ここがどのような場であるのかが不明確であることへの対処が見られる。ミーティングの終了後、参加者たちはすぐにその場を去ることもできる中で、しばらくの間席に留まり、互いにモニターし合える状況を維持している。自身に関係する活動が終了し、その後も起こらないことが明らかであれば、その後に行われる活動の内容に注意を払う必要はないと考えられる。そのため参加者たちは、ミーティング後自身に関係する活動が行われる可能性に志向しているといえる。

ここまで見てきた活動の境界形成の過程には、以上のような学外実習というフィールドの性質が影響していると考えられる。最後に 4 章で見てきた類似の制度的場面、実習反省会との違いから、本章で見たミーティングの制度的場面における位置付けについて触れておきたい。

両場面は順番交替システムに制約が加えられるという点、また実習生が教員に報告を行い教員が実習生に助言を与えるなどといったような、参加者の間に明確な役割の違いが見出せるという点において類似している。またその場面で達成されるべき目的が「質問などの確認事項を確認する(「学外実習」、本章)」、「教壇実習について意見を交換し合う(「実習

反省会」, 4章) といった、何をどこまで行えば十分であるのかが見出しにくい抽象的なものであることも共通している。

異なるのは、会話の組み立てに構造が見出せるか否かという点である。反省会は、参与者全員が順に意見を述べていき、さらにそれを三コマの授業に対して繰り返すという明確な構造を持っている。この構造は全ての参与者が意見を述べるよう方向付け、構造に沿って発話が終えられた時を十分な意見交換として扱うことによって、抽象的であるはずの反省会の目的達成を具体的に可視化するものとして働いていた。一方本章で見たミーティングは、そもそもこの場で行うのかさえ不確定であるという曖昧な状況に生じ、その結果内部で何がどのような順序で行われるべきなのかについても構造立てられていなかった。そのためミーティングの進行や実施自体について交渉が必要とされている。参与者たちがここでのミーティングの構造にある期待を利用できないこと、またミーティングの前後にある活動といずれを優先するべきかという期待も利用できないことによって、構造の一部である開始や終了のような境界を担う部分も、不安定なものとして現れていたと考えられる。

6.7. おわりに

以下ではまず、6.4 節、6.5 節で行ってきた活動の境界に対する観察をまとめる。そしてこれらの観察のもとになった、本研究が活動の境界を捉える視点について、またこのことが会話研究の展開にどのように繋がり得るかについて述べる。また最後に本章の観察に関する課題について指摘する。

6.7.1. 日常生活に生じる活動の境界の可能性

6.4 節および 6.5 節の観察からは第一に、一点ではなく時間幅を持って生じる境界があり得ることを見た。ある時点が遡って活動の開始として扱われる(6.4 節)、あるいは当該活動の終了後、当該活動ではない行為の積み重ねによって終了が確実なものとなる(6.5 節)といったような、当該活動に属する行為が行われているその瞬間にではなく、後になって活動の開始や終了が確定的なものになるような境界のあり方が存在する。第二に、当該活動の外側、隣接する活動を参照した開始や終了が観察される。後続の活動の開始によって現行の活動の終了が枠付けられること(6.4 節)、また現行の活動の終了に際し、後続の活動の開始の提示を用いること(6.5 節)から、会話や活動がその内部で完結した開始や終了の組織を持つものばかりではないことがいえる。

本研究では日常生活場面に生じる活動の開始や終了について、その一つのあり方を指摘

することを試みた。一例ではあるが本章で扱った事例における開始や終了の観察から、当該相互行為を行っているその瞬間には不確定な形で生じている境界が存在することを示した。活動の境界は、参与者相互の調整によりその成立を保留し遅らせることができるだけでなく(Schegloff & Sacks1973; Heath1986)、既に生じた境界が後になって確定されるようなあり方もあるといえるのではないだろうか。これは電話会話の終結が、回線を切ってしまった後再び話すことができないというような、取り返しの付かないものとして生じるのとは異なるあり方であり、互いに観察し合える環境が継続する中で活動の境界が生じていることと結びついている。そして私たちは今回見たような境界をも日常生活で多く体験していることが予想される。

6.7.2. 日常生活を構成する成分としての会話

本研究で活動の境界という語を用いたのは、当該会話が生じている箇所だけでなく、その外側に生じている、会話に限らない他の活動との接点として、会話の開始や終了を捉えることができないかという考えによる。高梨(2008)は会話を分析する視点として、話し手や受け手を中心に据え、そこから外側へと視点を広げていくという方向の分析「会話の内側からの分析」に対し、「会話の外側からの分析」という視点を提示している。後者は会話を相互行為のうち的一部分として捉えるもので、会話以外の活動が同時に生じている状況や、会話の生じていない状況から生じている状況へ、反対に生じている状況から生じていない状況へとといった会話の開始や終了の分析を推し進める視点であるといえる。様々な活動を広く視野に入れその中に会話を位置付けて観察していくことを通して、活動の連なりからなる日常生活の営みの中で、会話がどのような成分を担っているのかに迫ることが可能になると考えられる。

6.7.3. 残された課題

本章の主な目的は、日常生活に生じる会話、あるいは活動の境界にどのような性質のものがあり得るのかについて、明確な一点で生じるのではない境界の存在を指摘することにあつた。しかし本章が扱った資料については、まだ多くの観察すべき点、議論の必要がある点が残されている。今後扱っていく必要があるこれらの点についてまとめておきたい。

まず本章が活動の境界として扱ったのは、主に発話という明示的に示された相互行為上の振る舞いから認められる箇所である。この際境界に対する参与者の志向は全体が一様のものであるかのように扱ってきた。しかし実際には、必ずしも場面を構成する全員の志向

が同時に変化しているとは限らない。つまり一人一人にとっての活動の境界とその場を構成する活動の境界とが、必ずしも一致してはいないと考えられる。これは一本の回線を参加者が共有し、同時に切るという電話会話の終結とは大きく異なる点である。また単一のチャンネルを一点で切断するのではなく、複数のチャンネルが扱われ、その接触と切断とを行き来できることは、本章で見たゆるやかな境界を生んでいる要因でもあると考えられる。

さらには、個人内でも複数のモダリティ要素が同じものに対して同時に志向を向けているわけではない。Schegloff(1998)が指摘する身体のひねりなどはその一つの現れであり、身体の異なる箇所が示す志向が分岐する状態を捉えたものである。このような細かな志向は、私たちが相互行為をどのように組織するのかについて知るために重要な要素であり、これらを丁寧に拾い上げていくことは活動の境界の分析に際しても重要である。ただし今回本章が指摘した、活動の境界が一点で明確に生じるものに限らないことや、前後の活動との関係の中で組織されるといったあり方自体は、個人の微細な振る舞いに焦点を当てた際にも見出されることが予想される。

7章 今後の会話終結研究に向けて

7.1. はじめに

本章では5章までの観察に加え、6章の共在状況における活動の境界を扱うことで、既存の会話終結研究にどのような知見を提示することができたのかについて述べる。このことを本研究の目的である次の二点と照らし合わせながら見ていく。

I 会話終結の記述

日常生活の中で体験されている会話終結がどのようになされているのかについて、周辺の場面も含め記述を行い、先行研究の分析対象の偏りを埋める。

II 活動の連続の中に位置付けた会話および会話終結の考察

会話が活動の連続の中に生じているという視点を取り入れることによって、会話および会話終結に関する新たな知見を得る。

7.2節では一点目の目的、会話終結の記述の偏りを埋めるという観点からの整理を行う。ここでは本研究でどのような資料を扱ってきたのか、それによってどういった分析対象の偏りを埋めることができたかについて述べる。

そして7.3節では、活動の連続という観点と会話終結の関係について述べる。この観点からの観察は主に6章で行ってきたが、本章ではそれ以外の会話場面に活動の連続という観点がどのように関わっているのかについて指摘する。

7.2. 会話終結場面の整理

本研究では会話終結の記述にあった偏りをどの程度埋めることができたのだろうか。本節ではこれを確認するために、終結のなされ方への関係が予想される観点「参与者同士の接触の切断のあり方」(7.2.1節)と「会話の活動としての性質」(7.2.2節)を取り上げ、扱った会話場면을整理しその多様性を確認する。

7.2.1. 参与者同士の接触の切断のあり方

会話終結の分析で主に対象となってきた場面は、終結した時に参与者同士の接触が切断

される場面である。例えば電話会話の場合は参与者間にある唯一の相互行為チャンネルである音声チャンネルが、電話回線の切断によって切られることが終結の際に漏れ無く観察される。そのため Clark & French(1981)のように、電話会話の終結の手続きの一つにこの回線の切断を含めているものもある。また診療場面であれば、終結の際に医者のもとを患者が去っていくことで、相互行為に用いられたチャンネルの切断が生じている(Heath1986)。本研究で見た立ち話なども同様である。

加えて本研究ではこのような参与者同士の接触の切断が生じない終結も扱ってきた。4章で見た「実習反省会」や6章で見た「学外実習」の場面がこれに相当する。

接触の切断の有無に加えて、さらにその切断の生じ方には少なくとも二通りのあり方が考えられる(表 7-1)。

表 7-1 接触の切断のあり方から見た本研究の観察対象(接触の切断有り)

接触の 切断	有	接触の切断のあり方	
		相互行為チャンネルが一斉に切断される	相互行為チャンネルが時間幅を持って切断される
		電話会話	ハナメシ、楽譜、シューズ、廊下、メール

一つはある一点で相互行為に用いられるチャンネルが一斉に切断されるものである。これは電話会話に典型的な特徴である。もう一つは複数のチャンネルが一点ではなく時間幅を持って切断されるものである。本研究で見た立ち話の場面はここに位置付けられる。相手から視線を逸らすことによって生じる視覚チャンネルの切断、および身体が声の届かない位置へ離れていくことによって生じる音声チャンネルの切断は、いずれも徐々に生じる。またこの二つのチャンネルの切断は同時に生じるわけではないという特徴がある。

接触の切断が一点で生じるものもそうではないものも、どちらも明確な開始と終了で区切られた会話であるという特徴づけがなされ、単一の会話(a single conversation: Schegloff & Sacks1973; Sacks, Schegloff & Jefferson1974)として想定されてきたものだが、この区切られ方は異なっており、終結の行われ方に影響していると考えられる。例えば日本語での電話会話の特徴として挙げられる繰り返し表現の多さ(岡本 1991)は、3章で見た立ち話の会話の終結にはほとんど観察されなかった。これはそこでの終結が接触の切断を行う一点を探るといって課題に取り組むものなのかそうではないのかという違いに関わる特徴であると予想される。

一方の接触の切断が生じない会話終結場面では、いずれも共在状況が維持される。この

状況における接触の切断が生じる位置に相当する箇所を、本研究では活動同士の境界として扱ってきた。そしてこの活動の境界のあり方にも多様性が見出せる(表 7-2)。

表 7-2 活動の境界のあり方から見た本研究の観察対象(接触の切断無し)

接触の 切断	無	境界のあり方	
		確定的(=終結後相互モニターが不要)	不確定的(=終結後相互モニターが必要)
		実習反省会	学外実習

一つは 6 章で見てきた「学外実習」の資料に観察されたような境界のあり方である。ここで行われていた活動、ミーティング形式での指導の終結部分に生じた境界は不確定なものとして生じていた。ミーティングの終了後も参加者たちは互いに注意を払い合い、続く活動が何なのかモニターし合った後に続く活動を開始している。そのためここでの境界の形成および自身の振る舞いの選択には、他者の振る舞いをモニターし得られた情報が用いられているといえる。

もう一つはこれとは対照的に、実習反省会の終結のように境界が確定的なものとして生じるものである。反省会後も共在状況が継続するため参加者同士は互いにモニターし合える環境にはあるが、反省会の最後のやり取りである最終交換の直後の参加者には席を立つなどといった他の活動に移行する様子が観察される。そのため終結成立直後の時点では、既に反省会終結と新たな活動の開始という境界が見出されているといえる。

以上では接触の切断の有無と、さらにその切断あるいは活動の境界のあり方という点から、本研究の扱った会話終結の多様性について確認した。私たちが日常生活で体験する会話は対面で行われるものがその大部分を占める。電話会話は資料の収集しやすさや開始および終結の明確さから、会話終結研究の中心的な分析対象であったが、このような接触を切断するための一点を周到に探る終結は、会話終結の典型例ではなくその一部分に位置付けられるものであるといえる。この分析対象の偏りを埋めるものとして、本研究では接触の切断の生じ方が異なる会話終結を扱った。それに加えて接触の切断が生じない、相互行為自体は継続する中で生じた会話終結も分析対象に含めたことが本研究の特徴の一つとして挙げられる。

7.2.2. 会話の活動としての性質

もう一つの観点として、当該会話の日常生活の中で担う活動としての性質の側面から、

分析対象の多様性について確認してみる。先行研究では主に会話終結が生じている箇所における振る舞い、終結の際の言語的振る舞いについて注意が向けられてきた。対する本研究は、当該会話全体の組織において、当該会話を何として行っているのかという、日常生活を担う活動の一つとしての特徴に注目し会話終結を捉えることを試みた。ここでは5章の議論を軸に振り返る。

本研究では、一口に会話といっても、どのような活動として行われているのかについて異なる性格を持つものを扱った。5章では言語活動の性質として、大きく以下の三分類を提示した。一つ目は何か具体的な目的やその達成のための段取りについて期待があり、それをこなすことが目指される活動である。このための手段として会話は位置付けられており、実習反省会や商品の売り場を尋ねる場面(「シューズ」)を扱った。二つ目は会話することそれ自体が目的として位置付けられる、いわゆる言語コミュニケーション活動である。偶然あった知人との立ち話(「ハナメシ」)や待ち合わせでの立ち話(「楽譜」)を取り上げた。三つ目に挙げたのは、言語活動ではない活動である。この活動の構造の中に収まる形で同時に行われている会話として、移動しながらの会話(「廊下」)を取り上げた。

そしてこれらの場面における会話終結が、会話の位置付けの異なりに応じて組織されていることを見てきた。当該の会話という言語活動が日常生活の中で何を担う活動なのか、その活動としての意味に合わせて私たちは会話全体やその最後の部分である終結を組み立てている。このことは、会話を人びとの言語使用を知るための対象としてだけでなく、日常生活を構成する活動の一つとして捉えることによって見えてきたことである。

もう一点、会話の活動としての性質に注目することによって可能になったのは、接触の切断によって切り出されるのではない終結である。この終結は、参加者がその会話をどのような活動として志向しているのか、つまり活動の性質の異なりに注目することによって切り出すことができるようになったものである。このような終結を扱った実際の分析例を示したこと、またそれによってこれまで注意を向けられてこなかった終結の性質を指摘したことは、今後の終結研究の視野を広げることに繋がり得ると考えられる。

7.2.3. 分析対象の偏りを埋めるために

分析対象の偏りを埋め広範な会話終結を扱うために参照できる観点として、ここでは「参加者同士の接触の切断のあり方(7.2.1 節)」と「会話の活動としての性質(7.2.2 節)」の二つを取り上げた。

今後さらに分析対象の偏りを埋めていくにあたり、どのような観点が必要となるだろう

か。本研究の観察からは、会話を終結させるに際し当該会話の活動としての性質が重要な情報を有していることが示唆された。例えば3章で扱った立ち話(「ハナメシ」、「楽譜」)は、単純に立って行われる会話であるというだけでなく、「立ち話」という活動として、適当な話題を適当な時間行い、適度なコミュニケーションを達成することが期待されている。スポーツ用品店での会話(「シューズ」)は同様に立って行われた会話ではあるものの、決して「立ち話」としては捉えられず、コミュニケーションの達成に向けた終結も行われていないことを見てきた。

ここからは、会話が日常生活で担う活動の観点から、この多様性を考慮に入れた分析対象の選定を行うことが今後の終結研究を発展させる可能性として指摘できる。日常生活の中でどのような活動を体験しているのかに関する目録のようなものは管見の限りないが、言語行動を含む活動についてはいくつかのモデルが提示されている(ネウストプニー1979ほか)。またその重要な要素を担う「場面」に関しても、構成要素について整理がなされており(畠 1983)、このような知見を参考にすることができる。これらの先行研究の知見を組み合わせ整理していくことが、会話終結の行われ方の多様性を保証する分析対象の選定に役立つと考えられる。

7.3. 会話終結と活動の連続という視点

続いて本節では本研究の二つ目の目的に関係する、活動の連続という視点についてまとめる。この視点を軸に観察を行ったのは5章の一部および6章である。ここでの観察と、その他の場面の特徴を見比べてみることを通して、会話および会話終結において活動の連続という視点がどのように現れているのか、両者の関係について指摘する。

7.3.1. 制度的場面における会話に見られる活動の連続

まずは制度的場面における会話と活動の連続との関係について述べる。取り上げるのは「学外実習」の一部である「ミーティング形式での指導」(6章)と「実習反省会」(4章)の二つで、いずれも教員が進行を取り仕切り実習の課題達成のために意見交換をする、いわゆるミーティングといえるような活動が行われていた。ここでの活動の境界の特徴は活動の連続とどのような関係にあるだろうか。

6章で見たように、ミーティング形式での指導の開始と先行する活動「雑談」や「自習」の終了との間にある境界では、そこでどのような活動を行うかという交渉がやり取りの焦点として取り上げられている(抜粋 7-1, 5-21 行目)。ここでの相互行為はそれ以前の活動に

属しているのか、以降の活動に属しているのかが明確ではないものとして生じている。

【抜粋 7-1_学外実習(自習・雑談からミーティング形式での指導への移行)】

- 01 SB: それ屋号だと思ってたから,家にも付くのおかしっ>みたいな.<h
 02 (0.4)
 03 SD: まあ家っ° て>のもあるんじゃない.<° =
 04 SA: =hh い(h)え(h)につ(h)付¥[>きうる<よね¥
 05 TW: [あの::(.)なんというか-あの::(.)ちゃ-ちゃんとした
 06 姿勢で:(.)あの:(0.4)確認したい(0.6)し h-すべきこととか>なんか<そういうのあ
 07 りますか?
 08 S: [° う::ん°
 09 S: [え::
 10 TW: 質問とか.
 11 (1.6)
 12 TW: あの::(0.8)もうちょっとくだけた雰囲気になってもいいのか.
 13 TW: まだ[なつてはいけないのか.
 14 TX: [HAHAHAHA
 15 SB: hhh
 16 SE: あ:::.
 17 SC: [あ:なるほどなるほど:.
 18 SF: [え::.
 19 SD: じゃあ一旦ちょっと厳しくいきましょう.
 20 S: [hhhhh
 21 SB: [あっ(h)そ(h)うな(h)の?hhhh
 22 ((中略 10 秒 沈黙、S 同士で質問があるか小声で確認し合う、考えていること
 23 の表示(資料を見る「うーん」という発話)))
 24 TY: 私からちょっと聞いてもいいですか?((挙手しながら))

一方の「実習反省会」の開始では開始の宣言が用いられている。それ以前で行われていた雑談との境界は一点で明確に生じ、実習反省会と区別されている。

【抜粋 7-2_反省会(X6)】

01 A4:→ じゃあ:はじめましょつかね::.

02 (1.0)

03 A4: っと最初:B さん[ですか?

04 B: [はい.

05 B: はい.

【抜粋 7-3_反省会(X1)】

01 A1:→ ° はい° じゃあはじめましょうか:.

02 (0.8)

03 A1: え:っと例によって:じゃあ(.)まず(.)教師::の方からえ::1 コマ目からでいい

04 ですか?((会の流れについて説明))

二場面の境界のあり方には、前後の活動と当該活動との関係が現れていると考えられる。抜粋 7-1 で挙げた学外実習におけるミーティングの開始では、先に行われていた雑談という活動とミーティングのいずれを優先すべきかを交渉することが行われていた。これとの比較から抜粋 7-2 や抜粋 7-3 の実習反省会の開始を見てみると、隣接する活動同士の優先関係が前提になっていることが予想される。実習反省会の開始で用いられている開始の宣言という方法には、実習反省会がそれ以前に行われていた活動よりも優先されるものであるという期待が示されており、当該活動の開始に際しては、その活動の実施に対する期待の有無が、前の活動を考慮に入れる必要性の有無を特徴付けていると考えられる。ミーティングといえる活動が行われているという点で類似する両場面ではあるが、活動の境界は異なる形で現れており、ここでは活動としての性質に加え、隣接し合う前後の活動との関係が参照されていると考えられる。

7.3.2. 立ち話に見られる活動の連続

もう一つ、二つの立ち話「メール」(5章)と「ハナメシ」(3章)の事例を見比べてみたい。両場面は移動の途中で思いがけず相手に出会い、会話が起これという特徴が共通している。一方で異なる特徴は以下の点であった。メールの場面では、細かなやり取りを諦める発話や同意を取り付けるに際し一方的に宣言するやり方が用いられているなど、やり取りに十分な時間をかけることができない様子が観察された。そしてやり取りが終わる前に、移動

という会話の次に控えている活動が開始されていた。つまり会話の後に控えている活動の圧迫を受けながら、会話は開始し終結している。対する「ハナメシ」では、互いの近況を尋ね合い、互いの共通の知人そして共通の元職場について情報をやり取りするという、久々に出くわした知人同士の立ち話という活動に十分なやり取りを交わしていた。

このことから、「ハナメシ」に見られたような立ち話という活動に見合った会話の組み立てを実現するために、現行の活動が他の活動よりも優先できる状況が確保されていることが前提となっていることが分かる。また立ち話という活動自体は、事前に約束を取り付けて行うようなものではなく、日常生活の様々な活動の間に挟み込まれるもの、あるいは3章で見た「楽譜」の事例のように別の目的のために設けた相互行為の機会に寄生するように生じるものである。もし会話をするだけのために相互行為の機会を取り付けておくのであれば、立ち話ではない別の形での会話、お茶などといった活動として行われると予想される。そのためこの立ち話という活動の性格自体も、活動の連続の中に挟み込まれた小さな相互行為の機会という生起環境に特徴づけられたものであるといえる。そしてこのような機会に適切な会話内の組織を、私たちは終結に際し参照していると考えられる。

以上では会話終結と活動の連続という視点の関係について、類似の会話場面の比較から見てきた。会話の終結あるいは開始といった活動同士の境界部分が、隣接する活動との関係を参照し合い組織されること(7.3.1 節)、また当該活動として適当なやり取りがどのようなものなのかは、日常生活の活動の連続の中でどのようにその活動が生じるものなのかに特徴づけられていること(7.3.2 節)を指摘した。

7.3.3. 活動の連続という視点の可能性

本研究の活動の連続から会話を捉えるという試みは、会話と会話の間にある関係やこれらの相互行為が日常生活の中にどのように位置付けられるのかについて知るための足掛かりとして位置付けられる。このような関心は現在の相互行為研究において、さほど関心が向けられていないものの一つである。しかし、昨今の研究に利用できる収録機材や収録資料を扱う技術の発達からは、今後扱うことのできる分析資料のますますの広がりが予想される。日常生活の様々な活動を捉えた、一続きの資料も利用可能になっていくに違いない。このような資料に対し分析の目が向けられることで、日常生活を構成する相互行為について明らかにされていくことが予想される。活動の連続から会話を捉えるという視点は、この分析の手がかりの一つになり得ると考えられる。会話の内側だけでなく、外側、つまり前後に生じる活動との関係の中で会話がどのように組織されているのかについてを分析の

視野に入れることによって、日常生活の一部としての会話の姿を明らかにしていくことが、今後の会話研究の発展の可能性として指摘できる。

7.4. おわりに

以上では 6 章までで観察してきた会話終結の観察を本研究の目的と対応付けながら振り返った。7.2.1 節と 7.2.2 節では、本研究が会話終結研究の分析対象の偏りをどの程度埋めることができたのか、その多様性を確認するための観点として「参与者同士の接触の切断のあり方」および「会話の活動としての性質」を取り上げ、扱ってきた会話終結を振り返った。また 7.3.1 節および 7.3.2 節では、会話を活動の連続の中で捉えるという視点がどのように会話終結に関わっているのかについて、事例同士を比べながら論じた。そして 7.2.3 節と 7.3.3 節では、本研究の二つの目的を今後の会話研究にどのように繋げることができるのかについて展望を述べた。

8章 おわりに

8.1. 本章の概要

本章では、ここまで各章で論じてきたことをまとめ(8.2 節)、これらが会話研究やその他の領域の発展にどのように関わり得るかについて述べる(8.3 節)。最後に本研究に残された課題と今後の展望を述べ(8.4 節)、本研究のまとめとする。

8.2. 各章のまとめ

本研究が目的としてきたのは以下の二点である。

I 会話終結の記述

日常生活の中で体験されている会話終結がどのようになされているのかについて、周辺的な場面も含め記述を行い、先行研究の分析対象の偏りを埋める。

II 活動の連続の中に位置付けた会話および会話終結の考察

会話が活動の連続の中に生じているという視点を取り入れることによって、会話および会話終結に関する新たな知見を得る。

8.2.1. 会話終結の記述

日常生活で体験している会話終結場面について知るために、日常会話場面と何らかの制度のもとに相互行為が行われる制度的場面の両者を観察し記述した。

まず 3 章では、日常会話の終結がどのように達成されているのかについて、対面で行われる日常会話の中心例の一つである立ち話を取り上げ、終結における振る舞いを記述した。まずは記述の手がかりとして、会話終結の際に繰り返し観察される発話による手続き「終結部」を参照しながら、終結の直前における発話連鎖の特徴について記述を行った。手続きの一つである、会話を終結させることに対する意向を確認する手続き「前終結」が先行研究の指摘する形では観察されないことから、終結直前よりも前に会話終結に向けた振る舞いがなされていると仮定し、会話全体に見られる組織について観察を行った。そして、当該の相互行為の機会に中心的話題との対比の中で、最後になされた話題の性質が会話を終結させることが適当であることを示している可能性について指摘し、終結の合意を形成するための組み立てが、会話の全体を通した組織においてなされていることを見た。

4章では、制度的場面の特徴を持つ、実習反省会の場面について観察を行った。3章と同様の観点から終結の手続きについて見てみると、会話を終結させるか否かの交渉に相当する部分には特徴的なやり取りが見られた。ここには二つの型があり、一つには話すことがまだ残されているのか否かを言語表現を用いて明示的に確認するもの、もう一つには反対にこの交渉の機会が全く示されないものが見出された。後者のような終結が可能であることから、終結の直前における参与者間の細かな交渉は必要とされず、それ以前の部分で終結が適切であることが何らかの形で示されていると考えられる。これを担う資源として取り上げたのは以下の二つである。一つは「何かいい忘れた人はいませんか」といった発話や、談話標識、沈黙、当該発話が扱っている話題を示す表現などといった、現在の発話がどのような局面におけるものなのかを示す発話中の資源「構造化の手がかり」である。もう一つは、決まった順序で発話の機会が参与者に割り振られることが、当日行われた三コマの授業それぞれに対し繰り返されるといった「実習反省会の構造」である。参与者はこの二つを対応付けることによって現在の発話の位置を知ることができ、会が進行していること、その結果会が終結に向かっていることを、会の進行中も要所で確認することができるようになっていていると考えられる。

5章では、この二つの章で用いてきた日常会話、制度的場面における会話という区分を取り外し、当該会話の活動としての性質に注目した整理を行った。考察に際して、当該場面における主要な活動が会話かそれ以外の活動なのか、および会話が当該場面において目的達成の手段を担うものなのか交感、すなわちコミュニケーションすること自体を担うものなのかという二つの点から分析対象を区分し、各区分の特徴を指摘した。

まず会話が場面の主要な活動であり、かつ具体的な目的を達成するための手段として生じているという特徴を持つ場面では、当該会話が生じるきっかけとなった目的が達成されるのと同時に終結が生じていた。一方で会話がこの場面の主要な活動であるという点では共通しているが、手段ではなく交感を担っている場面では、コミュニケーションの充足に応じた会話全体および終結の組織が見られた。そして当該場面の主要な目的が会話以外の活動である場面では、当該場面の会話のやり取り自体を参照することでは終結を切り出すきっかけは見出せない。ここでは会話と同時に行われる主要な活動を参照し、その目的達成と同時に別れの挨拶がなされ会話が終結する様子が観察された。

三つの区分それぞれの終結は、当該場面の主要な活動の目的達成に応じたタイミングで生じているという点が共通しており、当該場面が何を行う機会として生じているのかということ、およびそれに対し会話がどのような位置付けを担うものであるのかということが、

会話終結の組み立てに際し参照されていることを指摘した。

8.2.2. 活動の連続という視点

しかしながら、会話終結の際に参照されるものは会話あるいは同時に行われている活動のみではない。その例として5章の最後では、場所の移動の最中に交わされた偶然の立ち話を挙げた。ここでは移動という活動の制約を受け、その間に差し込まれた一つの立ち話が慌ただしく終結に至る様子を見た。ここから会話終結の組織に際し前後で行われる活動を参照するという視点を導入する必要があることを示した。

そこで前後の活動との関係から終結を捉えようとしたのが、6章の共在状況が継続する中に生じた活動の終了および開始部分、つまり活動の境界部分の観察である。会話をはじめとした活動の境界の可能性として、一点ではなく時間幅を持って生じる境界があり得ること、また隣接して生じる別の活動の開始や終結に依存し組織される境界があり得ることを指摘した。電話会話のように開始と終了が一点で見出され、当該会話がその内部で完結した組織を持つものが会話終結の典型であるかのように思われがちであるが、互いの身体がともにある空間で行われる相互行為ではこれとは異なる境界のあり方が存在し、このような境界をも私たちは日常で多く体験していると予想される。

最後に7章では、前章までの会話終結の観察を本研究の目的と対応付けながら振り返った。一つ目の目的、先行研究の分析対象の偏りを埋めることに関連して、本研究で扱った分析対象の多様性を「参与者同士の接触の切断のあり方」および「会話の活動としての性質」という二つの観点から確認した。そして二つ目の目的、活動の連続の中で会話を捉えることに関連して、この視点からの観察を行った5章「メール」の事例と6章「学外実習」の事例を、その他の事例と比較し、会話終結と活動の連続の関わりについてまとめた。最後に、これらの本研究の目的と成果をもとに、今後の会話および会話終結研究の展望について述べた。

8.3. 会話研究および他の領域への貢献

会話研究や他の領域における会話終結の位置付けについては2章で触れたとおりである。本節では再びその点に立ち返り、これらの領域に対して本研究が示唆することについて述べる。

一点目として、日本語教育の領域との関係について取り上げる。会話の終結という部分が人びとのコミュニケーションにおいて重要な意味を持つものとして捉えられていること

を先に述べた。これは日本語母語話者にとってだけでなく、当然日本語学習者にとっても同様のことがいえる。学習者が日常生活で体験する活動は様々な規範や期待の束からなっていると捉えることができ、私たちはそれぞれの活動の言語や社会文化的な特徴などを思い浮かべることが可能であり、またそこでどのように振る舞うべきかを知っている(村岡2003)。このような潜在的な規範や期待は、会話をどのように進行するか、そしてどのように終結するのかについても利用されているものである。坂本(2012)は、授業内でロールプレイを取り入れる際の重要な点として、場面設定を十分に練る必要があるとし、これを欠かすと適切な終結を組み立てることができないことを指摘している。本研究では会話の終結のあり方は、当該場面が何を行う場であるか、その会話はどのような活動として行われているのかに対して敏感に組み立てられていることを見てきたが、これは坂本の指摘と合致する。また会話教育のデザインに際し、村岡(2003)や中井(2012)などは、活動を、言語によって成り立つ「言語的アクティビティ」と、言語以外の実質活動のルールによって成り立つ「実質的アクティビティ」という二つに区別している。この区別は本研究が見てきた、終結のタイミングが会話の内部を参照していると考えられるものと、同時に生じている別の活動を参照しているものとの区別との対応からも支持できるものである。

これらの日本語教育における会話教育の視点と本研究の観察との関連性は、日常生活に生じる具体的な場면을母語話者がどのように組み立てているのかという情報が、学習者が具体的な活動を組織する際の手助けとなることを示唆している。潜在的な規範や期待をこれから獲得していく段階の学習者が、会話やその終結に際し何を参照し場を組み立てる必要があるのか、これに注意を向けるきっかけを提示する会話教育において、本研究が見てきた終結の組織に関する情報は応用することができると考えられる。

また本研究の6章では、会話の外側からの分析(高梨2008)の視点から隣接する活動に依存した会話の組織について見てきた。これは従来の会話研究の中心的な視点である、今行われている会話をそれ自体で完結したものとして捉える視点に対し、新たな視点、前後の活動との関係の中で会話を捉えることの有用性を示す一例として位置付けられる。そしてこの視点の前提である会話をその他多くの活動の一つとして捉えることは、日常生活を構成する一部として会話が担うものについて知る契機となると考えられる。

8.4. 課題と展望

以下では本研究で扱うことができなかつた議論を要する問題について指摘し、今後考慮すべき点について述べる。

第一に相互行為の際に用いられる資源に関する問題として、本研究では音声的資源、特に発話を中心的な分析の焦点に据えており、視覚的資源についてわずかしか触れることができなかった点が挙げられる。これは本研究の収録環境の性質上、視覚的情報が利用できない、あるいは非常に利用しにくいものであったという理由が一つにある。そしてもう一つより大きな理由として、多くある視覚的情報のいずれが当該場面で有意義な資源となっているのか、特に多人数会話においてはその候補が余りに多く、これを適切に拾うための分析の視点が現在整理できていないという理由が挙げられる。

発話に加え当該相互行為に参加する人びとの身体や、それが行われる空間といった様々な情報を分析に組み込み、それらの有機的な関係について議論するマルチモーダル分析と称した研究が近年盛んに行われている(細馬ほか 2011 ほか)。本研究で扱った例えば立ち話の終結(3章)についていえば、会話中維持されていた身体の配置における F 陣形(F-formation: Kendon 1990 ほか)は、会話の終結に際して解放されるという現象が連動して生じていることが強く予想される。同様に視線、表情といった資源も別れの達成に寄与していると考えられる。当該相互行為で行われていることを適切に捉えようとするならば、こういった発話以外の情報がどのように関わっているかについても観察し、記述に加えていく必要がある。

また一人の人間の志向は、複数のモダリティに必ずしも一貫して示されているとは限らない。そしてその中で発話は、一つの強い志向を示し得るモダリティである一方で、ある場面においては他のモダリティがより強い志向を表示していることも十分考えられる。これは例えば、一人の参加者が複数の活動に同時に関与しているマルチアクティビティと呼ばれる状況に生じ得る。5章で扱った場所の移動を行いながらの会話などもその一例であるが、この場面は会話と平行して生じている移動の構造に焦点を当てて記述を精緻化すべきものであると考えられる。以上のことから、今後の観察においては、本研究が観察の軸に据えていた発話という資源からその他の資源へ、また会話から活動へと分析の軸を移していく必要がある。

第二に、活動の境界の性質について知見を深めるためには、今後終結のみではなく開始に関する議論も扱っていく必要があると考えられる。終結が一点ではなく緩やかな時間幅を持って生じ得ることを本研究は指摘したが、これは開始についても同様のことが予想される。人間の挨拶行動について扱った Kendon & Ferber(1973)や、道を歩いている人に声を掛け、道案内を開始する状況を扱った Mondada(2009)は、いずれも参加者間の第一声が発話される以前の部分に関する身体的振る舞いを丁寧に記述している。ここで Mondada は

焦点の定まった相互行為の開始される前のフェーズを、前開始(pre-beginnings)として扱っている。また秋谷・川島・山崎ほか(2009)は、相互行為開始の前提として必要となる部分、相手の注意を獲得し利用可能性を確保するための一連の振る舞いについて観察しており、実際の会話として実現される前の段階で行われるこのような準備においても、一連の手続きが志向されていることが伺える。こういった発話以前の部分、準備に相当する部分と、終結あるいは終結後の部分をどのように捉え、関連付けることが活動の境界の性質として妥当なのかについて、会話および活動の境界を担う、開始と終結の双方に目を配りながら、現象の観察を進め、議論を整理していく必要がある。

参考文献

《日本語文献》

- 青柳にし紀(2001)「「はい」と「ええ」の意味・機能：音声、イントネーションの視点から」
信州大学留学生センター『信州大学留学生センター紀要』2, pp.23-34.
- 秋谷直矩・川島理恵・山崎敬一(2009)「ケア場面における参与役割の配分：話し手になることと受け手になること」日本認知科学会『認知科学』16(1), pp.78-90.
- 天野俊也(1992)「出会いと別れのあいさつ」『言語生活』363, pp.94-95. 筑摩書房.
- 伊藤明子・杉山ますよ・八若寿美子・藤井桂子(2001)「子供の電話会話における終結部の分析：成人との比較から」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』21, pp.45-57.
- 林美善(2001)「電話会話の終結部に現れる日韓の相違に関する一考察：日韓の20代の親しい友人同士の電話会話から」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』22, pp.78-91.
- 江口英子(2000)「制度的場面における相互行為の会話分析研究概観」言語文化学会『言語文化学会論集』14, pp.169-185.
- 大浜るい子(1997)「日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的考察」広島大学教育学部『広島大学教育学部紀要第二部』46, pp.159-167.
- 岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」日本語教育学会『日本語教育』72, pp.145-159.
- 岡本能里子(1991)「会話終結の談話分析」東京国際大学『東京国際大学論叢商学部編』44, pp.117-133.
- 岡本能里子・吉野文(1997)「電話会話における談話管理：日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析」国際交流基金『世界の日本語教育日本語教育論集』7, pp.45-60.
- 小熊貞子・馬場真知子・広田妙子・越前谷明子(2004)「会話の終結部に見られる非言語行動」東京学芸大学『多摩留学生センター教育研究論集』4, pp.33-38.
- 尾崎明人(2003)「接触会話の研究から会話の教育へ：電話会話の終結部に見られるコミュニケーション問題を中心に」宮崎里司・マリオット,ヘレン(編)『接触場面と日本語教育：ネウストプニーのインパクト』, pp.69-84. 明治書院.

- 小野寺典子(1992)「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』11(10), pp.26-38. 明治書院.
- 串田秀也(1997)「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰(編)『コミュニケーションの自然誌』, pp.73-212. 新曜社.
- 熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11(10), pp.14-25. 明治書院.
- 見城武秀(2006)「「他者がいる」状況下での電話」山崎敬一(編)『モバイルコミュニケーション：携帯電話の会話分析』, pp.145-164. 大修館書店.
- 小磯花絵(2015)「均衡性を考慮した大規模日常会話コーパスの構築に向けて」公開シンポジウム「ことば・認知・インタラクション3」配布資料.
- 小磯花絵・石本祐一・菊池英明・坊農真弓・坂井田瑠衣・渡部涼子・田中弥生・伝康晴(2015)「大規模日常会話コーパスの構築に向けた取り組み：会話収録法を中心に」人工知能学会『第74回言語・音声理解と対話処理研究会資料』, pp.37-42.
- 国立国語研究所(1971)『待遇表現の実態：松江 24 時間調査資料から(国立国語研究所報告41)』, 秀英出版.
- 坂本恵(2012)「「敬意コミュニケーション」教育の試み」早稲田大学大学院日本語教育研究科『早稲田日本語教育学』11, pp.21-35.
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』, せりか書房.
- 佐藤亮一(編)(1992)「わかれのあいさつ」『言語生活』363, pp.50-53. 筑摩書房.
- 徐孟鈴(2006)「依頼会話の「終結部」の考察：日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイデータを比較して」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻『言葉と文化』7, pp.67-84.
- 高木智世(2005)「社会的実践としての日常会話：電話会話の終了に関わるプラクティスを例に」筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻『論叢現代文化・公共政策』1, pp.143-175.
- 高梨克也(2008)「会話構造理解のための分析単位：参与構造」人工知能学会『人工知能学会誌』23(4), pp.538-544.
- 田中望(1982)「「別れ」の言語行動様式」『言語生活』363, pp.38-46. 筑摩書房.
- 張承姫(2014)「初対面における「ほめ」と話題展開について」人工知能学会『第71回言語・音声理解と対話処理研究会資料』, pp.17-22.
- 陳明涓(2000)「災害に対する「被災確認の電話」の日中対照分析：「開始部」と「終結部」

- を中心に」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』19, pp.38-48.
- 鄧開蜀(2002)「日・中電話会話終結部に関する一考察：「好」、「那」、「就这样」を中心に」千葉大学文学部日本文化学会『千葉大学日本文化論叢』3, pp.13-28.
- 中井陽子(2012)『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』, ひつじ書房.
- 西阪仰(2008)『分散する身体：エスノメソドロジイ的相互行為分析の展開』, 勁草書房.
- 日本国際教育支援協会(2012)『平成 23 年度日本語教育能力検定試験試験問題』, 凡人社.
- ネウストプニー,J.V.(1979)「言語行動のモデル」南不二男(編)『言語と行動(講座言語第 3 巻)』, pp.33-66. 大修館書店.
- 野波幸希(2011)「会話終了場面におけるいとまごいの場の検討：日本語第一言語話者同士の対面会話の分析を通して」名古屋大学国際開発研究科国際コミュニケーション専攻『ククロス：国際コミュニケーション論集』8, pp.89-103.
- 畠弘巳(1983)「場面とことば」国語学会『国語学』133, pp.55-68.
- 服部明子(2011)「中国人ビジネス関係者の電話会話終結部の分析：クレーム場面のロールプレイ会話を通して」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』41, pp.30-39.
- 馬場眞知子・増田真理子・小熊貞子・広田妙子・木原郁子・越前谷明子(2000)「会話の終結部における非言語行動の調査」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会誌』7(2), pp.40-41.
- 平本毅(2011)「話題アイテムの掘み出し」日本社会学理論学会『現代社会学理論研究』5, pp.101-119.
- 平本毅・高梨克也(2012)「「何か質問はありますか」という問いかけを通じたミーティングの説明場面の構造化」社会言語科学会『社会言語科学会第 29 回大会発表論文集』, pp.180-183.
- 藤原智栄美(1998)「電話会話における終結部構造の日米比較」大阪大学留学生センター『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』2, pp.1-15.
- 細馬宏通・片岡邦好・村井潤一郎・岡田みさを(2011)「特集相互作用のマルチモーダル分析」社会言語科学会『社会言語科学』14(1), pp.1-4.
- 南不二男(1965)「この人の敬語行動：松江 24 時間調査から」『言語生活』162, pp.28-38. 筑摩書房.
- 南不二男(1972)「日常会話の構造：とくにその単位について」『言語』1(2), pp.108-115. 大

修館書店.

- 南不二男(1981)「日常会話の話題の推移：松江テキストを資料として」藤原与一先生古稀御
健寿祝賀論集刊行委員会(編)『方言学論叢 1：方言研究の推進』, pp.87-112. 三省堂.
村岡英裕(2003)「アクティビティと学習者の参加：接触場面にもとづく日本語教育アプロ
ーチのために」宮崎里司・マリオット,ヘレン(編)『接触場面と日本語教育：ネウストブ
ニーのインパクト』, pp.245-259. 明治書院.

《英語文献》

- Albert, S., & Kessler, S. (1978). Ending Social Encounters. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14(6), 541-553.
- Atkinson, M. A., Cuff, E. C., & Lee, J. R. (1978). The Recommencement of a Meeting as a Member's Accomplishment. In Schenkein, J. (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, 133-53. New York: Academic Press.
- Bardovi-Harlig, K., Hartford, B. A., Mahan-Taylor, R., Morgan, M. J., & Reynolds, D. W. (1991). Developing Pragmatic Awareness: Closing the Conversation. *ELT Journal*, 45, 4-15.
- Boden, D. (1994). *The Business of Talk: Organizations in Action*. Cambridge: Blackwell.
- Bolden, G. (2008). Reopening Russian Conversations: The Discourse Particle –to and the Negotiation of Interpersonal Accountability in Closings. *Human Communication Research*, 34, 99-136.
- Button, G. (1987). Moving out of Closings. In Button, G., & Lee, J. R. (Eds.), *Talk and Social Organisation*, 101-151. Clevedon: Multilingual Matters.
- Button, G. (1990). On Varieties of Closings. In Psathas, G. (Ed.), *Interaction Competence*, 93-147. Lanham: University Press of America.
- Button, G. (1991). Conversation-in-a-Series. In Boden, D., & Zimmerman, D. H. (Eds.), *Talk and Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*, 251-277. Cambridge: Polity Press.
- Button, G., & Casey, N. (1984). Generating the Topic: The Use of Topic Initial Elicitors. In Atkinson, M. J., & Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 167-190. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H., & French, W. J. (1981). Telephone Goodbyes. *Language in Society*, 10, 1-19.

- Clayman, S., & Heritage, J. (2002). *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Drew, P. (1992). Contested Evidence in Courtroom Cross-Examination: The Case of a Trial for Rape. In Drew, P., & Heritage, J. (Eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, 470-520. Cambridge: Cambridge University Press.
- Drew, P., & Heritage, J. (1992). *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Francis, D. & Hester, S. (2004). *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. London: Sage Publications.
- 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根(訳)(2014)『エスノメソドロジーへの招待：言語・社会・相互行為』，ナカニシヤ出版.
- Garfinkel, H. (1967). *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places*. New York: Free Press of Glencoe.
- 丸木恵祐・本名信行(訳)(1980)『集まりの構造：新しい日常行動論を求めて』，誠信書房.
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hartford, B. S., & Bardovi-Harlig, K. (1992). Closing the Conversation: Evidence from the Academic Advising Session. *Discourse Processes*, 15, 93–116.
- Heath, C. (1986). *Body Movement and Speech in Medical Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Heritage, J. (2005). Conversation Analysis and Institutional Talk. In Fitch, K. L., & Sanders, R. E. (Eds.), *Handbook of Language and Social Interaction*, 103-147. New York: Routledge.
- Heritage, J., & Clayman, S. (2010). *Talk in Action: Interactions, Identities, and Institutions*. Malden: Wiley-Blackwell.
- Jefferson, G. (1973). A case of Precision Timing in Ordinary Conversation: Overlapped Tag-Positioned Address Terms in Closing Sequences. *Semiotica*, 9(1), 47–96.
- Kendon, A. (1990). *Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounters*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kendon, A., & Ferber, A. (1973). A description of Some Human Greetings. In Michael, R.

- P., & Crook, J. H. (Eds.), *Comparative Ecology and Behaviour of Primates*, 591-668. New York: Academic Press.
- 佐藤知久(訳)(1996)「人間の挨拶行動」菅原和孝, 野村雅一(編)『コミュニケーションとしての身体(叢書・身体と文化)』, pp.136-188. 大修館書店.
- LeBaron, C. D., & Jones, S. E. (2002). Closing up Closings: Showing the Relevance of the Social and Material Surround to the Completion of Interaction. *Journal of Communication*, 52, 542–565.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 安井稔・奥田夏子(訳)(1990)『英語語用論』, 研究社出版.
- Levinson, S. C. (1992). Activity Types and Language. In Drew, P., & Heritage, J. (Eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, 66-100. Cambridge: Cambridge University Press.
- Linde, C. (1991). What's Next?: The Social and Technological Management of Meetings. *Pragmatics*, 1(3), 297-317.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In Beal, J. C., Corrigan, K. P., & Moisl, H. L. (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol.1*, 163-180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Mehan, H. (1979). *Learning Lessons: Social Organization in the Classroom*. Cambridge: Harvard University Press.
- Mondada, L. (2009). Emergent Focused Interactions in Public Places: A Systematic Analysis of the Multimodal Achievement of a Common Interactional Space. *Journal of Pragmatics*, 41(10), 1977–1997.
- Robinson, J. D. (2001). Closing Medical Encounters: Two Physician Practices and Their Implications for the Expression of Patients' Unstated Concerns. *Social Science & Medicine*, 53, 639-656.
- Robinson, J. D. (2012). Overall Structural Organization. In Sidnell, J., & Stivers, T. (Eds.), *Handbook of Conversation Analysis*, 257-280. Cambridge: Cambridge University Press.
- Robinson, J. D., & Stivers, T. (2001). Achieving Activity Transitions in Primary-Care Consultations: From History Taking to Physical Examination. *Human Communication Research*, 27, 253-298.

- Sacks, H. (1987). On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation. In Button, G., & Lee, J.R.E. (Eds.), *Talk and Social organization*. Clevedon: Multilingual Matters, 15-22.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language*, 50, 696-735.
- 西阪仰(訳)(2010)『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』, 世界思想社.
- Schegloff, E. A. (1968). Sequencing in Conversational Openings. *American Anthropologist*, 70(6), 1075-1095.
- Schegloff, E. A. (1998). Body Torque. *Social Research*, 65(3), 535-596.
- Schegloff, E. A. (2000). On Granularity. *Annual Review of Sociology*, 26, 715-720.
- Schegloff, E. A. (2002). Opening Sequencing. In Katz, J. E., & Aakhus, M. (Eds.), *Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance*, 326-385. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平英美(訳)(2003)「開始連鎖」富田英典(監訳)立川敬二(監修)『絶え間なき交信の時代：ケータイ文化の誕生』, pp.418-494. NTT 出版.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, Vol.1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327.
- 北澤裕・西阪仰(訳)(1997)「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学：知と会話』, pp.175-241. マルジュ社.
- Sidnel, J. (2010). *Conversation Analysis: An Introduction*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- West, C. (2006). Coordinating Closings in Primary Care Visits: Producing Continuity of Care. In Heritage, J., & Maynard, D. W. (Eds.), *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients*, 379-415. Cambridge: Cambridge University Press.
- White, J. C., Rosson, C., Christensen, J., Hart, R., & Levinson, W. (1997). Wrapping Things Up: A Qualitative Analysis of the Closing Moments of the Medical Visit. *Patient Education and Counselling*, 30(2), 155-165.
- White, J., Levinson, W., & Roter, D. (1994). "Oh, by the Way ...": The Closing Moments of the Medical Visit. *Journal of General Internal Medicine*, 9, 24-28.

- Wright, M. (2011). The Phonetics-Interaction Interface in the Initiation of Closings in Everyday English Telephone Calls. *English as a Lingua Franca*, 43(4), 1080–1099.
- Zimmerman, D. H. (1992). The Interactional Organization of Calls for Emergency Assistance. In Drew, P., & Heritage, J. (Eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, 418-469. Cambridge: Cambridge University Press.

各章と既発表論文・口頭発表との関係

【1章】

新規執筆

【2章】

新規執筆

【3章】

居關友里子(2011)「会話終結の構造と予測可能性—制度的会話と日常会話の比較から—」, 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科 中間評価論文 第5章.

【4章】

居關友里子(2012)「制度的会話における会話終結の予測可能性—実習反省会の分析から—」, 第29回社会言語学会研究大会, 東京, 桜美林大学.

【5章】

居關友里子(2013)「会話と活動の関係から見る会話終結—日常追跡法による大学生の会話を中心に—」日本コミュニケーション学会『ヒューマン・コミュニケーション研究』41, pp.17-38.

【6章】

居關友里子(2015)「共在状況に生じる「活動」の境界—実習合宿における学習場面の観察から—」, 第36回社会言語学会研究大会, 京都, 京都教育大学.

【7章】

居關友里子(2013)「「単位としての会話」に必要な要素とはなにか—終結の手続きと接触の切斷および制度性に着目して—」, 第31回社会言語学会研究大会, 東京, 統計数理研究所・国立国語研究所.

【8章】

新規執筆

全ての既発表論文・口頭発表に加筆および修正を施している。